川柳塔

創刊大正十三年　通巻八八四号

日川協加盟

同人特集・私の一句

No. 884

一月号

第7回 全日本川柳誌上大会

日本の全柳人が、だれでも、どこからでも参加できる「全日本川柳誌上大会」を昨年につづいて開催します。日川協年次大会・国民文化祭文芸大会と並ぶ社団法人全日本川柳協会の権威ある三大年間行事ですので、こぞってご参加ください。

課題と選者（各題2句・連記）

「道」 西谷 東山 ― 泉 比呂史 共選
「溶ける」 西来 みわ ― 兵頭まもる 共選
「客」 福岡 竜雄 ― 吉岡 茂緒 共選
「トリック」 濱野 奇童 ― 平井 吾風 共選
「展望」 本庄 快哉 ― 西出 楓楽 共選

第二次選者 仲川たけし 礒野いさむ 橘高 薫風
斎藤 大雄 吉岡 龍城

参加費 2000円（投句料・『平成柳多留』第7集代）

賞 平成柳多留賞・川柳大賞・NHK会長賞・㈳日本青少年育成協会会長賞・㈳全日本川柳協会会長賞・全日本川柳誌上大会賞・秀作賞

締切 平成13年3月10日（土）

発表・表彰 平成13年6月・第25回全日本川柳新潟大会

参加方法 所定用紙に各題2句と雑詠1句を書き、参加費と共に左記へ（用紙は請求くだされば送ります）。

〒530-0041 大阪市北区天神橋二丁目北1―11―702
社団法人 全日本川柳協会
電話 (06) 6352―2210
FAX (06) 6352―2433

本のことならご相談を…

●川柳・俳句・短歌集
●画集・写真集・絵本
●社史・小説・エッセー
●創業・喜寿を祝う記念誌
●故人を偲ぶ追悼誌
●郷土誌

図書出版 教育情報出版
〒557-0055 大阪市西成区千本南1-12-8
TEL 06-6658-8741(代) FAX 06-6652-2928

謹賀新年

河内天笑

二十一世紀明けましておめでとうございます。皆様方とご一緒に元気でこの新しい世紀を迎える事の出来たよろこびも併せておめでとうございます。

大正十三年（一九二四年）二月に麻生路郎先生が『川柳雑誌』（昭和四十年十月に現在の『川柳塔』に改題）を創刊して七十七年目に当る今年路郎生誕の地、広島県尾道市に路郎・葭乃比翼の句碑が建立される運びとなりました事は誠に喜ばしい限りであります。

しまなみ海道全開通を記念して山陰は松江から山陽の尾道そして四国は今治、松山、高知に至る経路を「文学ルート」に指定し、その記念としての第一回川柳募集に応募された川柳塔社相談役の黒川紫香氏が大賞を得られ、見事に川柳塔のミレニアムを飾って下さいました。

文学ルートに尾道市が指定された関わりから橘高薫風名誉主幹が何回も尾道市に足を運ばれ市の要人と折衝を重ねられたこと、また五名の市の要人が全て路郎びいきであった事など好条件に恵まれ、瀬戸内海を見渡す絶好の位置にお二人の句碑を建立出来る運びになった事は、路郎の愛弟子薫風氏の執念が実らせたものだと受けとめています。

それは文豪志賀直哉の旧居跡へあと五十メートルという坂道の踊り場で、歌碑と詩碑が二基建っている間の空地を提供されたのです。

歌碑は元アララギ派で宮中歌会始めの選者山下陸奥の、詩碑は「出家とその弟子」で知られる倉田百三のものです。この真ん中に路郎・葭乃先生の句碑が除幕される事は我々にとっては夢のような現実が実を結ぼうとしているのです。

ことし七月の路郎忌句会も除幕式に合わせて尾道の公民館で開催できればなどとも考えています。夢は膨れてこれを機に尾道に川柳塔のフランチャイズを一つふやすことも夢ではない……などと思いは尽きません。

「今まで抜けてはれへんお方、これから抜けまっせェ」と眼鏡をくるっと返して、あのやさしい眼差しを配られた西尾栞元主幹の七回忌が、この五月にやって参ります。

十数年も前の事ですが、松江大橋のたもとの旅館での句会前夜祭の席で、床柱を背に頼まれた色紙に筆をしたためる栞先生の姿がありました。左手に色紙を右手は筆のちょん先をつまんですらすらと、何とも達者な筆運びを目の前にして「すごい!!」と感じ入った私でした。以来私も筆のちょん先をつまんで書く方法に徹しています。

栞先生のあの潤いのある枯れた字には程遠いものの、私に目標を下さった故栞主幹には今も最敬礼です。

二十一世紀幕明けのことし、元気で楽しい一年でありますように、お祈り致します。

座右の句

北国になお北のあり流氷よ　（薫風）

私の句

窓に石投げた音から物語　唐住実

川柳塔一月号目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

巻頭言　謹賀新年……河内天笑…（1）
重なるご恩を戴いて……黒川紫香…（2）
川柳塔（同人吟）……河内天笑選…（4）
■特集　新世紀を迎えて……（50）
波多野五楽庵・仁部四郎・政岡日枝子・小島蘭幸・西村哲夫
大空のこころ（120）〔最終回〕……橘高薫風…（53）
自選集……（54）
『寺尾俊平句集』評　花の光りの中へ……橘高薫風…（59）
水煙抄……板尾岳人選…（62）
秀句鑑賞［同人吟……玉置重人…（60）
　　　　　水煙抄……成重放任…（103）
私の一句〈同人特集〉……（88）
■私の川柳　川柳塔誌は私の川柳の師……斉藤劦…（104）
川柳の群像　波部白洋……東野大八…（106）
誹風柳多留二四篇研究 25……（108）

重なるご恩を戴いて

黒川紫香

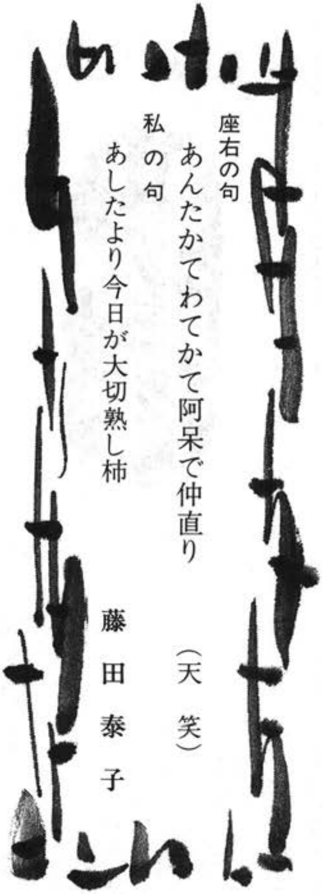
昨年は思わぬ賞を二度も貰いそれも東京、松江と関西を離れての受賞、齢九十三「行けるかな」と家族の心配をよそに旅が出来たのも健康であったなればこそと感謝して居ます。

それは昨年春出版しました句文集『地球の塵』に載せました恩人、恩師、先輩達は勿論周りの方達のご支援によるものと有難く思っております。ここにもう一方で健康上の恩人を忘れていましたので書かせて貰います。

私が八月児の早生児だったものですから周りから「こんな小っちゃな子育つやろか」と心配され、おまけに当時の風習として親の厄年に生まれた子は、捨て子をして厄払いをしなければいけない、と言うので棄て子をされて叔母に拾われ、半年育てて貰うと言う因縁付きの子供でした。小学校へ上がっても体操の時間は勿論、遠足等も参加出来ずポツネンと校舎で待つ情けなさと、流行した肺病で上から順に子供を失った苦しみと焦りで、母は心配をして名医と聞けば飛んで行き私を診てもらい、鍼灸その他良いと聞くと、少々の遠方でも私を連れて行きました。

それは五度目の転校先で中津第一小学校四年の時、母が私の身体のことで教員室へ相談

愛染帖……波多野五楽庵選…(110)
日本大正村おんさい川柳まつりに参加して……片岡智恵子…(113)
茴香の花……西出楓楽選…(114)
　「年」……青戸田鶴選…(116)
一路集「客」……井上森生選…(116)
　「絵馬」……浅野房子選…(117)
初歩教室「世」……吐田公一…(118)
■句集紹介『いのち』……都倉求芽…(120)
北　勝美さんを悼む……金井文秋…(121)
十二月本社句会……(122)
各地柳壇（佳句地十選／高島啓子）……(126)
■閑人閑話　私の旅行ノート……田中正坊…(139)
柳界展望……(140)
国民文化祭・ひろしま2000開催……(142)
一月各地句会案内……(178)
■編集後記……楓楽・希久子…(180)



座右の句
あんたかてわてかて阿呆で仲直り　（天　笑）

私の句
あしたより今日が大切熟し柿　藤　田　泰　子

をしに行き、お会いしたのが佐治という小肥りでお腹が大きな教頭先生で、母から委細を聞かれるといとも簡単に「何処も悪い所がなければ運動をやらせなさい」と言われ、担任の先生にも相談をされて、体操のほか歩いたり走ったり、近くの新淀川の河川敷でみんなと一緒に相撲、そして野球など、率先してさせられました。狭い校庭だったので少し大きな打球が飛ぶと校舎の窓ガラスをわっても、佐治教頭は嫌な顔もせず自費で弁償してくれました。それらが良かったのか小さいながらも身体が出来て、卒業するまで体が悪くて休む事はありませんでした。

社会人になってからも時の上司に引っ張り出されて、社内野球チームに参加し、職業野球阪急の古いユニホームを着せられ、社外大会に補欠として参加した事もありました。

退職してからも畏友正本水客君と、川柳を作りつつ旅を楽しみ、山を登り知らない所を歩き、いろんな方達と語り合う事の出来たのも、長寿の秘訣と皆様のご恩と感謝しております。今回賞を戴きました尾道を題材にした

坂道の高さで見える港町

の句も一つの現れだと思います。

私は受けた母の恩は勿論の事、生ある全てからご恩を貰っているものと思っております。

みんなから支えられてる長寿かな
嬉しくて楽しい今日も人と逢う

川柳塔

河内天笑選

竹原市　小島蘭幸

僕の影ひとつの塔に見えてくる
携帯電話あなたをいつもてのひらに
うまい水うまい豆腐を遠くまで
一パーセントのチャンスに賭ける眼が好きだ
犬と僕　静かに本を読んでいる
恐ろしい絵だ　犬の影僕の影

羽曳野市　徳山みつこ

休肝日あなた時間をありがとう
白菜がうまくつかったハイトーン
白菜に抱かれて映えるタカノツメ
錆びたかな共鳴板が震えない
日本はまだ住めますか渡り鳥
大根ぐんぐんとても私は追いつけず

富士宮市　渥美弧秀

幸願う雄叫び上がる初日の出
敬老の湯呑み茶碗に艶が出る
ピカソ展青の世界が火花する
この空は遠い故郷へ続くのだ
晩年を静かに刻む砂時計
新年の富士に孤高の極まりぬ

尼崎市　田辺鹿太

晴れ晴れと世紀を跨ぐ冬の虹
五線紙をはみ出す妻の歌唱力
人事課のめがねが曇る人減らし
退院の目に鮮やかな娑婆の色
逆転の世相おんなのボディービル
坊さんもコーヒーを飲む天王寺

鳥取市　植田一京

似顔絵をまあるく描いて孫がくれ
純真なこころで唄う赤とんぼ
天真爛漫ダイエットなど止めとこう
愚かにもなれず利口になおなれず
白黒をつけてギクシャク落ち着かぬ

為残したことを数えて歳は暮れ
大阪市　西出楓楽
ダメなものダメと孫には言いにくし
罪人にいつかされそう喫煙者
誤字ひとつあって親しみ湧く手紙
歳末の街で亡夫とすれ違う
愚痴を聞く顔作るのは難しい
ちょっと洒落たこやきアテにワイン飲む

吹田市　山本希久子
初鏡長寿の母を真ん中に
脱皮して迎える巳年お元日
不可能はなし絶対というもなし
昼の月思い違いが多くなる
失くした財布大難除けてくれたのか
ヘルシーな風　菜園に吹きわたる

宝塚市　嵯峨根保子
四方拝そんな気にさすお元日
巳の歳へ最後の脱皮こころみん
かたつむりあれで走っているのです
奥さんの気前で店はもっている
太鼓判押されて余命こわくなる
いい時に辞めはったとはご挨拶

堺　市　桑原道夫
キリン世に生まれ最初に躓けり
彼女とは友達のまま鰊そば

生ぬるい葡萄を舌でもてあそぶ
門灯の守宮よ俺は酔うている
洗車場に虹ガソリンの匂う虹
防波堤水平線は近づかず

米子市　林瑞枝
太陽と波長合わせている余生
三百年は生きる茶の木が妻木晩田
静脈の浮いた両手ではぐ蜜柑
落ちてきた　やもりは荒木又右衛門
地震あと庭の灯籠しゃんと立ち
二の沢で呼んで答えぬ石を積む

鳥取県　新家完司
しあわせな色でサンマが焼き上がる
職業を問われる度に口ごもる
独学で覚えたタバコ酒おんな
地蔵さまの頭に柿が置いてある
冷や飯を甘くなるまで噛みしめる
無言電話きっと神さまからだろう

富田林市　藤田泰子
黄金の海に夕日が燃えている
そろそろと思いまだまだとも思い
ロゼワイン独り聖歌を聞きながら
十四時間飛びあこがれに会いにゆく
コンビニの味に足りないものがある
山盛りにするといつでも売れ残る

枚方市　寺川弘一

一輪挿しの孤高に出会うにじり口
病院で治らないから行くお寺
あの世に着けば貧乏神を先ず裁く
熱心に新車のうちはよく磨く
よくわかります終楽章のリフレイン
新婚のうちは返事が先に来る

西宮市　林はつ絵

脳天を叩かれるよう年明ける
絆にもときどき砥石当ててみる
ど忘れと片づけられぬ貌をする
パソコンを習い流れを追いかける
薄っぺらそうで悔みの言葉出ず
遠慮せず喋くる芋の煮ころがし

茨木市　藤井正雄

年金の暮らし財布の無重力
墓参りまたねと墓に告げて去る
子供みな味方につけた妻の勝ち
答弁の台本頁間違える
同じこと考えてたとずるい人
髪洗う入道雲のような泡

米子市　田中亜弥

手のひらの広さで川は流れかえ
野仏の向こうにひろい海がある
霧の中 仏の住まいこのように
山が動いてみんなで寝ずの番をする
車座になると度胸がついてくる
ゆうほうが来るのか芒野も騒ぐ

東京都　播本充子

新世紀遊び心を膨らませ
リーダーの魅力へ運も人も寄り
可愛いと言われ動悸が止まらない
パソコンの超カンタンが解らない
姑が来て東京弁になる茶の間
病院の中はストレスがいっぱい

横浜市　菱田満秋

新世紀でも東から陽は昇る
幸せを独りかみしめてる手酌
愛してる何度聴いてもよい言葉
青信号でも右左見て渡る
中吊りが煙草売ってる禁煙車
紅葉に飽く渋滞のいろは坂

川崎市　和泉あかり

小さい庭ちいさい秋がきて座る
あとすこし家事を待たせるキーボード
見るだけのつもりをうまく買わされる
うきうきと乗ってしまった口車
人の名が喉でつかえて落ち着かず
大吉のみくじ期限が書いてない

弘前市　今　愁女

新顔の猫がねずみをくわえて来
天引きで前金払う介護法
オリンピック女の歴史変えてゆく
迷った末にやはり一年日記買う
シクラメン一鉢飾り冬を越す
年明けもきのうと同じに雪を掻く

岸和田市　原　さよ子

口裏を合わせる嘘で汗をかき
エピソード秘めた指輪は宝もの
クラス会私もあんなおばあちゃん
若い気に古稀の体がついてこず
軽率な言葉のつけがもどってき
医者通い長く続いて友ができ

和歌山市　田中　みね

おこがましい席へ呼吸を整える
口下手な貴方いい人だと思う
宴席の上とは申せ無礼講
宴たけなわ最早淑女を保てない
命懸けで芋掘り起こす急斜面
すべてに堪能憎らしいけど友なのだ

岡山県　大石　あすなろ

逆風へ少し弱気になった靴
大声の夫にわたし依存症
一本の道しか知らぬ足の裏
ペンだこの痛む約束してしまう
終章へもたれ上手な手が伸びる
少年の胸にひびけよ母の鈴

吹田市　石原　靖巳

先人の霊ありがたし塔供養（塔碑合祀法要）
妻がいるそれだけでいい秋夜長
さんま焼く幸せのある秋が好き
メニュー見てやおら頼んだ掛けうどん
ご自愛と言うから無理に昼寝する
赤軍派むなしいピエロだと思う

和歌山市　川上　大輪

よく笑う人の後ろへついて行く
人生はいろいろだからマイペース
とりあえず味方の顔をしていよう
拝啓も敬具も他人行儀だな
頼りない男と思う迷い箸
お土産に藁一本を持たされる

和泉市　岡井　やすお

お雑煮へ入れ歯外して家長の座
健やかに卒寿と二十一世紀
和泉五社巡る年頭足試し
お年玉遣る孫二人だけになり
貧困と戦は御免新世紀
死ぬまでに宇宙歩いてみたいもの

和歌山市　堀畑靖子

新米のおにぎり私太らせる
好評につき白菜をまた漬ける
結婚願望ないが恋人欲しいとさ
ピンピンコロリそんな人生だといいな
若者をなだめるツボを知っている
町内の掃除ガンバリ過ぎた腰

寝屋川市　籠島恵子

冬の天かえすがえすも母の事
ふるさとの変わらぬものに水の音
咲かせて返す去年もらった花の種
ヒレ酒を呑んで大海遊泳す
すこしくらいの軌道修正許されよ
ホップステップ二十一世紀へジャンプ

京都市　高島啓子

元旦やかまぼこ型のお茶畑
巳さんも可愛くなって縫いぐるみ
生きがいは散歩と犬は解り良い
頼まぬと歯石は取らぬ歯医者さん
化粧パフ高野豆腐に似て洗う
尼さんのベンツ運転するも京

岡山県　山本玉恵

温い掌にふれると風は狂い勝ち
夢下さい　私只今無為無職
苦しみを抜けて来たのかあの人も
ひとりぼっちの海かも知れぬこの先は
正直な鏡と今日もにらめっこ
格好良くもう歩けないうしろ影

宇部市　平田実男

妹のことは心配せず眠れ（義弟急逝　2句）
魔のカーブと言うてたとこで事故に遭い
よく回る舌で味方も敵も増え
死ぬ時が定年ですと言う農夫
大臣になると出て来るスキャンダル
君が代もいいなと思う金メダル

米子市　政岡日枝子

朗々と我流の節で唄ってる
だんご屋で風を聞いてる墓参り
最敬礼相手の靴がよく光る
大山に留守を頼んで旅に出る
背が違う人とも歩調合わせてる
独りいて素敵な皿は使わない

羽曳野市　三好専平

回り舞台の下でこおろぎ鳴いている
出発に別れの銅鑼が鳴りひびき
棺桶のなかで優しい顔になり
パレスチナの子供が石を投げている
ココナッツの汁には青い雨の味
僧歴も徴兵歴もあるガイド

黒石市　相馬一花

二時間も弾くと腹減る津軽三味
名門の女性は知らぬ夜鳴きそば
速足で歩けと怒鳴る万歩計
美人には多く入れたいのし袋
再婚でやっぱり出来ぬ披露宴

黒石市　千葉風樹

女の蜜に押されてブランコに揺れる
神様の詩を売りに来る襤褸たち
初雪がこんなに好きな竹とんぼ
万華鏡　女の爪に見えてくる
拒否権を使いそびれて肝障害

弘前市　一戸ツネ

春を舞う風の音からユートピア
四捨五入夢は捨てない青写真
露天風呂　紅葉と濡れる羅漢さま
じょんからをバネに五勺の米を研ぐ
七度の巳の年過ぐる手も足も

弘前市　高瀬霜石

ひとりよりふたり明日を支え合う
平行線とところどころにある涙
本物の人気はじわりじわりくる
少年はみんなマグマを抱いている
いい人と言われて崖っぷちに立つ

弘前市　小寺花峯

木枯しは台詞を持たぬ北の貌
柔らかい爪を切ってる風呂上がり
温室で咲かせた花の頼りなさ
日向ぼっこ散りゆくバラに恋をする
水漏れの音が私を鬱にする

弘前市　高橋岳水

着膨れの夫婦の背なへ舞う落葉
冬に入る少し気になる心電図
食うだけの貯えのない節くれ手
秋灯下　柳誌ひもとく時満ちる
長生きは女の特許施設の灯

弘前市　宮崎ヒサ子

感嘆詞浴びてもみじが風に舞う
血の絆いつかさわさわ澄んでくる
寂寥や老舗静かにまた消える
しんみりと海ももみじも見える宿
天子様の飲まれた水を飲んでみる

弘前市　蒔苗果林

甘いあまいりんごと歌う軽い舌
いつも来る友は正直　鳩　雀
富士山の恋人岩木吾が大家
サミセンのジョンカラ秘めるアイヌ貌
賢くて時には猿にだまされる

弘前市　須郷井蛙

眼鏡入れ命の次に大事にし
綿帽子のせて津軽を無口にし
月毎に森が小さくなってゆく
バーゲンのチラシも見ない老夫婦
幸せも一緒に計る体重計

青森県　西谷大吾

口笛を吹けば未来が弥する
失いしものに気づかず追う未練
蓑虫が宙ぶらりんの世に生きる
午後の陽はいつか侘しい彩になる
やがて雪　津軽の空は重く垂れ

砂川市　大橋政良

嘘ついた数だけ嘘を返される
悪人が勝って訴訟が幕となる
背信の氷雨を避ける傘がない
内申書小数点がついている
この傷が自負のささえになっている

富山市　舟渡杏花

口が滑る　とたん複利で跳ね返る
ああ命　自分の骨は拾えない
韓国語でしじみブツブツ独り言
身を捨てた人の微笑神に見え
元気！元気！と呪文　余生の空元気

富山市　酒井輝

押しボタン増えて老後がややこしい
葬儀社に波状攻撃される歳
口下手のオフレコひとつ座を沸かせ
補聴器を外し世間を円く聴く
宇宙行き切符片道だけ欲しい

富山市　島ひかる

甘酒にほんわかと酔う初詣で
一椀をとろとろにする雑煮餅
カビ臭くなった日の丸待つ日の目
ブロッケン現象ゆめの夢の中
生命を宿す地球に満ちる愛

横浜市　小野句多留

いつ死ぬかわからぬ所に神がいる
自分史のぼかした個所の見栄っぱり
倒産の女性社員の身を案ず
血圧を三度測ってまあいっか
救急車乗って私は主人公

横浜市　菊地政勝

主導権妻に握らせついてゆく
妻よりも息子の嫁のセンス買い
あと戻り出来ぬ人生風まかせ
子の理屈頷きつつも妥協せず
揺るぎなき男で居たし新世紀

横浜市　清水潮華

こころころと忘れメモ帳まで忘れ
恐ろしい事を優しい顔で言う
手を合わす食事孫にも伝えられ
菊一輪祝ってくれた誕生日
どうしても言わねばならぬ十二月

東京都　後藤早智

内視鏡　心の傷も覗いたか
嫌煙権パイプの置場までなくし
庭園へ極楽の色見に出かけ
紫も混じり深山燃え盛る
マンションのグリルでサンマそっと焼き

町田市　竹内紫錆

家系図で寡黙な親子たどられる
立ち食いと立食　哀と歓めぐる
対面の最多の医師と茶も飲まず
老いて地図買って取り組むのは細字
新郎へ讃美歌　伯父の隠し芸

大宮市　八田敏

好きな菊咲かせ独りの酒を酌む
泡立草咲いて荒地も秋に変え
金婚へ励ます妻の車椅子
体調を崩すと墓をせかされる
満期なき終身保険掛けて生き

静岡県　薗田獏沓

内紛がふとした隙間から洩れる
嗚呼曽孫三人得たり秋晴れる
ハンカチを振ってさよならしたつもり
フルネーム呼んでくれるは診察室
愉しくて老いを忘れた旅の宿

愛知県　早川盛夫

年金でやっていけぬが生きていけ
茶碗蒸しぐらいは出来る日曜日
魂のないロボットに苛められ
雑魚でよしひとり気儘なサングラス
排気音何考えているのやら

京都市　小西未佐子

風情なら鴨の川より高瀬川
ほとぼりも冷めた頃だろ出て行こう
おたやんの飴になるようパックする
刺さないで血小板が低いから
雑煮火は大文字から頂こう

京都市　山海友煕

緞帳が上がると二十一世紀
鴨川も祇園も二十一世紀
蛇口から溢れる二十一世紀
深呼吸しましょう二十一世紀
髪型を変えて二十一世紀

京都市　都倉求芽

初詣で疑いなどは持つまじく
大晦日より1分早い初日の出
元日やまたはじめから数え唄
年金は二十一世紀の参加賞
二十一世紀は地球のキリトリ線

亀岡市　井上森生

里の秋丹波は黒い豆ずくし
錦秋の京のをどりも千年紀
松茸の香りが運ぶ郷の夢
憂国の叫びを今に蓮の花（日蓮開宗七五〇年）
ＩＴのネット地獄も天国も

京都府　稲葉冬葉

ボタン掛け違えて嫁の手が温い
花鋏こころの意気に跳ねる音
とても素晴らしいお髭を見てあきず
宵越しのお金は持たぬ鬼ごろし
セミプロにされてパチンコ屋が嫌う

奈良市　米田恭昌

廃業の思いは巡る走馬灯（廃業建て替え　2句）
8ミリ記録捨てるか思案まだ続く
故郷からの母の便りにある訛り
生一本節くれた掌は損ばかり
悠久の平和を祈る新世紀

奈良市　天正千梢

むなしさも知らず鈴虫なきつづけ
神様にあたえられしかこの試練
帰る日のいつになるやら三宅島
老いみつむ手足なでつつする感謝
しあわせは良き嫁　神にさずけられ

大和郡山市　坊農柳弘

初夢でＵＦＯもどきに乗ってみる
ワープロに筆奪われた古希の腕
御来光　新世紀への幕上がる
玉砂利を踏んで歩いた伊勢参り
年毎に絵馬も小ぶりの初詣で

大和高田市　岸本豊平次

古希半ば幹事もばてたクラス会
人生は点だけでないと子を諭し
コスモスがほめられ不満な休耕田
この癌では死なぬとガンを告知され
食うて寝て病院食が消化せず

橿原市　居谷真理子

小器用なだけの仕事を褒められる
不機嫌な声は幸せすぎるから
ダンディでしょっちゅう風邪を引いている
あの世など信じずこの世の恋をする
新米を肴に飲むこと教えられ

香芝市　大内朝子

極楽橋渡り高野のひととなる（合祀祭　5句）
コンビニの姿はあらず高野山
しみじみと命をおもう奥の院
合掌へお顔の浮かびくる合祀
過去帳におさまるわたしどのあたり

奈良県　渡辺富子

クッションへ五感休めて聞くショパン
時忘れ思索の迷路さまよえり
水面下で動き始めた黒い影
毒盛りたい男一匹飼っている
ぺんぺん草　盛者必衰垣間見る

和歌山市　牛尾緑良

おめでとう二十一世紀に生きる
冬の海神話を語り継ぐように
再生紙　過去はきっぱり捨てたはず
味噌汁が美味いと思う寒い朝
方舟が待ってはいない新世紀

和歌山市　桜井千秀

曾孫予定日２００１年お元旦
お洒落着は鎧しっかり身につける
上首尾へやきもきしてるのは自分
ぶつかってみよう勝負は時の運
満更でなさそううしろ従いてくる

和歌山市　西山幸

手を振って別れは潔くしよう
勝った日も紙屑となる日捲りよ
塩胡椒振りシナリオを膨らます
運命線の上を端役のまま歩く
自分をころす数だけ落花生を噛む

和歌山市　吉村さち子

言い過ぎるよりも寡黙が丁度いい
ストレスを盾にわたしのショッピング
皆までも言わぬわたしの自負がある
スケジュールばかり組んでる秋最中
呼び水の効果に期待大きすぎ

和歌山市　福井桂香

清姫のパワーをもらう巳年春
ゆりかもめ北の便りを携えて
沸点をわきまえているスピーチだ
ポイントを数えて口唇が渇く
フロッピーの記憶にとてもかなわない

和歌山市　古久保和子

強がりは止めて喉越し爽やかに
記念写真は四十五度と決めている
空気にも水にもお金掛けている
コスモスの意外に芯の強いひと
賑やかに川を下ってきた紅葉

和歌山市　垂井千寿子

生受けてから終焉までの恩の数
煩悩をぼちぼち整理したい歳
待たせても待っても友の温かさ
古里の神社に今も守られる
十七歳の善意本物だと思う

和歌山市　福本英子

鳩に餌をやるな芝生にも入るな
挫折した人から受ける温かみ
具会一処　川柳塔碑の裏表
お土産に風邪を戴く高野山
紅葉に労りもらう重い足

和歌山市　木本朱夏

秋には秋の彩を映して水鏡
告白の前にめがねを拭いておく
猫の子のシッポと遊ぶ淋しい日
陀羅尼助あります門前町は雪
行き暮れて女人高野の初しぐれ

和歌山市　松原寿子

少し揺れ初春の炎を蒼くする
火柱の端を選んで踏む一歩
手鏡へおもい束ねて火を放つ
ひとことの罠濁流に呑み込まれ
切り替える朝だ昨日を脱ぎ捨てる

和歌山市　榎原公子

鈍感になって平和な日が続く
姑も犬もよたよた秋が往く
柿熟れて空家になった両隣
太陽も風も紅葉も独りじめ
溜飲を下ろす一カツ出来るなら

和歌山市　楠見章子

新世紀気球の上で乾杯を
大股に歩く影まで天を向く
ご縁日観光客の中を抜け
枯れ葉舞うせかせか散っているわたし
背凭れのあたりで匂うサロンパス

和歌山市　岩本美智子

海風よ息子へ運べ巳の絵凧
越冬の塒を探す蝶の舞い
北風が枯葉どっさり置き土産
歩行訓練パラリンピックに励まされ
新世紀　敗戦だけは伝えよう

和歌山市　玉置当代

辞書めくる瞳輝く趣味の会
野次馬かバカかわたしは出好きです
憧れただけで終わった初恋よ
九十一歳の母は達者で飯を炊く
気取らない裸の自分史を綴る

和歌山市　細川稚代

重ね着をする度歩幅せまくなり
ストレスを捨てにひと夜の友が来る
友が来て泣いて笑って寝てしまい
彿を偲んで登る高野道
意地張って寡婦を通した理由でない

和歌山市　青枝鉄治

産み分けのエゴ神様に裁かれる
負けるにも負け方があるプロの自負
うっぷんを晴らす酒にも税が追い
商魂の撒き餌にされている卵
遠い日のロマンを秘めている尼僧

和歌山市　池永正匍

年輪に知恵の数々秘められる
いい便り来る気配する風の音
うつの日も川は豊かに流れてる
草笛が呼んでるように月が出る
生きる為ハードルだけはどっこいしょ

海南市　谷口義男

大国が核ちらつかせ危機管理
露骨な言葉出るのは人の良い証拠
損をする事を知ってて意地を張る
七癖が此処にも有った靴の底
伸びる芽を伸ばしてやらぬ親のエゴ

海南市　三宅保州

本年の賀状は謹賀新世紀
娘のことは嫁に相談しています
やぶ医者か名医かわからないカルテ
お互いの動き気になる共犯者
飛行機も新幹線も速すぎる

和歌山県　中後清史

子を諭すママの優しいオブラート
生かされるよりも生き抜く道を選る
仮面脱ぎ捨ててほぐした肩の凝り
すっきりとしない話が胃に溜まる
門構えだけじゃ判らぬ幸不幸

箕面市　椎江清芳

つい酒が言わした事にして本音
夫婦とも讃岐ねっからうどん好き
雪あれば雪を友とし子は育ち
戒名の差はみな仏の知らぬこと
海見たく尺取虫は木に登る

箕面市　岩津ようじ

ドクターストップ以来人前では飲まず
パトロンの話題に一座盛り上がる
こんな時　君　奥さんに勝てるんか
ヤケクソのようにも見える森総理
ジャンケンで決めたらどうやフロリダは

箕面市　唐住　実

言い訳に舞う天井の扇風機
風止まずただ海峡の駅に寝る
当てにせぬ電気をつくる風車
預かった鍵で金魚に餌をやる
うたかたの恋の相手とそい続け

箕面市　出口　セツ子

息つめて世紀の除夜を聴く家族
生きる嘘リニューアルする新世紀
新世紀へゆっくり溜める力瘤
新世紀愛で宇宙を満たしたい
人生が神のタクトの先にある

池田市　岡本　吉太郎

賭け事に官民夢中でどこへ行く
力強くゆっくりと時流れ行く
無理承知言わねばならぬ事がある
人生は賭け事のごと過ぎて行く
すっきりと目覚め良い事ありそうな

池田市　栗田　久子

新世紀迎える鐘も百八つ
記憶から消えてはいない震度七
捏造で揺らぎ出してる出土品
うつむいた南天首をあげたかろ
そりかえり紅にもえたつシクラメン

豊中市　安藤　寿美子

みほとけの光背としてコブラの首
窓あけて二十一世紀の寒の風
思案などせず行きあたりばったりで
ジパング手帳これだけでいい旅支度
菊花展　亡き父に会う心地して

豊中市　田中　正坊

「十年日記」二冊目を書く新世紀
この日記書き終わったら米寿なり
これからの余命は神にゆだねよう
終点へそろりそろりとまいろうか
明日の事分からないから生きられる

豊中市　吉田　あずき

ついに来た二十一世紀の日の出
生きて来た残滓どこへ掃き捨てる
賑やかな正月を待つ雑煮箸
晴れの日のリズム女を蝶にする
新人の絵の具思わぬ色がある

豊中市　井上　直次

忠告に貸す耳持たぬ上昇期
一生に一度のチャンスささやかれ
知ったかぶり値打ち下げたと君知らず
ほらを吹く心の奥の淋しさに
自分史の粉飾せせら笑われる

吹田市　野下之男

初詣で梯子させてる宝籤
嫁はんの俳句褒めてる下心
猛犬も息を抜いてる良い寝顔
初恋が風の便りで生き返り
角切場　鹿も爽やかランニング

吹田市　古川喜美子

忘却もまた安らぎよ日向ぼこ
お布団を一杯干して留守らしい
喜怒哀楽思えば泡のようなもの
浮雲よ肩肘張った日もあった
背のびばかりしてると骨粗鬆になる

高槻市　傍島克治

肩書の順に責任天下る
鏡だけ知ってる妻の百面相
休診日待ってたように歯が痛む
厚底のドングリもいる背くらべ
初詣での賑わいやはり神の国

寝屋川市　江口度

ストレスに妻の笑顔が効いてくる
結局はまとめて捨てる包み紙
野放しの化学自然の報い受け
蒲団干す母の居そうな菊日和
笑顔笑顔辺り気にせず手話はずむ

寝屋川市　平松かすみ

人間が天狗になって空汚染
厚底を履いて天狗の真似をする
天狗面取ってキッスが出来ました
カラフルな衣装で向かう釣天狗
思い出は天狗に泣いた村祭り

寝屋川市　岸野あやめ

初光　今こそ二十一世紀
年なりのお洒落しましょう新世紀
ひとりぐらしへ缶詰の缶たまる
誕生日美々卯で食べるうどんすき
躾糸抜かず何年寝る着物

寝屋川市　冨山ルイ子

華岡青州の子孫に出会ったり
やさしさに生きる力を授けられ
あたたかく見守る孫のアルバイト
やわらかい手だ吃度優しい人だろう
あたたかい声ゆっくりと話したい

寝屋川市　太田とし子

新しい年に振ってる錆びた鈴
絆という一字のいじめ恐ろしい
若水を貰う金魚の厚化粧
平和とはどの辺だろう人の道
破れ太鼓叩き傘寿のエネルギー

寝屋川市　坂上高栄

水面下あの手この手の選挙戦
半跏趺坐　菩薩思案の御姿
灰皿が夕べの思案物語る
地鎮祭歩幅で計る五十坪
公然と約した嘘の尻ぬぐい

寝屋川市　森　茜

ながし目をくれシャム猫とすれ違う
傍らに誰かいそうな木のベンチ
今宵満月どこかで誰か吠えている
とぼとぼと雨の匂いにかこまれる
てのひらへ溢れる光分かちあう

寝屋川市　北岡波留吉

核の無い世紀を祈る初詣で
お正月一際映える日の御旗
今年こそきっとお帰り北の島
催促をまたずに返す人の恩
まだ苦労足りぬと悔いている八十路

寝屋川市　妻谷重三

地震にも起きぬ主人と住んでます
中学でタバコ覚えてまだ飽きず
かんにんな　いつもその手に騙される
予定日に産れた子です素直です
不老不死　生ある限り夢の夢

枚方市　二宮山久

また一つ過ぎた言葉か友無口
誕生日　娘がくれた夫婦旅
みかん　柿　届く味覚のおすそわけ
振り向けばあとひと月の世紀末
健康のひけつか妻の長電話

枚方市　森本節子

フレディに未知の世界を教えられ
見る夢はテレビのドラマよりたのし
ショッピングも喫茶でくつろぐのもひとり
秋さなか通天橋は万華鏡
千両も色づき始め冬仕度

枚方市　海老池　洋

どくろから鎌首上げた男の譜
金魚泡吐くようためた妻の愚痴
僕の名が括弧の中に入れられる
少年の救い求めていた日記
酔うても忘れず薬のむいのち

枚方市　宮川珠笑

育て終え生きる同士という夫婦
争うて出ればバスにも乗り遅れ
道を間違うてすばらしい出合い
親からの電話でぶっきらぼうに切る
お地蔵を囲んで粗大ゴミ置場

枚方市　前　たもつ

一泡をふかせた話 三度聞く
妻の留守わが家の空気独りじめ
五年ぐらい若い遺影は許される
留守の家尋ねて帰る昼の月
定年で磨いた腕に出番来る

枚方市　栗林光夫

花屋さん赤に染まってクリスマス
懸崖の菊 神さまの舌のよう
銀賞の菊淡淡と咲いている
残飯の泣き声詰まるゴミ袋
TSHもうMがない生れ年

守口市　結城君子

ケーブルテレビ眼がまっ先に悲鳴あげ
女客に賑わう宿の返り花
先ず彩を次に味覚で冬林檎
ガウディの偉大さ映像から学び
新米のお陰と思う体重計

守口市　井上桂作

七五三 Vサインして宮参り
秋風が吹けば何処かで運動会
こしひかりの袋しかない米屋さん
ダイアッド名刺も要らず楽になり
花畠急な時にと葱を植え

大東市　児玉蛙

旅の妻携帯にぎり仕切ってる
あんたの方が知ってるやろと躾される
泣きながら叩き返すも孫の意地
聞き上手友の悩みも背負い込み
かくし事ばれて弱味をにぎられる

四條畷市　吉岡修

意見なしこれも僕流意思表示
営業の花形だったらしい喉
憧れて来た道だけど遠いこと
屁理屈を並べフリーターとはなんだ
奪われた娘ルンルン暮らしてる

交野市　山川日出子

パラリンピック生命があつく盛り上がる
小さいが大きく見えた蝶々さん
救急車ひかえおろうと走り去る
赤襷 噂の笑顔峠茶屋
柿ざくろどれも百円無人店

八尾市　宮崎シマ子

荒削りの不動雄々しく村守る
告げ口をする影法師ついてくる
作り笑いが消えるカメラを向けられて
言い訳は省いて妻へ黙秘権
立ち喰いそばの横一列は同じ顔

八尾市　宮西弥生

この重荷あるからわたし今日生きる
どっこいしょあなたもわたしも同世代
哲学の道でたこ焼ようはやる
毎日を流れて手足よありがとう
屋久島の杉を見つめる眼は炎

八尾市　高杉千歩

余命だとあきらめきれぬ煩悩よ
がんばっていても本音が出てしまう
はよ呆けた方が勝ちかな窓あかり
萎えていく脅えきびしい冬の月
さしすせそ塩五グラムへ今日も無事

八尾市　吉村一風

年の瀬をにっこりと呼ぶまねき書き
あんたしか無いとおだてに乗っている
スニーカーだけは若いと万歩計
ぐい呑みの土の味よし熱い燗
若いお医者にえらい叱られ頭下げ

八尾市　神原まさと

フィルムを透かせば襷掛けの母
神棚の酒で寒気を追いはらう
看護婦に待合室で起こされる
抜擢をされて死体の役をする
鮟鱇に同情がわく吊るし切り

八尾市　長谷川春蘭

菊切るを風雅の音と客の言う
ゆく秋をいくつかさねてまた会える
仲良しも時々背くこともあり
毒舌へ温かい眼が真正面
あいまいな一日でしたもう寝ます

八尾市　篠原いつふみ

久し振り褒め合っている肌の艶
口止めを携帯じっとしておれず
一輪車乗れた頃から孫が来ず
進歩せず未だ読んでる入門書
折り曲げた名刺にきつい風当り

八尾市　村上ミツ子

哲学とじっくり酒を酌み交わす
知ってると言わず知ってる話聞く
他人には妻をデフォルメして話す
がたがたの身体で抱いている炎
仏ごころは捨ててスッパリ絆切る

八尾市　村上剛治

腕組みの中で思案の芽が伸びる
ひび割れた器だましだまし使う
勉強の出来は悪いがやさしい子
度忘れは脳の休憩かも知れぬ
マッチにもある束の間の自己主張

八尾市　生嶋　ますみ

夫への好物探すバスの旅
警報器怒ったように鳴りひびき
コスモスを眺める人の優しい目
夫と腕組んで歩いたことがない
見ていないようで見ている他人様

八尾市　井尻　民

眠ってる街を汗かく万歩計
思案してみて子に好きな道選ばせる
躓いて株は当分やめにする
淋しくてつい雑踏へ足のばす
晩秋の小春日和を寺めぐり

八尾市　高橋　夕花

冬の絵は嫌い心は花ざかり
都忘れ夫に買って旅に出る
枯葉鳴る別れ言葉のように鳴る
冬のばら哀しみ色が増してくる
冬の水たっぷり飲んで堪えている

東大阪市　安永　春

ふたりして気力体力自己管理
年金に見合う年玉決めている
税とらぬリヤカーで来た土産売り（城崎旅行にて　3句）
おしめりの湯の町お客出歩かぬ
お目当のムギワラ細工見いつけた

東大阪市　指宿　千枝子

新世紀 薬味きかせる六十路坂
おじいちゃん居留守使ってテレビ見る
浮き雲よきみも私もボヘミアン
束の間の夢は泡でもよしとする
ありがとう今日はすんなり言えました

東大阪市　谷口　義

海の色 山の色にも新世紀
これ以上省略出来ぬお正月
生き甲斐は大きな声で言えません
この風邪を治してからの初詣で
携帯を連れて出掛けはりました

東大阪市　北村　賢子

何もかも許そう検査結果白
やさしさも携帯してね若い人
ヒロインに決してならぬカスミ草
雲の切れ間にやっと見つけた星ひとつ
太陽がストンと落ちて故郷こいし

大阪市　川原　章久

すかたんを互い違いに斑ぼけ
白い指 髪のトンボをさりげなく
早すぎた遺影に向かう目が潤む
慰めの言葉をくれた掌の胡桃
女涙腺上手く開閉して欺す

大阪市　津守柳伸

満足の顔弁当は空になる
童心に還してくれる鹿せんべ
風雪に耐え鴛鴦に松薫る
恙無く感謝で明ける新世紀
松竹梅活けて南の島へ発つ

大阪市　川端一歩

おかめひょっとこ凡打ばかりで笑う日々
春風に勇気の一歩ふみ出そう
大海のような仕事に挑む春
躓いて拾った石で城築く
旅の終りに満月というみやげ

大阪市　辻川慶子

節目には必ず思う師の言葉
遊びごころ少し持ってる腕時計
セピア色長い歳月経ちました
リビングに花ありほっとする時間
ゆっくりと歩くゆっくり旅つづく

大阪市　本間満津子

お帰りやす家路私の町の音
音だけのくらしに音が多過ぎて
ゆらゆら歩くので震度三気がつかず
安売りを思案の外で買っちまい
招待へ着るもの決めてから返事

大阪市　神夏磯典子

初春の花は活気に満ちている
大胆に削って芯が見えて来た
よい思案お地蔵さんに聞いてくる
雨風に預ける葦がヒントです
他人さんがうちの評価をしてくれる

大阪市　中田あい子

アベックの茶髪神妙　初詣で
怖いのは地震　雷　火事　女性
マンションの隣は近くて遠い人
かざらない言葉が本音ぽろと出す
初詣で足ふみしめる新世紀

大阪市　小糸昭子

無言にてレモンざくざく切る恐さ
物真似の上手い鳥が寄って来る
深夜便聞いて痺れる足忘れ
泡粒が揺れてグラスを昇りつめ
鼠捕る胸の痛みを残さずに

大阪市　玉置英子

うちの手摺り助けられてるのは風呂場
永かった残暑木犀今頃に
肺いとし欠かさぬ風呂の深呼吸
菊褒めた人に小菊を切って上げ
仏飯を盛ります栃の飯杓子

大阪市　川久保　睦　子

子等の夢みんな許して今ひとり
よく来たとつまみもないが酒にする
今年こそバラ色に合う靴を履く
夜目遠目きっとわたしもいいおんな
箸置きにひと枝を折る京御膳

大阪市　鈴　木　トヨ子

天才はあざやかに描く秋の色
トワイライト夢ふくらます旅の空
秋晴れにジョギングシューズ出ずっぱり
人に酔い紅葉ますます赤くなる
こだわりの松茸ごはん母の味

大阪市　井　上　白　峰

迎春の旅の宿にも屠蘇気分
無い袖を振って果した義理一つ
見え透いた虚栄諫める影法師
意地張って退く潮時を見失う
理想には遠いが夢はまだ捨てず

大阪市　寺　井　東　雲

歌いながら夜道を行けば怖くない
アダナはパンダ白黒ハッキリしている娘
頼まれても仲人出来ぬ妻家出
親子でも嘘つく事がありました
すぐ効いた薬にあった副作用

大阪市　安　達　はじめ

紅白で茶髪が演歌駆逐する
福笹に今年の欲を担ぎ行く
初天神　絵馬を掲げる受験生
耳よりな話に欲がついていく
人が人裁いて今日も暮れていく

大阪市　鶴　田　遠　野

本性は見せぬ女の薄化粧
八方美人また風を読んでいる
派手好きな夫に詫びるノーメイク
日常を郵便箱に覗かれる
親孝行　苦労話を聞いてやり

大阪市　板　東　倫　子

就職にもあったら良いな逆指名
税務署も郵便局も低姿勢
十七歳昔は少年航空兵
土壇場まで良い事なしの二〇〇〇年
笑顔一ぱいメッチャクヤシイ銀メダル

大阪市　町　田　達　子

椿三題　遊亀の絵葉書買いそこね（小倉遊亀）
四国での話チンドン屋のコンクール
一杯のモカから視野の広がる日
祥月の仏に詣る京の寺
惜しいなと思う嵐山の近代化

大阪市　稲本凡子

窓みんな開け正月の風を呼ぶ
今年から西暦で言う誕生日
太り過ぎ好みの服が似合わない
デーケアに入り幸せごっこする
末孫がオーストラリアへ嫁く挙式

大阪市　杉澤汀

ところ得た松一鉢と鏡餅
初孫へやや大きめの鏡餅
今朝ばかりは梅一輪のういういし
一点を目指し乗る人降りる人
子の出世　親をだんだん遠くする

大阪市　大塚節子

千歳飴　袋の中で年を越し
まんなおし春着で詣る天神さん
三日目は一人になって大福茶
幸せは正月行事出来ること
楽しみもほどほど年齢には勝てへんの

大阪市　津村志華子

結び目のもつれ解くのはいつも母
太閤の許しも得ずに鳩が棲み
同窓会ガキ大将も杖を突き
夢抱いて宇宙へとんだ竹とんぼ
幸せをピンクで包むウエディング

大阪市　渡部さと美

あこがれの宇宙めざして凧揚がる
和太鼓に腹から元気つけられる
車窓へつづくこれ見よがしの泡立草
お刺身に目がないはずだお酒ずき
酒量減り演説へって妻ホッと

大阪市　奥村五月

足痛い腰が痛いの同窓会
古里を沈めたダムに月が浮く
風船は貴方まかせの風にのる
いのち取る酒が恋しい夜が来る
子はあてにできぬ孤独の冬が来る

堺市　近藤豊子

七五三　手をひかれゆくかぐや姫
石段で抱っこだっこと袂ふる
飴ぶくろ鳩がよちよちついてくる
三歳の児のお祈りのながいこと
秋天へ八幡宮の「トトロ」の樹

堺市　柿花紀美女

倖せはきれいに巻けた卵焼き
目線下げ耳をすませばいい話
折り込みの効能書がまた騙し
隣組そこそこはなし合わせとく
子等の舟次々沖に舟出する

堺　市　宮　本　かりん

ごたごたした地球へ月がさりげなし
いからせた肩から淋しさが見える
膨らましすぎた話が戻せない
扁平足大地と意気が合うてます
新世紀なにかわくわくしてくるぞ

堺　市　神　原　　文

容赦なく新年どっとやってくる
幾度めかひとり眺める初茜
パン好きがお代りをする雑煮餅
お正月おニューのパジャマ肩が凝り
竹踏みはここで止めたら続かない

堺　市　志　田　千　代

涙拭くティッシュ渡してくれました
満足をしてからだらしなくなった
老い猫が今日も添い寝をしてくれる
ガングロを見た目で地獄絵図をみる
凱旋のサイレンはない消防車

藤井寺市　鴨　谷　瑠美子

片肌を脱いで仲裁してあげる
気に入りの面が近頃剝げてきた
忘れたい事が続いたまま朝に
身の内はじょんがら節で火を紡ぐ
無視された位置で零れた種育つ

藤井寺市　中　島　志　洋

曽孫二人増えて嬉しい祝い膳
幸せな夢を継ぎ足す祝い箸
お年玉貰えば孫は帰りかけ
初詣でやっと出番の桐の下駄
元日は妻も付き合う初春の酒

藤井寺市　高　田　美代子

イントロの長さよやっと新世紀
夜あそびも覚えた塾の帰り道
不機嫌な猫の機嫌をとっている
座ぶとんが土俵に舞った取り零し
おめでとうライバルからの年賀状

藤井寺市　楠　　昭　子

省いて省いてわたしが居なくなり
行列の真ん中辺で進まない
商売のうまさはバカのふりもして
強がりの女の淋しい後ろ影
きまじめな人だ退屈してる鬼

藤井寺市　太　田　扶美代

神様にいつ還そうか自尊心
重い荷をしょい込んだのも僕の意地
この季節やっぱり聞きたくなる「枯葉」
秋だから少うし燃えてみるつもり
君の言うロマンチックが分らない

羽曳野市　吉川寿美

松三日コトリともせず過ぎてゆく
逆転へふつふつ滾るものがある
自画像にまだ重ねたい彩がある
忙しい一日だった二十五時
哀しみをこらえる空が蒼すぎる

羽曳野市　酒井一壺

掛け捨ての火災保険を続けてる
安心をして下さいと家業継ぎ
一流の会社も安心しておれぬ
未練かも今も捨てずに持つ手紙
生きがいは百貨店でのショッピング

羽曳野市　西村りつえ

新世紀乾杯の声宇宙まで
化粧して今日一日にはずみ付け
カーナビにハンドル任せ一直線
涙涸れ笑顔で揃う七回忌（母高橋千万子七回忌　2句）
何してもまだまだ遠い母の味

羽曳野市　福田満州

本局へ筋トレ兼ねて踏むペダル
好きじゃない泡立草の黄に見とれ
破算ニュース保険嫌いの顔涼し
一心に文庫本読むホームレス
読みかけて栞はさんで目を庇い

松原市　小池しげお

呆けてからホントのことが言い易い
来るという息子を待っている湯呑み
羽目外す予定に○を打っておく
熱冷めて朝からずっと家に居る
亡き母の逮夜逮夜の丸い月

富田林市　片岡智恵子

老いる程上手になったもらい泣き
取り越し苦労覗きにカメラ胃に入る
下降線だけの老後に策をねる
知恵借りるつもりがお金貸す羽目に
スピード違反心の重い旅になり

富田林市　中井アキ

意地という釘が仲々外れない
挑戦を受けそこなった丸い指
だからと言って助けてあげる金もない
清流を見ると金魚は身構える
通院もデートも赤いスニーカー

富田林市　大橋鐘造

下心あるから乗った口車
がら空きの電車で行儀くずせない
糸電話嬉しい嘘を言ってくる
一彩を足して幸せ倍にする
定退へ邪魔な仮面は脱ぎ捨てる

高石市　浅野房子

夢描く画布はいつでも真っ白に
夢語る花子に老いの影はない
目覚めれば生きていたかと薬のむ
おとぎ話に付き合っている暇はない
最短距離行ったつもりが遠回り

河内長野市　加島由一

嫁がせた父が無口な朝のお茶
失恋も大阪らしく落ちがあり
うっかりと見逃していた十三夜
雨上り傘は環状内回り
溺れても女はすぐに立ち直る

河内長野市　植村喜代

秋空へ柿が色づく頃が好き
親がもつ娘等遠慮なく注文
電車から幸せ下りる秋日和
ヤワラチャン　ガンバリました重い金
ゆらゆらとお手てつないで孫と私

岸和田市　高須賀金太

欲のない顔で野菊が咲いている
地球支えられなくなった原始林
糸切れた凧が集まる立ち飲み屋
豊かさが青いテントの中にある
二〇〇一年　只の一年ではないぞ

岸和田市　宮野みつ江

ゆきすぎの気配りされて肩が凝り
留守番の亡夫に萩の湯呑買う
長旅の大声掛けて家に入り
善意銀行に預けたのは笑顔
大切な思い出だけをスクラップ

岸和田市　藪野ケイ子

冷蔵庫を開けると不満喋り出す
どしゃ降りをサザンカの香に救われる
禁煙に灰皿しまい忘れてる
流行色　先取りをして犬に着せ
狭い部屋斜めに歩く万歩計

岸和田市　岩佐ダン吉

試されているんだ冬の風受ける
無駄な汗ひとつも無いとお母さん
いっぱいの約束をして陽が沈む
毒のある言葉を吐いた日の疲れ
核ゼロへ揺るがぬペンを持っている

岸和田市　長谷川呂万

一芸を究めた顔は驕らない
不精ひげ願い叶ってすっきりと
命より大切な金税でとる
草むしりから町内に友の数
大晦日継ぎ目を跳んで新世紀

大阪府　八十田　洞　庵

海荒れる日の灯台は男の目
久しぶり新地で出合う千鳥足
辛口の意見喝采浴びている
制服を脱げばおいらの親父だな
けつまずいた石に恩師の声がする

大阪府　米　澤　俶　子

やっとのことで間にあいました新世紀
漢方薬昔なつかし皿秤
症状どれも家庭の医書にぴたり合う
比べてはならぬそれぞれ幸せ度
極楽の予約へ小さな善意積む

大阪府　籾　山　隆　盛

今世紀明ける目出度い初日影
何はさて置き松茸のお礼状
人間味かけらも見せずぼったくり
盗み撮りできるカメラを市販する
一枚が残り表札写しとく

尼崎市　内　田　美也子

あやふやな答で母の処世術
こだわりを捨てて靴音軽くなる
長電話貴重な時間食ってゆく
思い出に埋もれて閉じる二〇〇〇年
紅葉へ世紀を惜しむ人あふれ

尼崎市　春　城　武庫坊

新世紀に会える生命に感謝する
幸せな眼で二十世紀をふりかえる
妻と酌む酒は至福の味となる
迷惑をかけぬ余生を如何に生く
狭い土地三階建てが並び建つ

尼崎市　春　城　年　代

新世紀傘寿も重ね凡夫婦
眼の一大事拾い読みする去年今年
積みあげた本から愛想つかされる
ゆき届くサービスときにわずらわし
友達の噂ひそひそまだら惚け

尼崎市　的　場　十四郎

どんぐりも入れて届ける旅土産
二日酔いそば一杯の朝の膳
御神火も鎮まり春を待つ椿
捨て石を男勝負ときめて打つ
活気ある男の肩は崩れない

尼崎市　奥　山　美智子

カルチャーで老いの魅力を見い出そう
ライバルが一歩優れているだろう
はいはいといやな顔さえ見せません
コーヒーの底に沈めておく話
ふるさとの風とあきなく話してる

尼崎市　長浜澄子

胸底の炎静めるボージョレー
老婆心なんて体よく逃げられる
正直に言えば言ったで角が立ち
アウトライン変えぬ私でいるために
ちちははの夢を重ねる千歳飴

西宮市　西口いわゑ

雨の音ほどよい酒にしてくれる
まだ胸の高鳴る熱を持っている
吉報のように大きな月が出る
ドングリもわたしも名刺など持たぬ
人生をゲームと思う軽くなる

西宮市　門谷たず子

新世紀やっぱり米を研いでいる
茶柱の暗示に締める靴の紐
どこまでを倖せという寒椿
天敵はわたしの中に住む鬼か
やさしさを装う未遂の罪がある

西宮市　山本義子

思いちがいいいほうにとる私です
ご勝手に言われればほんならそうします
買いかぶられ違うちがうと胸のうち
特注の包丁　役に立ててない
骨折のつけか今ごろ白髪増え

西宮市　菊池トミヱ

すすき野が真白くゆれる曽爾高原
石仏が並ぶ広野の曼珠沙華
柿実り待つ人がない里の秋
ペットにも言う事聞かぬ意地がある
娘の成長しばらくぶりで見違える

西宮市　亀岡哲子

抜きん出て咲く女郎花秋暑し
まだ花のあるを植木屋容赦なく
いじわるをされていたとも気が付かず
もめごとが出来て元気をとり戻し
自分の歯磨き続けてゆく老後

西宮市　奥田みつ子

似た人によく逢う日なり淋しい日
甘やかせすぎてベッドの天下びと
街で会えば女医さん粋な町娘
妻なれば今倒れてはなりませぬ
生きるとは死ぬとはみんな夢の中

西宮市　牧渕富喜子

外からの電話やさしい声にする
ああやはり秋が来ているハガキ買う
故郷のれんこんの泥捨てがたい
身の内の不思議抱いてから久し
ゴア・ブッシュしり目にひらり秋の天

神戸市　中村ゆきを

ベビーカーやがて苦労の種眠る
焼芋屋 軍手に温い故郷なまり
宮大工千年彼方の空見上げ
ふたありで死ぬまで歩きたい日和
来ん年へ目玉洗うて耳掘って

神戸市　池田善守

良いことの書いてる方を買う干支暦（こよみ）
新しさいつもの百倍新世紀
吾が人生夏と冬のみ覚えてる
夫婦喧嘩 裁判官も裁けまい
妻以外しゃべることなし定年後

神戸市　小林一夫

愛犬死す こんな綺麗な陽の中で
君死して君の若き日めぐりくる
初春へただてのひらを見つめけり
ため息の行方あなたは帰らない
温泉で哀しいことを考える

神戸市　山口美穂

この一年お頼みします鎮守さま
また一年流れるように過ぎそうだ
こそばゆい思いで聞いているお世辞
不覚にも小春日和を風邪に臥す
家庭菜園 虫のお余り食べている

伊丹市　小熊江美

店員が半額だよとまくし立て
小遣から介護保険がまた引かれ
価値観が違う二人で面白い
同じように育てて違うあね いもと
本心を打ち明けてから寝られぬ夜

伊丹市　樫谷郁子

京御膳 味もはんなり七五三
人のエゴ哀し矮化の菊香り
よく肥えて威張るサンマは膳で跳ね
聞き馴れた川瀬の音に癒される
枯葉舞うひとつひとつにある思い

芦屋市　黒田能子

輪の中のたった一つの指定席
花柄の枕気分を変えてみる
あっさりと忘れたいから皆話す
しつけ糸まだこだわったまま切れず
一人っ子ペットのように可愛がり

三田市　北野哲男

ハイハイハイ返事三つの不服顔
ミレニアム最後の奇跡宝くじ
結局は丸く納める金が要り
青春がチョッピリ戻るクラス会
半世紀切手は舐めて貼っている

姫路市　古川奮水

旅に出て夫婦の鬱を置いてくる
銀幕の役者も皺が増えている
立冬も狂うた蝶が飛び回る
軽口の割りにお尻が重すぎる
赤提灯だから今夜は安く飲む

兵庫県　大谷幸次郎

近づいて鼻息荒い人と知る
菊日和脳のしわには明治節
木枯らしで山も田んぼも店仕舞
鬼瓦も大きく揺れた恐怖の日
若嫁の二つ返事が快い

岡山市　川端柳子

箱入りばあさん抜け出る手だてないままに
弱虫のわたしに遺せない夫
ドロップの甘酢っぱさや花もみじ
心ある人と道づれフリーパス
あったこと無いこと白状したくなる

倉敷市　井上富子

ジョンガラの音色恋しい北育ち
何の為の宗教たるや小競り合い
近寄っただけで泣かれる無精髭
リストラの刃の前に立ち竦む
みどり児もうかつに泣けぬ折檻死

岡山県　小林妻子

充実をした今日だから明日がある
崩れない仕合わせ老いの自負だろう
棒グラフ短めのまま年を越す
軍手の穴が仕事自慢をしています
こん夜はごめんね味付け辛かった

岡山県　矢内寿恵子

足音が揃うと号令かかりそう
不器用な生きざま未完の絵がたまる
ゆっくりと出来る余生が短すぎ
よろこびの数は別れの数だろう
仇花は咲かせぬ茄子の一途さよ

岡山県　福原悦子

月満ちて小さな命呱呱の声
太陽ののぼる優しさには勝てぬ
老いてなお小さな欲にけつまずく
浮かれてる心にひとつ釘を打つ
受け継いだ味噌作りにも歴史あり

岡山県　富坂志重

血の中にゆっくりとけるやさ言葉
日も月も私に味方してしずむ
世の中だ幸せつなぐ橋もある
昨日には戻れぬ今日を強く生き
憎しみの道をたどれば深い愛

岡山県　荻野鮫虎狼

信頼の主治医欠伸をして平和
文化の日やはり畑で鍬を振り
ラーメンで一食が済む夫婦旅
引締まる顔が師走の路急ぐ
御神酒が待つ元日の膳に着き

竹原市　三宅不朽

ひとつ捨てまた捨て楽にものが言え
今はむかし母隙間かぜ背に座る
母に似た彩ならどんな色も好き
月さんさん素っぽんぽんで走りたし
二十一世紀へ胎児も四股を踏むという

竹原市　岩本笑子

まわり道コスモスが咲き菊が咲き
夕方になるとブランコ淋しがり
天も地もたそがれてゆく今日旗日
猫の耳ピクリとさせてコマーシャル
新世紀　今シナリオを書いてます

竹原市　森井菁居

昔ばなしに閉じ込めておく異性運
オーダーメイドの服にだあれも気付かない
バーゲンであれもこれもが欲しくなる
暖色の風がこぼれるつるし柿
いで湯マップを妻と二人で塗りつぶす

竹原市　時広一路

土と仲良くて野菜がよく笑う
奔放なクレヨンはみ出すのがお好き
人間はちっぽけだよと水平線
裸木のポーズは春を待つ踊り
備前焼きの重さでビールなお美味い

広島県　藤解静風

糸切れた凧の気持ちが解りかけ
シドニーの後がQちゃん忙しい
一人逝きひとり生れて蕎麦の花
晩学が虹を見上げる日を信じ
うぬぼれの自画像ばかり描く父よ

美祢市　安平次弘道

深呼吸すればやる気が湧いてくる
まだ欲があって見ている相場欄
十二月行事がおおいカレンダー
平行線意見は遂にかみ合わず
縄張りへ一きわ高い百舌の声

鳥取市　徳田ひろこ

元朝のイベント待っている朱盃
パソコンに嵌って父が帰らない
緑濃く大きくなれたマリモたち
たばこの輪抜けてヒントが落ちてくる
一夜漬されて緑が濃いくなり

鳥取市　杉本孝男

僕の部屋ノックなしでは親も駄目
熱唱の演歌私の胸揺する
雑巾の絞り方にもある個性
貸し借りのない銀行に用はない
ズルズルと背負う重荷に古希の坂

鳥取市　福田登美

張り替えた障子に月のやわらかし
安物に目を走らせる歳の暮れ
あいまいな一日 重い陽が沈む
身の程を知らずに跳んだ水たまり
腹割って話せる友の輪に生きる

鳥取市　岩原喬水

損得は抜きだ互いに愛してる
ほのぼのの春だ浮気も芽を出した
震度七震え止らぬ鬼瓦
飲めぬのに割勘だけは払わされ
地震だぞぴったり足が動かない

鳥取市　夏目健一

あの鬼がまあるくなったのは病
野暮だけど誰にも負けぬ親おもい
首の皮一枚残し妥協する
さかずきを伏せる勇気に明日がある
迷いごころをパズルのように置きかえる

鳥取市　西村默光

お金さえあれば何でも叶いそう
晩酌で夜毎 健康チェックする
ライバルが出来て新語の辞書を買う
酒豪の血子子孫孫へ引き継がれ
別れるも会うもお酒が音頭取る

鳥取市　武田帆雀

トレードに投げ飛ばされて目が覚める
まだ温い寝床にもぐる神無月
店長の声が締って店が開く
蓑虫は寡黙一票投じない
鯛の目が睨む一万円の蟹

鳥取市　春木圭一郎

吉兆をもたらすへびに乾杯だ
新世紀まずは大蛇と飲み比べ
還暦のいささか毒を持った蛇
毒蛇を飲んで精力つけている
ぽっと出たへびに似ている蛇使い

鳥取市　倉益一瑶

責任をかついで潰れそうになる
八合目越さねばならぬ坂がある
ときめきを忘れ鏡に叱られる
ささくれた夢引きずっているわたし
二番手の影がぴったりあとにいる

鳥取市　岸本宏章

豊作へ倉の古米が落ちつかぬ
哀しいな人の不幸はすぐ忘れ
満員の電車うっかり手も出せぬ
木枯らしに喪中はがきも舞って来る
百円のすしが疑似餌のようにある

鳥取市　岸本孝子

ゆとりあるときの返事は角がない
パソコンに固い頭をたたかれる
何もせぬ一日だけど無駄でない
宝くじ買って神さま仏さま
かけ足の秋にあれこれ急かされる

鳥取市　前田一枝

すばらしい輪の中にいる生きている
夕月にタヌキ美人に化けて出よ
ダイエット横目に秋を食って居る
旬の味宅急便もドサリ積み
台所やっぱり主婦の顔になる

鳥取市　山本益子

句の道にいつもアンテナぴんと張る
鏡には女の性が浮き沈み
夢挑戦百歳越せと策を練る
こっそりとポックリ寺を下見する
美しい別れの言葉胸に棲む

鳥取市　冨山檳榔樹

明暗を秘めた化石を握ってる
歯ごたえと味わい抱いて歳明ける
振り向けば逃がしたチャンス笑ってる
脳味噌にチャンス活かせと喝入れる
惚け封じ特効薬はジャズピアノ

鳥取市　近藤佳子

さわやかに生きたしいのち輝いて
金貯めた次は勲章ほしくなる
旅立ちの母に最後の紅をさす
いのち不思議生かされてまた明日もらい
保険証　何時もポケット魔除けです

鳥取市　美田旋風

先頭を切るといじめに遭いそうだ
うっ憤を晴らす女のティータイム
達筆の手紙が読めぬどうしよう
手毬唄聞けば老母の手が踊る
寺町に医者の開業花盛り

倉吉市　野口節子

無駄一つなかった母の躾糸
愛猫を抱いて貴婦人画廊から
一本のカンフル剤となる画廊
角帯をきりり男の正念場
片肺にまだ去りやらぬ恋がある

倉吉市　松本よしえ

忙しい嫁のご馳走手巻き寿し
上寿しをみやげに買った淋しい日
仏壇に今日はあなたの誕生日
映画見に十七歳の孫と行く
いっときの事と少年見守ろう

倉吉市　米田幸子

年金の財布もゆるむ蟹の味
躓いた人と痛みを分かち合う
せかせかと師走の風が背なを押す
一徹な父もそろそろ歩み寄る
勉強をさぼって行った丘がある

倉吉市　山本玲子

あいまいな笑顔で濁す物忘れ
物知りと話上手が来て長居
あれこれと値段気にせぬ百円ショップ
本人は気にしておらぬのに騒ぐ
対岸にいつでも行ける橋がある

倉吉市　山中康子

新世紀めでたい初春の水を汲む
目覚ましの曲に流れる花ごよみ
カーテンを清楚な彩に仕立てあげ
キッチンを檜舞台に今日を生き
滅多には愚痴をこぼさぬよき伴侶

倉吉市　淡路ゆり子

新世紀大地に春の種をまく
まなうらに褪せぬ故郷抱き眠る
学ぶ程に人のこころも丸くなる
神頼みもうこの辺で止めておく
どこにでも素直に転ぶ丸い石

倉吉市　最上和枝

うろうろとしてたら海苔が湿けてくる
頑なにカードを拒む明治の背
百態に変わるカードをポケットに
足元の墓穴が見えぬ有頂天
うやむやな言葉で渡すお香典

米子市　木村富美子

虫も鳴く小鳥も鳴いてくれる庭
丁度いい固さに炊けた姑の粥
若者と同じ固さの飯を食う
職業の欄に大きく主婦と書く
身上をつぶした酒を呑んでいる

米子市　澤田千春

前向きに進むチャンスをくれた酒
サーカスの広場が駐車場になる
おおらかな広ロビンに気を許す
人間を忘れてしばし酒を飲む
ガラス拭き遠くの景色近くする

米子市　中井ゆき

震度6ふとんかぶって阿弥陀さま
菜園に今日も小さな蝶生れ
天井に昨日と違う夢をかく
それぞれの思惑でみる花の色
ありがとさんだれにともなく言って寝る

米子市　野坂なみ

待望の曽孫に逢えたおかげさま
座布団が舞う一番の小気味よさ
荒目の刺し子　遠い野良着の温かさ
不思議がる子の質問はていねいに
ベッドの下に内緒の酒がおいてある

米子市　青戸田鶴

震災で私の時刻表狂う
身を守るリュック一つが枕もと
荒い息で役目果たした父の背な
しあわせと思える日あり本を買う
価値観をかえて肩の荷軽くする

米子市　白根ふみ

風上に置きかえてみる菊の鉢
人形師ぼくにわくわく菊を着せ
起さない時はとにかく眠ってて
もみじ尽きない大山が暮れかかる
皮と実のあいだに滋養皮を食う

米子市　鷲見正子

二十一世紀もよろしくと言う伯耆富士
まず元気それから先は欲になる
母は山　父は海辺でリフレッシュ
大山も私も今は休火山
アメリカの真実を見た選挙処理

米子市　中村金祥

新世紀ようこそようこそおいでやす
百歳のページに余白なんかない
ライバルの野暮な姿に気を許す
単身赴任出城を持った気分です
庭先の菊と毎日会話する

鳥取県　石谷美恵子

澄んだ瞳が親の矛盾をついてくる
勘当へこっそり届く母の愛
焼いもがほろほろ無防備な女
反応がスローで喧嘩にもならず
月並みな言葉しかでぬ喪の袱紗

鳥取県　羽津川公乃

父権失墜固いゲンコが握れない
年金まであと三年に職が無い
十五夜は欠けてもわたし丸いまま
栄誉賞抱くQちゃんの細い腕
木枯らしの合い間に伸ばす万歩計

鳥取県　西原艶子

球根を土に抱かせて春を待つ
重力を越えて翔びたい新世紀
冬空の野鳥の元気欲しくなる
ふるさとは美人が多いなと思う
満たされぬ器のままで生きて行く

鳥取県　権代康女

新しい年だ大きな夢持とう
カラコロと追っかけっこをする落葉
冷えこんで星のきれいな夜になり
働いた分だけ腰が曲りだす
好い人だチャンスがあればまた会おう

鳥取県　乾　隆風

やむをえずへそくり足して顔立てる
つらの皮が薄いみかんを選って食う
自画像を画くとま冬のつるし柿
暮れてから会費をにぎり締めて出る
ひざこぞう抱いて万年床に寝る

鳥取県　林　露杖

コスモスを揺らして遊ぶほどの風
立冬はぽかぽか温し返り花
会釈して道譲り合う雨の路地
老妻の嗜好はどっち土産撰る
瞑想の果てに尾を曳く鐘の音

鳥取県　鈴木公弘

神社から太鼓が響くいい目覚め
私の生まれた世紀ありがとう
体臭の消えたおやじになるのかな
スタートの一歩が重くなってゆく
軒下に柿ぶらさげる手の温み

鳥取県　土橋はるお

いいのから娘　野菜に虫がつく
おでん屋の前を知らせる腹の虫
豊作貧乏米はたんまりある暮らし
ふところの具合が良けりゃ払います
木枯らしに百円市も活気づく

鳥取県　さえきやえ

大山さんの御札迎えてもちをつく
お元日孫が日の丸たてている
冬大根　上出来人に上げとうなる
ねつ造がないか気になる妻木晩田
地震被害　屋根のシートがまだ重い

鳥取県　田村きみ子

褪せてきた夏の帽子をそっと手に
一行には書けぬ小さな悔いなのに
地震より恐い他人のうしろ指
背伸びして見よう年金範囲内
私もおんな手招きには弱い

鳥取県　土橋　睦子

男だから女だからと言えぬ歳
そっと手を繋いでくれている無口
年の暮れ回覧板も忙しい
罪深い人差し指を噛んでいる
鈴なりの柚子熟れてくる日向ぼこ

鳥取県　橋本　多哥由

喋るだけ喋り勝手な弱虫だ
白桃の色香に迷う影法師
忍の字を考えながら生きている
気に障る話だまって聞いている
はねぶとん一枚勇気出して買う

鳥取県　原　みさを

生きるという不思議へ西日さしてくる
男と女そんな二人にいい広さ
冬木立ひとは無口になってゆく
大本山のデモクラシーが揺れている
シベリヤおろし日本列島弓なりに

鳥取県　吉田　孔美子

肋膜だった義務教育の仕上げごろ
入り切れない卒業式の日の見舞
病人食味見係がたいらげた
絣のもんぺいつ穿くの　母は泣いた
若い担任ベッドの側で昼寝する

鳥取県　太田　幸枝

腕前を競い合ってる文化の日
便利さの中で痴呆になやまされ
苦労した過去を忘れてポイと捨て
履きちがえた自由が一人歩きする
介護保険　素直に受けぬ老いの意地

鳥取県　近藤　春恵

新しい明日はきれいな色にぬる
約束を忘れた小指うずき出す
卒業のない人生を生きつづけ
迷惑とも知らずアレコレ世話をやく
長生きをして迷惑ばかりかけている

鳥取県　西川　和子

次の間におせち並べて待っている
次の間に想像ばかり脹らます
勢揃い二十一世紀の初笑い
次の間で朝まで寅になっている
次の間が欲しい避難所の生活

鳥取県　津村　八重子

生かされて初日を拝むありがたさ
ピイヒョロロとんびよお前元気だね
ペン握り今年も書こういい日記
お年玉受ける孫の手あたたかい
おだやかに生きて余生を送りたい

鳥取県　岩崎　みさ江

腹の虫健康そうな声で鳴く
座り皺 形状記憶して困る
蘇る記憶胎児の形で寝る
たたら踏む間にチャンス通り過ぎ
飼い主に似るのか犬に似てるのか

出雲市　板垣　草丘

皇孫はまだか数の子食べながら
朝揚げた旗をバイクで見て通る
ボーナスを送ったことがない息子
怪我するな包丁といでおきました
年末は妻の配下で多忙です

出雲市　園山　多賀子

ふる里を忘れ悔いなき風媒花
思い出の継ぎ目継ぎ目を虚飾する
大切な右脳誤作動ばかりする
こぼれ萩温い言葉を待っている
幸福ごっこ独り芝居で能がない

出雲市　佐藤　治代

聴診器ぐっとしぼんだ胸を押す
わくわくとしてはいけない人を待つ
どしゃ降りの雨音聞いているごろね
箸置きへ小さくなった飯茶碗
好きだった人に目がいくOB会

出雲市　富田　蘭水

一言が多いが愛は生きている
角度変え妻のことばを味読する
未整理のままでプランが年を越す
大輪も小菊もまじめさ誇ってる
嫉むなよ弱い心に蓋をする

出雲市　青山　久子

叩かれるままにコスモス風に伏す
覚えないことでわんさと叱られる
良心をつつくわたしの赤い嘘
ちょっぴりの火種が消えず秋になる
どんぐりは落ちて転んで強くなる

出雲市　岡　あきら

五体満足向かい風には血が騒ぐ
西に月ふたりの散歩朝まだき
力作と笑顔が集う文化祭
豊作の柿を西から東から
ミレニアム人間様は浮かれてる

出雲市　吉岡　きみえ

息災の一日感謝の箸洗う
いやなこと触れないように茶をすする
先代のことをよく知る人に会う
一畳へわたしひとりの床を敷く
夫婦愛遠くに辿るものがある

出雲市　小白金　房子

御身大切友の癖字がありがたい
年一度大蛇と交わすまつり笛
懸崖の努力大きな賞貰う
割かんで交わす女の宿浴衣
豆を選る膝へ子猫も来て座る

松江市　佐野木　みえ

窯元を尋ね絵皿に柿を画く
歌麿の絵にひかれ行く美術館
地下道の吾が足音におびえている
京料理楽しむ娘とのデート
千鳥格子流行り昔の服探す

松江市　安食　友子

パリでも回転ずしがいらっしゃる
浅知恵がやっさもっさと喋ける
助走して老いという名のテープ切る
火の車裸電球知っていた
大見得を切って下さい金メダル

松江市　銭山　昌枝

取得したままの免許が二つある
日向ぼこ時効の話弾み出す
わたくしの知らない料理娘が作る
しあわせと思い込んでる披露宴
新世紀総てゼロから出直そう

島根県　堀江　正朗

ひと文字の誠に挑む今日があり
思い出を追えば声飛ぶ懐かしさ
闇に生き時計の音に挑む朝
娘来た妻そっくりの声をして
ひとことに寂しさ深むのも秋か

島根県　堀江　芳子

温かい顔だんだんで切る電話
頑固さを憎めず宥めては笑う
生を得た夫の憎まれ口も飛ぶ
いのちいのち生まれ変った笑顔して
退院の鯛をつつかす子等の瞳よ

島根県　榊原　秀子

花の頃きっと会おうと切る電話
所在なく金平糖を二つ三つ
紅葉の話チラホラ風にのる
柚子を煮る柚子の香りにむせながら
真夜中に星を眺める癖になり

島根県　伊藤　寿美

つまみ喰いするモナリザが肥る秋
オブラートに包んだ皮肉呑み下す
凡そのことを見抜き言い訳聞いてやる
十七歳が退屈そうに歩いてる
仏壇の皺のリンゴが軟らかい

島根県　森　茂美

終電の無人駅舎にすだく虫
むらさきに昏れる叡山の浮御堂
遮断機に背なを丸めて待つ時間
避難所に夏を残して秋深む
黄葉散る銀杏並木の冬仕度

高知県　赤川菊野

孤の部屋で仮面をぬいでアカンベー
海峡を越えてハチキン鳴子の音
コマまわしとってもうまい女の子
ミレニアム祝う門松大き目に
ジョギングの距離が年毎せまくなり

高知市　北川竹萌

赤紙に吾も海軍二年程
とことこと歩み米寿に悔いはなく
折り畳み式に記憶を仕舞っとく
九十まで無事故ことなき乗り納め
栗あけび微笑で里に待っている

香川県　川崎ひかり

刃物より恐いヒ素だのトリカブトだの
時どきは若い気が出る六十路坂
お役所がなさる事ですあらかしこ
そうそうは本音ばかりは言えません
給料日少しリッチになる気持

香川県　成重放任

頑固さが失せて涙が脆くなる
花嫁の送る言葉に貰い泣き
手に乗せた孫もわれより背が勝り
豊作の裏に隠れた値の下落
熟睡をしても疲れが取れぬ歳

香川県　山地マツヱ

ときめきが戻って来そうクラス会
星占い今日一日はよしとする
おでんぐつぐつコンニャク主役の座をねらう
ステーキを焼いたら弾むフライパン
定年の男肩から老いて行く

松山市　丹下美津子

月の夜にお呼びがかかる芋煮会
ご機嫌の後のまつりは血糖値
ワードより手書きが早い老い二人
こぼれ萩杖にやさしい秋遍路
万歩計　今朝も猫背を叱られる

愛媛県　中居善信

表通りを背筋伸ばして歩いてる
陽が落ちる人は淋しきことばかり
焼き芋の好きな女をふとおもう
ひび割れる音が微かにする地球
米びつを満たして暮れる十二月

北九州市　梅田宣司

余生とか八十路に淋し暇ばかり
老い先に暇はいらない生きている
酒止めたわけは外にもあるのです
極楽を信じて法話身にしみる
例えばの話でお鉢回って来

熊本市　永田俊子

この指にとまるものない木の葉髪
赤い風船とり逃した冬のてのひら
女流棋士きれいな指で追いつめる
笑い袋満たしてたのし縄電車
幸せよ三ケタ四ケタの暮しでも

熊本県　高野宵草

お客様だよとポチから教えられ
過去形で苦労を語る友と飲み
棒読みで舵をとられる神の国
浅はかな人智を憎むムツゴロウ
美味しさは虫も食べてたレタスです

熊本県　岩切康子

カレンダー夫婦で予定書き初める
留守中に長芋掘って喜ばせ
嘘を聞く何と淋しいお付合い
久々に鼾が居なく朝寝坊
菊人形　戦国時代がお好きらし

唐津市　久保正剣

しなやかに愛を貫く老夫婦
くんち笛秋一番の桃源郷
ナースシューズ音を立てたい時もある
この世から遠くなるのに耳がある
誤算とは沈んだままの潜水艦

唐津市　仁部四部

三世代国勢調査敬われ
民衆の雑音に在る或る地鳴り
不用品バザー国債売られてる
魂が浮いて沈んでコップ酒
正月は家族史少し補筆する

唐津市　山門幸夫

間引きしたレタス朝餉にシャッキシャキ
巣立ちした雀可愛い恋してる
車椅子押せば僕でも歩けます
夜来香今年も思い出連れて咲き
女性パワー頼母し怖し新世紀

唐津市　山門タミ

柿よりもカラス都会にあこがれる
沈む陽に明日を約して帰る道
紅葉の便りアルバム見比べる
ひねくれた菊も満開きれいだよ
按摩機で夢見る夫の鼻眼鏡

唐津市　山口高明

殺される方がやっぱり損らしい
害虫と人間どもが名前付け
落ちそうで落ちぬ仲居の擢さばき
入院へ急にやさしくなった妻
旧交を温める出会い秘湯の里

唐津市　市丸晴翠

鼻柱だけでラッパを吹き続け
休肝日こだわる妻が今日は留守
草原に時空を超えた兵馬俑
降りこめた雨に一冊読み上げる
ITを駆使し足腰弱くする

唐津市　樋口輝夫

落葉の枝に未来が生きている
灰汁が抜け仏のような人になり
核心に触れる議論はやめて酒
しみじみと宿帳を見るフルムーン
一宿一飯と言うたが今の亭主なり

唐津市　宗水笑

客向けの笑顔淋しい店じまい
哀れみは欲しがりませんホームレス
抜く顔と抜かれる顔で切るテープ
楠大樹三千年に掌を触れる
執念で打ったヒットが流れ替え

弘前市　福士慕情

鷹の眼がキラリと光る急降下
蟠り解けて掃除機動きだす
日焼けした顔だゴルフしているな
見渡せば枯れ野に一人立っている

弘前市　櫻庭順風

津軽三味　塔のまつりに憧れる
特訓に特訓　晴れの津軽三味
地元から友誼出演花を添え
耳朶にまだ友情残る帰途の便

十和田市　阿部進

手料理のうまさに惚れてプロポーズ
路地裏の屋台の酒がほろ苦い
がっちりと妻が握った主導権
豊かさを心に求め励む日々

和歌山市　山根めぐみ

大芝居うってあの世へお旅立ち
メロンパン謎があるから私好き
運動会武運つたなく転ぶ父
雑種犬相手の心良く分る

和歌山市　山口三千子

骨折のアクシデントでする別居
生きている証　明日のスケジュール
学術の実りへ励む子にエール
人様の事でも背筋寒くなる

池田市　藤井計光

底なしの沼へリストラ吸い込まれ
宇宙での挙式夢見る三姉妹
老妻の化粧に混じるヘチマ水
躊躇なく脱いで稼いだマイホーム

豊中市　岸田知香子

便利だがケイタイ持つもよし悪し
シリーズが終り無言の秋夜長
趣味没頭日付変更終い風呂
ライト映え紅葉の寺浮び出る

豊中市　湯浅馬洗

巳の土鈴振ってわが家に春迎え（佐賀のゴミ人形）
長いものに巻かれていない県民歌
創作の巳歳の賀状待つポスト
新世紀石見神楽で幕開く

高槻市　江原秀夫

今年また恙無く明け初硯
おとぼけが引っかかってる喉仏
酒だけは卒業もなく八十路坂
ラッシュアワー波にもまれて冬帽子

高槻市　井上照子

長の座は己失う覚悟要る
マンションのピアノ遠慮の音で鳴る
若者は学び傷つき伸びていく
夫しのぶ会の同期はみな元気

吹田市　瀬戸まさよ

安産の体質母の遺産です
家恋し北風交響楽奏で
冬の星話したいこと山とある
ふぐもある大根もあるさあ鍋だ

吹田市　大谷篤子

娘も孫も同じ教師に世話をかけ
体調が良いとまっさき美容院
坂道になり知らされる老いの足
父からの褪せた手紙に教えられ

茨木市　堀良江

大いなる入日来世をかいま見る
切れ長の目元どきっとさせられる
白シャツの広い背中の匂い立つ
師の前の点前今でも固くなる

寝屋川市　堀江光子

先生に内緒で読んでいる文庫
心こめて父の遺愛の時計捲く
のんびりと正確に鳴る大時計
正倉院展奥の深さの底知れず

寝屋川市　酒井勇太朗

赤い糸晴れて陽の目の披露宴
医療ミス闇から闇が暴かれる
湖の青鮮やかに空晴れる
断絶の父子を繋ぐEメール

寝屋川市　高田博泉

冗談の儲け話へ鶴の首
傘立てにクラブを立てる程の腕
会社名変えて庶民をだます気か
逆さ富士空の青さも負けていず

交野市　森本弘風

お祝いは地震と噴火世紀末
十円でコスモス一本摘み取られ
暑かった夏も忘れて色づく木
優勝はどちらでもよいセール待つ

枚方市　鈴木政子

ドック入り元気印も成人病
初めての点滴 天井の染み数え
人間をロボット犬が慰める
俎板に寝かされCTに刻まれる

大阪市　清水利武

しぶ柿が甘くなってる吊し柿
夫婦仲赤い蜻蛉に白い蝶
巳年凧空で笑って幸招く
経済に強い大臣出ておくれ

大阪市　松尾柳右子

お年玉渡せるうちが花なのよ
皆揃う御屠蘇の膳に背すじ伸び
サボテンが三年振りに花をつけ
次男坊上と下とにきたえられ

堺市　黒田真砂

娘の新居ローン気になる門構え
初春の杯海にただよう七福神
通院の道端に咲く花可憐
家族皆揃って食べた事がない

羽曳野市　安芸田泰子

孫とした指切りだから裏切れぬ
家の庭で隣の柿が熟れてくる
ありのまま見せる鏡が恨めしい
遠くから見守るだけの愛がある

和泉市　西岡洛酔

知恵の輪のひとつ明日を探る道
定年をしっかり摑む太い指
女の輪昨日の噂煙立ち
好奇心ちょっぴり老いの散歩道

河内長野市　井上喜酔

風おこし善意の声を熱くする
飼い主の今朝の歩幅へ合わす犬
顔だけは覚えているが名が出ない
てっちりは鍋の哲学冬の華

岸和田市　井伊東吉

パラリンの活躍胸が熱くなる
ひま人の増えて賑わう展示会
民宿に予約の入るカニ解禁
政争もITだけは意見合い

岸和田市　原　苑子

ばあちゃんの味噌が元気で宅急便
空っ風耐えた美味しい干した芋
霊場の五ヶ寺めぐって名を忘れ
にくしみも怒りも抜けた寺参り

貝塚市　池田　寿美子

新世紀平和を祈る初日の出
枯れないで時代の波を乗切ろう
ふるさとにしばしの夢を買わされる
間伐に森はひと息風通す

泉佐野市　山本　蛙城

立冬にまだ半袖という不気味
不死鳥の葱をプランターで飼い
ポックリとあの脇役は逝ったとさ
注射には名を確かめるまで腕出さぬ

西宮市　秋元　てる

ＩＴの時代も多寡をくくる老い
台所に再び立てる陽がまぶし
ものわかり良過ぎる男好きでない
両膝が笑い出しそう下り坂

西宮市　長谷川　淳

前生は警察犬かうちの妻
二世紀に亘る人生まず目出た
新しい暦が知るか吾が運命
五十年経って判った良き出会い

西宮市　井上　松煙

庭先の柿の味見は鳥まかせ
吹いてこい悲しい風よ受けてやる
噴水の泡を眺めて小半時
老骨の若いナースに甘えてる

西宮市　緒方　美津子

秋風は痩せたる父を刺しにくる
早よお帰り着いたばかりに母が言う
屋上に靴揃えればサスペンス
留守電によそゆき言葉里の母

伊丹市　山崎　君子

あのまりは何処まではずむ幼顔
地震速報のどもと過ぎた戒めか
救急車近くに止まる哀しさよ
朝ドラの親娘の情にうなずいて

川西市　松本　ただし

マフラーのワインレッドの似合う髭
ボタン掛けながら司会の席につく
雁首が揃いお詫びへライト浴び
減反へ補助金の出る票集め

相生市　中塚　礎石

夢抱いてゆっくり歩く母子家庭
みんな下車余生を歩く縄電車
金を借る顔に〇×つけてみる
金になる方へ人情向いていき

岡山市 井上柳五郎

突き放す愛が自立に目覚めさせ
鄭重な言葉を使いお断り
なにもかも妻にゆだねている平和
ほのぼのとしきたりどおり年迎え

広島市 森田文

今頃は花野でしょうか逝きしひと
おいなりさん修業を積んだ狐らし
不注意に転んだ傷がまだ残る
シンボルのカオしてビルの立方体

竹原市 石原淑子

海に出る木枯し夢を追いつづけ
情念を流し切りたい髪洗う
国民不在 首相の席のうばいあい
二千一年希望をのせて観測船

竹原市 古谷節夫

一〇〇〇年のスパン始まる新世紀
火星から使者が来るかも地球号
地球から見れば太陽魔術師だ
夢の中宇宙で恋をしてる妻

鳥取市 石上悦子

長靴はないのか雨具着せた犬
手をたたき相槌を打つドライバー
勘違いされて弁解聞かされる
お見舞の時にもらった風邪みたい

米子市 神庭詩郎

補聴器は体の一部老い重ね
肩書に元付けてある名刺くれ
無作為の勧誘電話からの声
道端に咲く雑草も四季を知る

米子市 永井三津子

大地震気付けば皆が素足なり
災害地悪徳商がどっと増え
凍てる胸母の笑顔に溶けてゆく
物言いはなかった父の遺産分け

米子市 木村春枝

紅葉を惜しんで今日の回り道
年が明け違った風と手をつなぐ
遺言に一筆添えて封をする
昼ひとり豪華な食事する事に

米子市 光井玲子

天職と老いても母はミシン踏む
組紐も互いちがいに支えられ
長コール笛吹きケトル急きたてる
風向きによって私は貝になる

米子市 門脇晶子

朝霧の大山寝覚め悪いのか
アイラブユー国際結婚いいじゃない
避難袋にたばこ二つは入れておく
スリムの夢を野菜の世話になっている

鳥取県　乾　喜与志

幾たびも転んで頭円うなり
老いぼれの腰骨が鳴りひと休み
負うた児に負われて今日の卆寿坂
哲学や老いの木の葉もやがて散る

鳥取県　上田俊路

とっておきの酒が出たから帰れない
遠くから荒れていないかわが子見る
つまずけば石を味方にするチャンス
わたくしの祭り葬式かもしれぬ

鳥取県　國森武子

古稀間近介護保険も研究し
目を細め孫の手型を額にはめ
孫娘私の背丈とうに越し
井倉洞地震考え無気味です（岡山県井倉洞）

鳥取県　石尾かつ乃

収穫のよろこび小豆転がせて
趣味を持つ妻を黙認して平和
丸みある言葉を貰う華燭の日
趣味一つ増えて友達二人増え

鳥取県　黒田くに子

孫のほほ　ぽちゃぽちゃ桃の花のよう
森の風やわらかいから油断する
残務でもいいから仕事くれないか
うとうととやんわり効いた痛み止め

鳥取県　奥谷彩子

二の膳も僕も脇役無位無冠
木枯らしに耳貸している野の地蔵
生きざまを自問自答をしてる葦
薄墨で生きた証の悲報来る

鳥取県　埓　寛子

鉄の輪に菊のプライド支えられ
UVカット美人のままで生きたくて
柵ぬけてお蔵に足をとられたり
おるだけでウロウロすると言われだす

鳥取県　谷口次男

初日の出二十一世紀の扉開く
派手にして蛇の皮でも着てやろう
初夢は蛇がたらふく札を呑む
ライバルの長所切り取り胸に貼る

出雲市　城　多喜

一日の時計の早さ気に入らぬ
雑巾が乾いて鬱の日が続く
ティールーム連れのないのはわたしだけ
わたくしもペンも心が弾まない

出雲市　石倉芙佐子

五位鷺の冠羽凜々しく風の中
一二三　自分に号令かける朝
喜寿未だ号令だけは衰えぬ
殿の才女上手に宙返り

出雲市　小玉満江

バイパスのお陰泣く店笑う店
定年の乗換電車まだ来ない
食文化長く伝える出雲そば
紅葉の中をゆっくりロープウエー

出雲市　岸　桂子

磨いても同じ答を出す鏡
テトラポットに負けず嫌いの波頭
決断のとき葉ざくらに風があり
策のない背なを押してる秋の凪

出雲市　板垣夢酔

乗り遅れ一人の宿に積る雪
目がはいり達磨途端に喋りだす
満ち足りた湯舟の中で幸ぬくめ
今年またハガキが余る喪の知らせ

出雲市　久谷まこと

訪う人の顔改まる新世紀
堅い殻母のぬくもりならゆるむ
まだ確か寸とセンチを使い分け
お世辞でも悪い気はせぬほめ言葉

松江市　川本　畔

哀しみが深すぎるのか風が凪ぐ
死ぬ時は一人ぼっちの救急車
その気になれば海は広がるばかりなり
ゆっくりと暦を染めるはぜ紅葉

香川県　池内かおり

酒も好き饅頭も好き妻も好き
すぐ乾く涙で男誑す
首根っ子時どき妻が揉んでくれ
現ナマを握らせ悪と手を結ぶ

香川県　神保坊太郎

空白を埋めるに傷が深すぎる
こうも背が曲ってたのか影法師
年輪のねじれは貴方のゆれた頃
門松が大ぶりに立つ小成金

松山市　宮尾みのり

本当は毒かもしれぬ試供薬
糟糠の妻を日陰にやる出世
支えてた妻が突然手を放す
手の届く位置にスイッチある怖さ

唐津市　井上勝視

大蛇にまで脱皮したいと願う春
農継がぬ子と飲んでいる囲炉裏端
わかってはいるが楽することに馴れ
ニンゲンの背なにもあったバーコード

第14回
吉本川柳

「毒」　選評　河内天笑

投句先　〒542-0075　大阪市中央区難波千日前11―6
吉本文芸館（06―6643―7799）

投句締切　**1月11日**（便箋に3句以内・80円切手5枚同封）

特集

新世紀を迎えて

川柳塔の個性

波多野　五楽庵

川柳を教科書へと叫ばれてから久しい。教科書へ登場する俳句は芭蕉であり一茶であり或いは正岡子規となれば伝統俳諧であり伝統俳句と言う事になる。もし川柳が同じ立場になったら柳多留前期の古川柳であり、六大作家と言われる方々の句、もしくはツルアキラとなるだろうが、保守王国日本ではツルアキラは文部省の削除になるだろう。

　教科書登場はさておいて、現在川柳は伝統、現代と論議され共存している。表現が豊かになるにつれて、はっきりしていた両者の区分がなくなりつつあることも確かであり、組織の分散化も進み伝統、革新だけでなく主張に合わせた選択肢が広がっていると考えざるを得ない。川柳塔もこの観点から今後の方針を模索する事になる。

　ここでもう一度川柳の定型を考えてみたい。地区の格差はあるだろうが、定型を固持していた筈の関西地区川柳の中に七七五調が目立って来た事にとまどいをかくしきれない。川柳塔十一月号同人句三百八十三人中、七七五調で発表された句が百六十七句ある。中八が五十二句、愛染帖発表句上六が七句上七が七句、勿論私自身七七五調を創作してもいる。教科書ではないが、十七音字という大義名分の中で自己を主張するために字数の過多はやむを得ない。韻律の存在する限り創作の自由はあるが、革新川柳を標榜している現代川柳作家は、案外十七音字の中で活動しているのである。ではなぜ七七五調が台頭して来たのだろうか。一つだけ言える事がある。字数が多くなればそれだけ表現の幅が広くなると言う事実と叙情性にある。川柳塔が薫風様から天笑さんと変遷の道をたどる。七七五調も含めてどんな姿勢を貫くのか、一に天笑さんの手腕と吾々会員の協力にかかっている。

川柳塔との道

仁　部　四　郎

川柳塔六三五号（昭和五十五年四月号）の各地柳壇に、新岡回天子報・虹川柳倶楽部があり、「良心を現ナマどんと吹きとばし」の句がある。それ以来八八二号までが本棚にあって、これからもふえる。

　新聞等の読者文芸に句が出ることも多く、かなり珍しい氏名ということで、県内ではいくらか人に知られるように二十余年のうちにはなった。

　二十余年のうちには、西尾先生、橘高先生はじめ川柳塔の諸先達にたくさん唐津へ来て

いただいて、県内の他の柳社からはうらやましがられている。
　名刺の肩書もほとんどないこととて、川柳をする時間はたっぷりある。いわゆるカルチャーで川柳の話をする機会もある。
　私の生活は、川柳を抜きにしては成立しない情況になっているが、句を作る力、句を読む力が、二十余年の時間とともに順調に成長しているかは大いに疑問である。
　健康状態は、黄信号がいっぱいだが、川柳への関心はまだまだ大丈夫らしい。その大丈夫と川柳人としての軌跡が、なんとか整合するようにというのが現在の心境である。
　川柳塔誌には原稿をのせていただいたこともあるし、同人総会でも発言しているが、川柳塔社は、世紀の変りめということが、偶然ではない転換期にあるように私には思われる。
　短い紙面で言うのは危険だが、「大福帳」的経営から近代的経営への転換期にあるように思われる。経理のこと、地方の〝参画〟のこと等に、ようやく結果が出はじめているかと思われるが、本年度の同人総会で交わされた議論は問題の所在を明示したと言えよう。
　遠地に在る者としても、応分のことは務めて川柳塔との道を歩みたいものである。

＊　＊　＊

最初の一歩

政岡日枝子

遠くて夢のようだった二〇〇一年が本当に来てしまいました。
　二十世紀最後の年は、私にとっても激動の年となり、自分自身の入院にはじまり、母との死別、鳥取県西部地震で大揺れの毎日の中での、おとしより達の恐怖と不安から来るストレスのケア等に走りまわっている内に、二〇〇一年に突入してしまいました。
　それでは心落ちつけて「新世紀を迎えて」という事を考えてみましょうと思うけど、急には何も浮かばない。
　新世紀と大仰に考えて、多くの仕事をしようと思わなくても、今を見つめたら、直ぐに一つの仕事をしなければならないことがあるではないか。
　平成十四年、我が鳥取県で開催される「国民文化祭」がそれである。
　我が県に内定した時から、鳥取県川柳作家協会の一員として、成功さすべく、それに向かって皆と心を一つにして邁進中なのである。二〇〇一年プレ大会、二〇〇二年本大会と大きな山が待ちうけているのである。
　これを成功裡に収めることが、大きな抱負であります。私自身の小さな抱負といえば、年老いても青年でいたいものだと思うことです。
　何故なら、二〇〇一年から我が家も高齢者世帯の仲間入りをする訳ですが、その原点と言うか、基本というか判りませんが、①バランスのとれた栄養をとって②食べすぎを避け脂肪は控えめに③頭と身体に適度な運動をさせ④そして休息する事を心がけようと、自分に言い聞かせているところです。
　川柳塔の一会員として、川柳塔とは一緒に歩き続けたいものと思っております。新年に当たり益々のご発展を祈り上げます。

尾道から二十一世紀

小島蘭幸

尾道市文化財保護委員の畠中美恵子氏は、記念誌『尾道と近代・現代の文学』の中で、

「戦後の川柳界をリードした六大家の一人、麻生路郎は、本名幸二郎、尾道市十四日町で生れ、父善七（陶器商を営む）母クニ、路郎一歳十一ヶ月母クニ死去、向島町に預けられそこから島の小学校に入学、当時は尾道への船便も少なく随分さみしい思いもしたが、川柳の巨星路郎を生む素地となっている……」と路郎先生を紹介されている。私はこの一文を読んで何故か新世紀のスタートは尾道からと決めてしまった。二〇〇一年一月一日、千光寺公園の展望台から尾道の街を見つめ、美しい尾道水道の対岸の向島を眺望する。これだけでいいのである。路郎先生の生れた尾道を歩く、それだけで喜びがふつふつと湧いてくるのである。

坂道の高さで見える港町　紫香

平成11年11月、尾道市立図書館で開催された「尾道ゆかりの川柳展」を見た後、柳友と浄土寺、千光寺を散策した。文学のこみちを歩きながら「ここに路郎先生の句碑を！」という思いを強く深く感じた。とてもさわやかな一日だった。

師の句碑がひとつは欲しい坂の町　蘭幸

念願だった路郎・葭乃ご夫妻の句碑が今年尾道市の志賀直哉旧居跡に近い小高い場所に建立される。

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ　路郎

飲んでほし　やめても欲しい酒をつぎ　葭乃

句碑が建立されたら一度尾道で吟行をしたいと考えている。電車でコトコト美しい瀬戸内海を見ながら…。夜は小さな居酒屋で反省会、地酒をとろりとろりと飲むも良し。そして今度は、私の師山内静水の句碑を竹原へ!!

あいふる通り、バンブージョイハイランド、照蓮寺、と私の夢は広がってゆく。

「日々是好日」

西村哲夫

私は今僧侶と言う立場にいる。分かってもらえるはずもないが、この人生が終わるとき次にある浄土への夢が膨らむ毎日である。

正月や　冥土の旅の一里塚
めでたくもあり　めでたくもなし　一休

この句の心を「毎日は　浄土の旅の一里塚」云々と読みとりたい。

人の心は読みとれず、自分の都合で是非善悪を判断する、間違いだらけの人生を不安に思う。そんな人との出会いは嬉しくもあり不安でもある。人との別れは悲しくそして不安である。不安だらけではあるけれど

有露路より　無露路へ帰る　一休み
雨降ればふれ　風吹けばふけ　一休

有露とは煩悩のことを言い、無露とは悟りを意味する。一休さんは死ぬまでこの煩悩はなくならず、色々なことが起きる人間界で一休みなのである。この一休みを私なりに言葉を換えて言うならば、徹底的な遊び心を持つ毎日、下手な表現力で申し訳ない。

恐怖化した二〇〇〇年問題は何事もなく過ぎ去った。確かに世界は西暦を中心に回っているが、西暦はあくまでもキリスト暦にしか過ぎず、従って私は世紀と言う言葉も問題にしたくない。私の人生の年月がまた一つ過ぎて行くそれだけのことである。「二十一世紀を見据えて」と言われたとしても、娑婆の世界では一日先すらも見据えるものを持たない私でしかなく、煩悩の眼に遮られながら遊ぶしかない自分を見据えるばかりである。

何月号だったか薫風名誉主幹が巻頭言で「路郎は五年十年先を見据えている」と師の言うところをお書きになっておられた。私は、名誉とか財の欲に執着せず、川柳を人間陶冶の詩と徹底的に遊んだ路郎を誇りに思っている一同人である。日々是好日、遊べ遊べ。

麻生路郎の作品とその周辺

大空のこころ

(120)

〔最終回〕

橘高薫風

路郎作品抄（六十句）

二階を降りてどこへ行く身ぞ
見渡すとユダのこころをみんな持ち
寝転べば畳一帖ふさぐのみ
その日ぐらしも軒に雀がこぼるるよ
てにをはのあはぬ悔みとなりにけり
大杉を殺し思想を取り逃がし
君見たまへ菠薐草が伸びてゐる
まだ嘘が半分まじった辞世なり
雑談の前にお布施がさらされる
そろばんの三桁四桁の人生か
凡聖一如元旦のこころ知る
草の根よ僕も闘ふ草の根よ
あの博士今度は民主主義を売り
古くとも僕には仁義礼智信
酒とろりとろり大空のこころかも
のみに来た友に家賃をきかれて居
十二月まがりくねったとこで飲み
ビールの泡を吹いて話をそらす気か
行末はどうあろうとも火の如し
少女で通すちちははの前
若い燕切符を買うて渡される
友達をみんなだまして南に居
恋の罠あの眼だろうか眼だろうか
サルトルを伏せて女に溶け込みぬ
愛人が雪の中の黒点となりぬ
もう未練ないが糸屑とってやり
秋さらり銀の襖のものおもひ
人妻よ不惑とはかなしくもあるかな
名をすてて十七八の恋もせむ
俺に似よ俺に似るなと子を思ひ
結界の中へうけとる子煩悩
凧あがりきって親子が口をきき
妻や待たむ靴音を高めんか
乳の出る機械に母はなっている
子よ妻よばらばらになれば浄土なり
子を死なし学校に子の多いこと
すべりんこ親は涼しいとこで待ち
子沢山僕の枕は何処へいた
十日戎両手でうける気で出かけ
病院の廊下財布のまま渡し
聖書一冊菊一輪の二階也
寒がりがつまみ出してる黒の石
草莽の臣かなしみの炭をつぐ
待ったなしの歩にさされたる犬養毅
奈良二郎つかい果した人も聴き
夕桜とんぼがへりがしてみたし
遠く来て信濃に山のない日なり
思い出の橋ばかりなり水都祭
いつ死んでもいいと言うところまでは来た
古希はよし弟子に孫弟子ひまご弟子
われ老いしか千代紙を美しと見る
初日の出自由はここにあるものを
時計が一つ鳴った役目を果たすよう
妻よ踊れ残こんの色香ほのぼのと
李白という友あり遠きむかしにも
自分すら救えぬ人の立候補
老人におもちゃなしバラの前に立つ
一行詩これが私の墓だとは
しがみつくほどのこの世でなかりけり
死の影が紋十郎の背後(うしろ)から

句の評価は個人により異なるし、重い句が良くて軽い句はつまらぬとも言えない。路郎先生の句に親しんでいると、雑詠と課題吟の区別はつきにくい。句の背景に思想や社会があり、生活を色濃く感じる。「人間陶冶の詩」を自ら実践された証左と言うことが出来る。

自選集

橘高薫風

新世紀日月星の匂い立ち
初光り鶴も雀もあらたまり
元日も好色の顔まぎれなし
ベルリンを伯林と書き父恋し
新世紀汗をせぬ世がすぐに来る

板尾岳人

追いついたさあこれからをどうしよう
もう帰ることが出来ない二十世紀
喜びを妻に話そう二十一世紀
二十一世紀中に必ず浄土へ参ります
日の丸を毎日揚げて感謝する

小林由多香

余震なお心のケアが進まない
選択を誤ったままたそがれる
三か所で引いたおみくじみな違う
移植して病んだ心を取り替える
元気ですしっかり薬飲んでます

榎本吐来

秋風をすんなり受ける古稀の朝
ロートルを支えてくれる経理事務
老妻の愚痴励ましと受け止める
㊝の座席の前に立つ老婆
老妻の指揮に従う冬支度

阿萬萬的

あんた少し物好き過ぎると妻笑う
両方共頑固なおらぬ老夫婦
見え見えの駄洒落の足をすくわれる
歳かねえ変なプライド捨て切れず
不器用で迷路出かねている自分

西村早苗

淋しがりやで騙されればかりする師走
これも付き合いデパート前の社会鍋
いい友が居て鰊漬今年また
氷雨とや遠い雪女にする電話
ちゃんちゃんこ温けりゃいいと派手を着る

石川侃流洞

反論避けそっと輪を出る年の功
平成の志士 晋作 龍馬に程遠い
考古学祟りは知らぬ墓を掘る
窓ガラス拭いて冬の陽ひとり占め
冬の陽へ輝くだけの枯すすき

堀端三男

迷うだけ迷え時間たっぷりある若さ
従いてゆくつもりふところ開け放つ
元気だせ他人は軽く言うけれど
誠意見せるここが思案のしどころだ
川柳塔誌着くの朝から待っている

川島諷云児

行く宛のない手紙がひとつ昼の月
雑談の中から拾う処世訓
逆らわぬ主義で愛妻しています
年齢に嘘が言えない誕生日
一期一会罪な約束してしまう

藤村〆女

忘年会陰で世話役軽くもめ
一年が倖せだった除夜の鐘
日記帳だけは真っ白でスタートす
若水を汲む母の背も丸くなり
健やかな顔が揃うた元旦の膳

八木千代

大山の雪を製氷皿にまで
何が起きても大山さん川柳さん
大山の吐息　あたりを霧にする
我が身にもざわめく大山の芒
影大山もむらさき旅に出たくなる

藤井明朗

紅葉あざやかに私の人生観
御礼もいろいろ菓子箱が似合うわが家
力作の展示趣味のよろこび文化祭
感謝感謝無事二十世紀暮れる
孫の結婚式二十世紀を飾るしあわせ

西田柳宏子

頭掻くくらいの失敗なら許そ
羅漢さん揃うた頃には眠うなり
母が居ること確かめてワッと泣く
おだてたらあかん天まで昇る人
一次パス二次パス最後で落とされる

河井庸佑

お互いの意思は尊重して夫婦
趣味として今度は筆を持ちはじめ
行き帰りコースを替える散歩道
紅白の山茶花狭い庭和む
玄関に初春の風呼ぶ福寿草

二宗吟平

杖持たず歩いて足にストをされ
山車の喧嘩応援多すぎる
山を焼き昇るお日様拝む幸
暖冬にだまされて咲く梅の花
二度とこぬ人生きっぱり跳ね起きる

玉置重人

身の程は心得ている靴すべり
好きに起き好きに寝ている顔の艶
しぶちんをしてたら孫に嫌われる
遺言を書き替えておく新世紀
簞笥にはいっぱい肥やしやってます

土橋螢

ありがとう忘れた愚かもの同士
折り返し点にこぼした栗の毬
大和魂　純真な火の匂い
不可思議な慈悲の光に照らされる
二十一世紀元旦にありがとう

舟木与根一

五十年　二人羽織はどんぴしゃり
初恋をたどれば放課後のピアノ
道草が多くて話よく分る
老人の財布を当てにする政治
カラカラと夕日も落ちて秋が逝く

野田素身郎

これ以上飲めば毒よとママは注ぎ
少しだけ心配がありレントゲン
再入院今度は危ないなと思う
目が覚めた生きていた寒い朝
戦争を知らぬお方の平和論

恒松叮紅

いい家族屠蘇を囲んで笑う声
幸せがいっぱい詰めてある日記
胸はもう女甘えが治らない
失礼は歳に負わせている元気
リフレッシュこの頃飯が旨くなる

斉藤劦

風のない日のコスモスの無力感
リュートの音色に耳をそばだてる
いつだって津軽を抱いて生きている
ロボットもロボットペット欲しかろう
初春の水をあげましょシクラメン

遠山可住

新米を先ず仏飯へてんこ盛り
健康法妻ありがたく小うるさく
くらがりでトイレへ立てるのも我が家
鍵穴の奥は仏に覗かせぬ
たどりついた海で落葉は春になる

金井文秋

あほらし嬉し卒寿で介護保険出し
こころからお詫びと涙出ていない
大丈夫だ大丈夫だと医者嫌い
悪役と言う転業もある世界
世界一鮮やかな旗なぜ嫌う

芳地狸村

五十年いまも生きてる操子の碑
リズムよい呼名 句会を盛りあげる（五十回記念市民川柳大会 2句）
川柳が表彰うけた文化の日
絵手紙の筆に惚れてる旅便り
絵手紙にたがいが競う展示会

月原宵明

過去と言う美しい絵を見つづける
広辞苑何度もひいた跡がある
少年の自分に戻る森へ行く
頬杖の真っ正面にいた蜥蜴
定年の日課となっている昼寝

宮口笛生

生きていて良かった二十一世紀
新世紀元気に明けた祝い酒
酒量まだ落ちずめでたい新世紀
新世紀始動至福の計を立て
百歳を目標にして新世紀

越智一水

名前負けしたと努力を口にせず
サービス残業人間でない汗をかき
群竹に洩れる光は仏さま
杖などは持たぬ心の杖は持ち
喋るより聞きてにまわる徳を持ち

工藤吟笑

書初めに明治の筆が意地を見せ
借りもなし貸しはなおなし寝正月
鉦の音に浮かれて踊る夫婦獅子
何がなくとも心だけ錦なり
青筋を立てる程ではない話

木村あきら

快眠快食今年も一年頑張ろう（八十六翁）
福笹が街中をゆく初恵比須
お揃いの頭巾が温い六地蔵
筋金の一芸持っている余裕
初詣で済ませ賀状を待っている

森下愛論

新茶汲みほっとひととき春息吹く
胃袋へ真紅のバラの突き刺さる
弱音など吐かぬ俺には酒がある
そしてまた己を騙す酒の日々
てのひらの酒の一滴いとおしく

弘津柳慶

手拍子を合わせて会場盛り上がり
嫁にみなまかせて我が家平和なり
抵抗へどうにもならぬ消費税
浦島を帰して姫のヒスが出る
賛成の拍手で会議締めくくり

波多野五楽庵

四季五節 病を忘れ想い出し
阿修羅めく冬の鼓動の目覚めたり
期すること二つや三つ持っている
定年と言われ限界とも言われ
冬眠の覚悟をせまる始発バス

正本水客

汗ばんだ肌に夜風がこころよい
頬杖をみていてくれる人がない
下駄箱の上かたづけて淋しがり
恩に着ていますと意外なことを言う
嘘ついているなと顔は笑ってる

黒川紫香

舞台裏で表彰式を待つ暗さ（松江市総合文化センターにて）
宍道湖七珍 先ずは蜆のおつゆから
松江では小泉八雲と不昧公
お辞儀してお城を拝む屋形船（堀川巡り）
岩陰に女の肌を見た露天風呂（海潮温泉）

小西雄々

今年こそ北窓も開け嫁を待つ
菊愛でて幸せを知る葱坊主
夕食の味ロボットが文句いう
半壊をなげかず全壊だってある（鳥取県西部地震 2句）
愚問などしない余震に散る椿

両川洋々

新世紀残る味方の数を読む
春の乱はっきり僕の負けである
置きみやげだろう地雷が今日も裂け
ボケたって籍はこの世に置いてある
精いっぱい生きろと僕の神が言う

田口虹汀

八十年も前の写真で皆笑い
皆さんの俤浮かべ書く年賀
自選集出ていませんと電話来る
世紀が代わる錆びた頭脳を入れかえる
龍が巳になって天下を塗り替える

野村太茂津

この先を思えば忸怩疼く胸
忸怩たり泣き言ばかりアドバイス
その人の悪口その人の前で言う
悪口でないこれからを思い遣り
あまりにも自分を美化し過ぎないか

河内天笑

箸紙が一枚増えたお元日
微笑みを添えて挨拶返される
低周波音から逃げて土いじり
たとえようないほど旨いひとくち目
いつ地震来てもよろしいリュックサック

『寺尾俊平句集』評

花の光りの中へ

橘高薫風

昨年、石田柊馬さんをはじめとする気鋭の柳人の合同句集を見て、寺尾俊平は今も生きている、の実感を強く覚えた。

六大家のそれぞれが、その一派に大きな光明を残したように、突出した一人の作家は、誰彼なしに影響を印して行く。

六大家は六大家の地層に於て、その後進たちに稗益したと同様に、寺尾俊平は定金冬二や中尾藻介、今も活躍中の堀豊次や岩井三窓とともに、その世代の地層に、多くの後輩の進歩展開をうながした。私はそれを感じた。

寺尾俊平には過去に『葦川』（いせん）と『風の中』の二つの句集と、『海が沙漠か沙漠が海か』と題する句文集があり、いずれも高い評価を得たものだが、ここでは触れず、昨秋の一周忌に出版された『寺尾俊平句集』の大凡を紹介するにとどめる。

句集の著者の写真といえば、取り澄まして構えた容姿、表情の多いものだが、この句集の著者のたたずまいは、玄関先で、笑顔で、「やあ、いらっしゃい。よく来て下さった」と言っているようで、まるで自分の部屋へ案内するようなアットホーム的風情があり、その人柄がまことによく出ている。我々は、のっけから寺尾俊平の虜になってしまうのだ。

この脚は砂漠を歩くだけの脚

何か関節がぼあっとふくれた駱駝の脚のように私は感じる。俊平さんあこがれのシルクロード、さまよえるロプノール湖のあるタクラマカン砂漠を詠んだものだ。巻頭の句。

石斧に柄なきさびしき雨の国

これは一転して、日本は備前岡山の納屋の隅にある農器具の姿か。木も腐れ果てる湿度。

六月二十三日紫陽花届きぬデモ通りぬ

私の好きな句、大会での秀句ではなかったか。鮮明な印象が私の記憶の中にある。

夕陽を帰る背なは猫背の小役人
夫婦湯につかり枯れゆくこと語る
金婚万歳ぽろっと落ちた妻の角

これらは自画像と夫婦像である。大蔵省印刷局に勤めた小吏の姿だが、陶渊明を最も愛した清楚な理想主義者の矜持を持っていた。

夫婦仲は、この度の遺句集出版に際しての夫人の執心ぶりにもうかがえることだ。

洪水や牛の涙を見てしまう

川の中を牛が流されて行く。激流に揉まれる中、牛の目が涙で光ったようだ。あるいは、テレビでのベトナムやインドの牛、水牛の群の映像かも知れない。ナイーブな心象の句。

リンゴ食べるまでの馥郁たるイヴよ

アダムとイヴは禁断の木の実を食べて楽園を追われた。それまで気高く香っていた女性の匂いはリンゴに移ってしまったようだ。

貧しさに馥郁として林檎の香　　三窓

に触発された作か。

三つの葬に同じ貌して歩くなり

肉親の葬以外、人は悲し気な顔はしない。

葬式で会いボロいことおまへんか　豆秋

の類いである。たて続けの葬の体験句。

ロバートも太郎も陳も死ぬいくさ

太平洋戦争の有り体を言ったもの。俊平さん自身、中国の広野を行軍の明け暮れだった。

梅干しをるいるいと干す南京虐殺
銃弾が花びらとなる国境の壁

人類は何故戦を好むのだろうか。新世紀の平和を祈らずには居れない。

蝶消える花の光りのその中へ

俊平さんには蝶の句が多い。この句を理想としたのだろうか。ロマンチスト巻末の句だ。

秀句鑑賞

何回めかの秀句鑑賞の、連絡を受けた。喋ることと書くことが、大の苦手ではあるが、平素、塔社の運営になんのお手伝いもしていないだけに、お詫びの一助にもと、お引き受けしたものの、浅学非才の身には如何にも荷が重く、ペンも中々進みません。

お父さんはやはり川柳々々云ってるよ

この句は句集「師弟」29頁所載の、路郎師の愛息一周忌の句である。お子様の父親をみつめる目を慮っての、句と拝察するものですが、塔社同人の皆様方の、川柳への情熱も、人後に落ちるものではない。それだけに千数百の、粒よりの玉句の中からの選句だけに、意に添わぬ点もあろうかと存じますが、よろしくご寛容の程をお願い致します。

ともあれ私自身も、何とか一句を残せるように、ある時はもがき、ある時は苦しみ、の連続で川柳を楽しんでおりますが、中々思うようにはゆきません。これも川柳教信者としての宿命で、ひたすら歩くより他はないものと考えております。

同人吟　玉置重人

—12月号から

どんな陽が昇るのだろう新世紀　内海幸生

不安定な政局、長びく低金利政策、近づく医療費の改訂等々、正義派の作者ならずとも歯痒いことの多い今日此の頃、新世紀を迎える期待の大きさと、そこはかとない不安が窺える。巻頭を飾るのにふさわしい、スケールの大きさを感じさせる。

米がなくなると帰って来てくれる　小島蘭幸

我が子を信頼して、良い意味での放任主義に徹する、おおらかな父性愛が見事に表現されている。お子さん達もそんなお父さんが大好きなのである。

しっかりと生きねば介護されそうだ　高田美代子

此の句、私達の生き方に警鐘を鳴らしてくれた。自分の体はしっかり自分で管理しなければ、足腰の衰えは意外に早い。安くはない介護保険料であっても、介護されるよりも掛け捨てている方が、ずっとマシではある。

りんご捥ぐいのちを包むように捥ぐ　西谷大吾

収穫時の、りんごに対する作者の思い入れが、痛い程伝わってきます。非生産部門での仕事しか知らない筆者ですが、中七の感情表現のすばらしさに、もの作りに携わっておられる方々の、喜び、楽しみぶりに感銘を深く致しました。

都合よく忘れ上手で生きている　岸本孝子

そうです。人間生活を永くやっていくからには、適当に忘れることも大切です。何もかも覚えていては、右脳も、左脳もすぐにいっぱいになって、それこそ本当のボケが早まりかねません。

都合の悪いことは、上手に忘れてしまうことこそ、生きて行くひとつの要諦かも知れません。

人間とヒトの継ぎ目を模索する　松本たゞし

人間の隙間でヒトが溺れてる　川上大輪

人間とヒトを巧みに使い分けた、川柳作法が光っている。人間とヒトはどちらがジキルで、どちらがハイドか面白いテーマで、一度作者にお伺いしたい気がしないでもない。

金魚鉢の水を揺らした震度六

余震が去ってまた汽車が着く汽車が出る　新家完司

さえきやえ

10月6日の、震度6の強震は、鳥取の方々にとっては、いつまでも記憶の底に残るものと存じますが、川柳作家はその恐怖感を実にさりげなく、詠みこなしてしまうのであるが、それだけに余計強烈な実感として、伝わってくるものが大きくなってきます。

百歳の笑顔も皺も宝もの　刈田泰司

百歳以上の人口が、一万人を越えたらしいが、それでも全体から見ればまだ僅かで、此の句もよく実感できるのである。

最近百歳を句材にした句を、よく見かけるようになったけれど、他人さんの長寿も大事だが自分自身も、なんとか元気で百歳をめざしたいものです。

結構なことに毎日目が覚める　小池しげお

飲むものを飲み、食べるものを食べて、ぐっすりと寝ての、快適な目覚め言うことはありません。日常のなんでもない暮らしぶりを見事に捉えてしまう作者の卓越した川柳作法に、なんとか近づきたいものである。

読み耽る夫のそばで孤独なり　宮本欣史子

読みながら、見ながらの生返事で妻によく叱られる筆者には、作者の心情がよく判るけれど、恐らくこのご主人は難しい専門書を読んでおられるのであろう。この句、孤独なりと嘆いているようだが、熟読してみるとご主人をよく理解している作者の夫に対する信頼ぶりが、そこはかとなく窺える。

携帯で喋る電話機のそばで　津守柳伸

よく見かける風景で、世相を上手に捉えた風刺の効いた楽しい句になった。一説によると携帯のおかげで、公衆電話の利用者が減っているらしいが、その分携帯の伸びが著しく、NTTドコモの決算は、笑いがとまらないとかで、北浜雀が騒いでいるらしい。

開けゴマ　テイッシュを配る青年よ　永田俊子

試みに其の気でターミナルを歩けば、びっくりする程のテイッシュが溜まる。おそらくはフリーターかと思われるが、配り手の青年達の異様とも思える風態には、辟易させられるが、この句これらの青年達の未来を案ずる作者の優しい心根が、上五に余すところなく表れている。

プレミアム付くかも知れぬ守礼門　山口高明

時流を巧みに捉えた句で、二千年の語呂合わせだの、サミットのおまけだのと、芳しくない噂も飛びかったけれど、あの二千円札はどこへ消えたのだろうか。筆者も紫式部に一回お目にかかっただけで、ついぞお会いしていないが、プレミアムのついた彼女には、強いて会いたいとも思わない。

断層が動いています十二月　島ひかる

十二月を詠んだ句は、それこそゴマンとあるので、普通に捉えていてはとても、選者の目にとまるものではない。その点から見れば此の句正に見付けのすばらしさが、群を抜いている。それにしても、断層が動く十二月とは恐れいりました。

傀儡のトップが頭下げている　渡辺富子

最近の新聞を読んでいると、各界のトップに立つ人々の頭を下げている記事や、写真が余りにも多く、うんざりとしてしまう。が言い訳に終始する姿は、戴けたものではない。中でも医療ミスの問題は、命に拘わる事だけに、善処して欲しいものである。上五の皮肉が効いて、秀れた時事吟になった。

板尾岳人選

三田市　久保田千代

ジーパンの脚が正座に軋み出す
座り方　歩き方まで母親似
空白の手帳に痛み垣間見る
空の箱燃やして過去にけじめつけ
箱入りの娘に誤算の虫がつき

今治市　越智青園

元旦や年賀の蛇が寄ってくる
油断すると男結びがとけている
やり直す涙は横へ置いておく
切り取れば名画が出来る里の秋
エンジンがかかりにくなる老年期

和歌山県　中村君枝

妻の癖よくも飽きずに出る小言
気軽さを受けて路上のアーティスト
口下手が足で伸ばした棒グラフ
もつれ糸義理が絡んで四苦八苦
悪い癖はみんな父さん譲りだよ

米子市　小塩智加恵

見てるだけ落ちるがままの震度六
忘年会当ても無いのにチラシくる
二〇〇〇年得より損が多かりし
無理をして派手な服着てクラス会
親 子 孫みんな昭和で丸くいる

出雲市　伊藤玲子

美しいもの綺麗と言える子で安堵
カレンダーめくる指先から冬に
途中から仲直りした引きかえす
絵手紙の誘いにのって化粧する
手の届く幸せもらい米をとぐ

堺市　和田つづや

僕の子に生まれてくれて有難う
至福感やっぱりブルーマウンテン
感情の理屈ないまま好きになり
望郷というトンネルを抜け出せず
僕にない銀杏落葉の自己主張

羽曳野市　川口信子

スカーフで包む恋ですこわれそう
聞き役に回りミカンの筋をとり
ポケットの中で育っていく野心
見舞客上手に嘘を置いてゆく
拭きとった口紅恋がついていた

北九州市　岡田幸生

授業料だったと損に区切りつけ
小粒でも妻には宝指の石
釣ってきた鮎の自慢に招かれる
毒を持つ花だと知らず一目惚れ
ぽろり出たジョークの中にある本音

岡山市　大森純子

魂はおきざりにして少年法
記憶にないそれは大へん脳ドック
政治屋を放うりこみたい洗たく機
恥を知る人は住めない永田町
寄せ植えの花壇銀座を凱旋す（巨人日本一）

鳥取県　山下節子

残り火を損のないよう燃やしきる
きっかけはどうあれ今は夫婦です
振り出しに戻り作戦練りなおす
おおこわい私の急所知られてる
ケーキより高い値段の焼いた芋

今治市　中村好恵

残すものないが生きざま見せる背な
老化かも短気になった捨て台詞
闇の中に居るから見えるものがある
ジャンプして空の広さを見た蛙
しなやかに生きよう思いきりジャンプ

今治市　塩路よしみ

てにをはの一字に迷い初春巡る
仏間の灯点せば罪は消えますか
四捨五入四捨にわたしの席がある
写経百巻祈りを込めて筆洗う
美しい嘘を演じて夜を眠る

愛媛県　花岡順子

改装の駅が他人のふりをする
コスモスの中に故郷の駅がある
どんな時もピエロ仮面をはずさない
当たり前の顔でいじめるから怖い
シャボン玉一度輪切りにしてみたい

松江市　津川紫晃

しあわせな下着並んで干してある
風去れば落葉一面戯れる
虫の声読む書く綴る長い夜
秋雨でメモの余白に腰おろす
酒呑んで直る傷ならかすり傷

倉吉市　牧野芳光

一本の杭は迷わず動かない
もう一人私がいたら喧嘩する
いち抜けて取り残される木偶の坊
真剣に嘘を聞いてる馬の耳
二重丸つけた河童が溺れだす

鳥取市　録沢風花

青春の夢を探しに戻りたい
生きて行くルールが増えて住みにくい
戦争のない約束を見届ける
木枯らしが老いを身ぐるみ剝いでゆく
よく笑いよく泣きました二千年

鳥取市　有沢せつ子

日めくりに今日の感謝をしてはぐる
ハイテクの職が邪魔してまだ嫁かず
風の子をテレビゲームに奪われる
くじ引きで決めた上座もいいものだ
約束のようにパーマが伸びてくる

鳥取市　田賀八千代

うつり気なハートに歯止めしておこう
だれにでも青空があるきっとある
月世界覗けば夢が壊れそう
木枯らしが吹くと古傷痛みだす
やさしさで痛み解かして欲しく待つ

鳥取市　横田春名

終章のページお礼が溢れ出す
振り向いた笑顔に小言吸い込まれ
お喋りの母は無口な父と住む
紅葉が冬芽育てるすばらしさ
秋日和夫と諍いお茶点てる

米子市　猪森スミヱ

やれやれと衣脱ぎ捨て冬木立
避難する準備ゆるんだ頃揺れる
震度五のあれから喧嘩しなくなり
大根は地震をよそによく太り
ブランドのバッグの中味見たくなる

鳥取県　鳥羽直市

精いっぱい生きたが残すものがない
明日のため今日をしっかり泳ぎ切る
程ほどに妥協しながらついてゆく
結果論浮世はいつも騒がしい
頑固さをとれば男の価値がない

鳥取県　澤裕子

小さくても尾頭つきの祝い膳
きっかけは街で拾った無駄話
振り出しは未来バラ色だったのに
深追いをする愚かさに気がつかず
愚かさを補い合って来た夫婦

鳥取県　鳥羽玲子

片方がちびる親子で下駄も好き
絞る程濡れてしまったにわか雨
ばっさりと記念日髪をかえてみる
やわらかな書体人柄偲ばせる
夜も更けて心静かに日記書く

鳥取県　西沖彰雄

一日の始まり朝の薬飲む
生きている証時どき腹が立つ
本当の事を言われて腹が立ち
正直に生きて噂の種になる
今日も無事終り両手を洗ってる

島根県　武島ちよえ

至福かも足踏み入れた新世紀
ご意見が懐炉のように効いてくる
これ以上回れば折れる独楽の芯
耐えているスルメ奥歯で噛みながら
三日月にそっと願いをかけている

島根県　福間博利

永代供養やっぱり海へ撒くとする
永田町期待するから腹が立つ
夕焼けに会いたい宿で雨に合い
渡し舟　往復切符で乗るつもり
いちじくを毒味しているかたつむり

横浜市　鈴江純子

とりもった情けが仇となる誤算
旅先へ夢がひと足先に飛ぶ
めぐり会い描き直した設計図
突然のプロポーズまず眼鏡拭く
即席のスープ我が家の味となる

横浜市　田中笑子

引き出しにしまった知恵が減り始め
自慢げな話携帯からこぼれ
過去のこと知りつくしてるカレンダー
走り書き残して妻は今日も留守
開店のチラシに心はやり出す

横浜市　平達也

初日の出喜寿も重なる新世紀
諦めることも大事と悟る酔い
夢の中絶えて久しい人と会う
もうろうと無念無想の禁煙日
損に損重ねた株に老いの悔い

横浜市　山梨雅子

格式を避けてハワイで式を挙げ
受話器からいきなり泣かれ飛んで行く
偶然にくにが同じで里言葉
心掛け次第と老いを遅らせる
休日の散歩犬にもリボンつけ

横浜市　保田絹子

楊貴妃を彷彿させる螺鈿琵琶
梅干を目当てに子らがやってくる
ふくらんだ夜具ご馳走の中に入れ
変形の爪に不調を知らされる
言い訳に皆の視線が突き刺さる

横浜市　金森徳三

新世紀会えてよかった生きていて
ミレニアム大地ゆすって竜は逃げ
休肝日年末年始フリーパス
洞爺湖を激励兼ねて予約する
惚けと癌　付き合いません喜寿の道

横浜市　近藤道子

温め合う言葉をさがす電話口
どの子にも躾が欲しい電車内
こだわりを愚かと笑う鬼がいる
修正液いつも手元においてある
国民のための政治が曇ってる

横浜市　伊藤ふみ

イタリアへ胸弾ませて雲の上
何とまあ落書きばかりミラノ街
ゴンドラでルネッサンスの風に酔い
カンツォーネ聴くよりローマ闊歩する
ポンペイのロマン灰から日の目見る

八王子市　井上京一郎

変化球知らず直球だけに生き
違和感は達筆すぎるお詫び状
行列でランチタイムを使い切り
合併は足して二で割る人減らし
大あくび猫直線に背を伸ばし

静岡市　中西雅

温泉に米寿を浮かせ乾杯す
故郷を持たぬ淋しさ秋の雲
線香のむこうの夫はまだ四十
指切りを果せぬ小指爪がのび
井戸端のきしむ音する耳の奥

尼崎市　松下比ろ志

菊もいろいろ自分の色は忘れない
少年荒れる温もりのない陽の下で
夢を追う日はずんずんと去って行く
コスモスと青空向いて深呼吸
起きて寝て美味い空気がありがたい

篠山市　円増純子

大宇宙の一点となる生を受け
恋知ってからはやさしい人になる
花時計　恋の駆け引き見つづける
おいしかった母の味まだ越えられず
合鍵を持ってる人がひとりいる

兵庫県　広瀬房江

携帯が真っ赤になったアイラブユー
意地悪を笑顔で受ける腹の虫
蝶々はん中座を連れに逝きはった
なんとなくブルーになっている絆
晩年の孫が抜いたよ鬼の骨

富山市　沢江和代

引出しに全財産があるくらし
ハモニカを鳴らして想うひとりぼち
旅慣れた鞄にあった小さい傷
明日は雨　手糸を買いに行きましょう
和やかな団欒ほしくみかん置く

香川県　瀧井勝

言葉など要らぬ黙って笑み交す
徒花と知って咲いてる花はない
妻だから小さい花も褒めてくれ
弱体が親父の歳を越す平和
冗談に忍ばすだけでよう言わず

日立市　加藤権悟

母の待つ道だ渋滞なんのその
大物が酌めば意外な泣き上戸
無位無冠　世辞は苦手な父である
いただいた馬齢夫婦の屠蘇温い
燃え上る海だ二十一世紀の鼓動

京都市　山本礫

百歳に一歩近づく屠蘇の味
年金で寒いデートをしています
身体ごとぶつけて生きておりまする
蛇になったら逃げた男のとこへゆく
福耳の友人へ書く年賀状

京都府　前上英一

この道の向こうに信じるものがある
信号の青に騙されそうになる
穏やかな道にもあった落とし穴
実力を買い被られている重荷
聞き役にされて酔えない酒となり

大阪市　中村忠敬

名幹事支出超過の穴を埋め
一合でダウンしているもと酒豪
百薬の長が肝臓痛めてる
はしご酒やめてお医者のはしごする
ぜいたくな秘湯めぐりだ入浴剤

大阪市　星野きらり

子供らよ私をコピーしておいて
ふる里の匂い探しに汽車に乗る
やき餅も焼いてみたいが火種なし
衣食住足りて足りないものさがす
いちびりの雑魚で時おり釣られそう

大阪市　尾崎黄紅

或る日老い仏の数を並べてる
絵に描いた猿がわたしに似てるらし
春も駆け足秋も駆け足老いの愚痴
裏庭に火鉢三つの植木鉢
こう言えばそうではないと頼れそう

大阪市　大川道子

乾杯に下戸をわすれて音頭とる
席ゆずる十七歳に安堵する
クラシック聴いてひとりのロゼワイン
紙ほどの段につまずく老いの坂
たまに来る嫁はコロコロよく笑う

大阪市　中井正秀

景品に粗品ですがと花の種
年金に介護保険の痛いこと
喜寿近し耳がゴチャゴチャやかましい
怖がりも大胆もいる鳩の群れ
ストレスを溜めない為に趣味を持つ

大阪市　遠藤正敏

口笛でコロリ良心撃ちぬかれ
濡れてみたい女が傘を持っている
どのように話そう泣いている海に
いくつもの答を持っている柩
戻れない故郷がある除夜の鐘

大阪市　熊代菜月

枯れるまで私でいよう自我のまま
露天風呂かれ葉に愚痴を聞かせてる
口さきではげまし言って自己嫌悪
世間てい気にして嫁にやりたがり
世渡りの下手な夫が今も好き

吹田市　須磨活恵

胸底へ火種沈めて冬を越す
来年の為にと花の首を切る
夢心地私を欺く万華鏡
赤貧の詩人が貪る冬の月
うさぎ小屋いいえ私のお城です

吹田市　木下敏子

いいことがありそうなお茶入れている
蒔いた種いつか刈る時期訪れる
日々感謝夫婦茶碗が並んでる
今日よりも明日は佳い日の米洗う
コスモスの風に幸せふくらます

高槻市　乙倉武史

あれ以来出土化石は泣いている
脳細胞目減りと解る物忘れ
人間は喜怒哀楽に酒がいり
捨てる神あれば再生拾う神
来年も生きる積りの種を播く

岸和田市　亀井皎月

よい歳とただひたすらに願うなり
年賀状元気な証知らせあう
健在を誇示する如く賀状来る
まだ先だ自信を持てと屠蘇も言う
年始め倖せそうに見えるだけ

岸和田市　不破仁緑

マネキンも胸元隠す秋深し
おでん屋の湯気の向うにあるドラマ
ダイエーが敗けたかそうか早く寝る
自分史の所どころにある秘密
この妻も亡母に似てきた栗ごはん

岸和田市　木村正剛

出会いから神は悪戯ばかりする
いろいろとあったが水に流せそう
待つうちが花で釣具の総点検
躓いてもラスト半周残すのみ
鈍行の終着駅が見えてくる

八尾市　平川幸枝

歳月の青い炎を抱きつづけ
秋の夜に声届きそう亡夫の星
味噌汁を器によそうタイミング
哲学の貧乏ばなし髭がする
流されずボロは最初に見せておく

寝屋川市　岡本勲

欲の皮張る足元を見透かされ
この道を選んで人生悔いはなし
親に似ていつまでたっても頑固です
料亭の味より妻の慣れた味
騙されたふりして言い訳聞いてやる

河内長野市　大西文次

新世紀明治生れも仲間入り
大阪で見染めハワイで式を挙げ
無口ではない英会話出来ぬだけ
後輩に極楽行きを追越され
犬掻きで無事に終った我が渡世

大阪狭山市　矢野梓

縄のれんくぐりストレス捨てに来る
押し寄せる老いを素直に受け入れる
腹立ちをひとまず押さえ米をとぎ
汚れてた神の手土器は知っている
深刻な話にそっと座を外し

大阪府　前田忠子

御仏の微笑に癒やされ古都の秋
飽食や鹿 せんべいにそっぽ向き
穏やかな時代でしたね竹とんぼ
木の枝に蝉のなきがら十二月
しなやかにクリスタルにと新世紀

和歌山市　上地　登美代

ねつ造へ男ロマンの夢を描く
うす味で明日の命と手を結ぶ
思案する辻でタバコを二三本
波乱万丈越えてまあるい石になる

和歌山市　木村　親踌

宅配の海老は二三度はねて見せ
運勢は押しの一手と言うみくじ
酒煙草飲んで薬も手ばなせず
携帯と言う字も知らず持ち歩き

和歌山市　武本　碧

花形の自信B面など見せぬ
何食わぬ顔して骨を抜きにくる
天才は無口な棒で指揮をする
乗りかけた舟も思案をする不況

和歌山市　今一　歩

頼りない脳の支えにメモの杖
風呂敷に包んだつもり愚痴こぼれ
リストラで産児計画消えてゆく
風邪予防温湿度計医者代り

田辺市　大峠　可動

悲喜交々　大動脈が波を打つ
歯に衣を着せて点線ばかり書き
百年の史はブルーの罪を抱き
生者死者人の史にてささやかれ

和歌山県　森下　順子

老化かな金木犀が匂わない
損得でいえば勘定合っている
またふたり男が欠けたクラス会
スーパーのわけありりんごフル利用

和歌山県　坂東　和代

新聞へのるような事してません
ストレスが溜まり三段腹になる
初恋のようにはかない昼の月
預金から引かれる事がまた一つ

和歌山県　村中　悦男

特選にしたい自作の柿の色
柿一つ青い大空画布にして
艶のある顔の人から艶話
功績という程のない温い過去

河内長野市　木太久　正一

故郷へ土産は今も粟おこし
うっかりを補い合うて今日も無事
蝶々さん笑顔のままで天国へ
よく生きて来たなと思う床の中

河内長野市　柏本　靖子

お隣と張り合っているしめ飾り
筋書きを少し外して生きている
踏ん切りをつけて合鍵置いて出る
秘密など持たずに円い暮しぶり

河内長野市　杉谷　カズエ

空缶に溜める小銭は気が長い
今だけの話が出来る友といる
惜しいとも惜しくないとも言う命
お茶漬けの味を忘れて胃が縮む

富田林市　中崎　深雪

犬と歩き友達できる都市砂漠
家路つく足急がせる秋の暮れ
ていねいにコーヒー点てて秋の宵
秋霖に洗たく物もしょげている

泉佐野市　備後　三代子

紅葉を添えはんなりと京御膳
あれそれで言葉の足りる老い二人
手おくれに医者のすすめるカルシウム
会釈してゆずり合うてる裏参道

吹田市　二宮　栄子

主役の座孫にうばわれ嬉しい日
電話口代りばんこの声を聞く
たどたどしい孫の手紙に泣かされる
いい夢で目覚め現実一人ぼち

吹田市　太田　昭

一本の歯を抜くごとに父に似る
沢庵と番茶が似合う歳となり
どん栗の転がる音の子守唄
ウォーキング秋を拾って今朝の径

大阪市　三浦　千津子

新年へ座り直してお目出とう
定年後少し違った風に逢う
中年の焦り輪ゴムが伸びている
冬の絵の中に情けの木守り柿

大阪市　岩崎　公誠

師のことば心に沁みる通夜の酒
過労死の記事が絶えない世紀末
花嫁は実家の空気を連れてくる
ジャンボくじやっぱりスカで夢成らず

大阪市　中澤　伽羅

秋風に心構えをする楓
年金のズボン折り目にある誇り
他人さんだったらけなしたりしない
新世紀迎えるところ思案中

大阪市　榎本　日の出

無職でも元気な声は生まれつき
騒がずに母はゆっくり言い聞かす
出世コース蹴って独りの母を看る
土壇場で女の腰が座ります

東大阪市　田中　美弥子

意地悪が可愛くなった恋ひとつ
意地っ張りもまあるくなって古希の友
嫁がせて未練を溶かす夫婦酒
山の湯に都会の疲れ溶けてゆく

豊中市　江見　清

澄む水に顔映し見る一人旅
年賀への添え書き友情また新た
あれ忘れこれも忘れて哀れです
童謡の挿絵どこかで見た故郷

高槻市　西谷治三郎

外車にも成田不動のフダがある
良かったなあバンザイ通勤せず定年
ゼロ金利改正されても粗品なし
ゴミの日にカラスがゴミを監視する

堺市　荻野像山

いか焼きの匂いを浴びて初詣で
川下の石の意見にかさぬ耳
悠々が苛々になる待ち合わせ
外で褒め内でみっちり利かす姑

堺市　喜多美波

今日の日を励ますように陽が昇る
低金利　骨はしっかり貯めてます
星くずが増えて行くだろ宇宙葬
留守してたドアに掛かるお裾分け

堺市　矢倉五月

ウォーキング月の明るさ誉めながら
頷いておこう脚色した箇所も
自惚れも時に私のカンフル剤
無理きいたつもりは独りよがりかも

堺市　田中紫

同い年話よく合う戦中派
化粧する鏡の中のサスペンス
いい年をしてと私もその一人
親切のつもりがとんだ迷惑に

堺市　村上玄也

後押しがあって立派な口をきく
裏かいたつもりで裏をかかれてる
今だから話せるという裏話
ガングロを落とすと女らしくなり

堺市　斎藤さくら

ごめんねの言葉で消えたわだかまり
山一つ越えて夫婦となりにけり
紅葉のリズム狂わす温暖化
寝不足を解消できたバスツアー

枚方市　二宮紫鳳

生き様が残してくれた友の数
誕生日祝って山陰夫婦旅
財産は心豊かに生きること
娘の笑顔想い浮かべて宅急便

枚方市　小川良吉

満ちたりて未だ仏に出合えない
喜びも怒りも盛ん古稀を行く
想い出の染みた帽子が捨てられず
エステには縁ない妻の大あくび

八尾市　輿田　明

高齢化　僕は渦中にいるひとり
お開きにしようソロソロ荒れだした
補聴器へ咳がおどろくほど響き
茄子キュウリおいしい妻の一夜漬け

八尾市　中島春江

伎芸天か細き指の艶めかし
菊人形　姫も下女にも同じ菊
美容院うぬぼれ鏡笑みこぼれ
歯ブラシも一本になり淋しかろ

八尾市　田中トシエ

バーゲンと財布の紐が睨み合い
福耳のまま平凡に年重ね
庶民が見るに馬鹿げた政治劇
あの人が年賀来るのを期待する

八尾市　山本宏至

手紙出す相手まだいるしあわせさ
それぞれの哲学乗せた終電車
親の夢ピンクの似合う娘に育つ
口げんかすぐ茶をいれる妻がいる

大東市　井上すみれ

さわやかな気持ちにさせた菊日和
向き合って本音を生きる友がいる
中坊さんと新聞で会ったたのしさよ
パーマかけ鏡に愛想笑いする

藤井寺市　吉田喜代子

電話器を置いてそれから人嫌い
里帰りめぼしい物は持ちかえり
待ち兼ねるポストに今日も音がない
枯れて行く色気は少し残しとく

和泉市　小坂凡英

初日の出　余生二年目新世紀
牡蠣食うに宮島までと足伸ばす
月並みと言われて豚もそっぽ向く
ネクタイの出番去年は黒ばかり

和泉市　横山捷也

極め手を軽くいなして若い嫁
残り火を点す濃い目の眉を引く
病妻が娘の躾糸を解く
達筆を誉めて弔辞を押しつける

大阪府　澤田和重

お隣の噂ひろった美容院
回り寿司が性に合ってる子沢山
険悪な空気を変えた咳ひとつ
その事に触れず許してくれた父

神戸市　船津とみ子

わたくしのひ孫は男児可愛いよ
ベルリンは秋　娘と歩く至福なり
ジーパンですいすいと来た一人旅
七十五しっかり生きるベルリンだ

神戸市　木村忠義

コスモスは風が来ないとさびしそう
美人にもまさる笑顔の美しさ
定年後妻の不在が多過ぎる
また夫婦喧嘩の邪魔をする電話

姫路市　服部一典

年金が長生きせよと妻言わす
夫婦仲良かったはずが未だ呼ばぬ
老いひとり据え膳食べに外食へ
亡妻の椅子キッチンが想いだす

兵庫県　安達厚

惜しい人だったと言うてくれへんか
老人会パソコンやれと言うてくる
窓少し開けて世紀の音を聞く
さわやかな涙でドラマしめくくる

兵庫県　徳平毬子

先ず健康家事は後です万歩計
灯をともすパラリンピックの金メダル
軽口が話の花を咲き乱す
皆揃う夕餉楽しい今日の無事

兵庫県　黒崎美紗子

魚影に清流もどる里自慢
初顔のとなりと話す露天風呂
どの皿も食べて欲しそな回る寿司
ゴミ焼きの煙あちらも冬支度

京都市　勝山美千代

初春に一途に生きた道想う
美しく老いたい願い和服着る
廊下拭き今も変わらぬ糠袋
普段着が一番似合う年となり

京都市　三宅満子

八ヶ岳紀行

から松の林をぬけて富士を見る
女三人食べて笑って風呂三昧
八ヶ岳の空気を朝のご馳走に
雲海より上に顔出す富士の峰

長岡京市　山田葉子

いいとこへ出かけるように医者通い
身を削り成果を出した笑顔だな
失うものないよあなたの後を追う
犠牲者の上に築かれている平和

京都府　丹後屋肇

手をつなぐ車道の隅に老夫婦
夭折の手帳に太い感謝の字
雨だれの夜にショパンが飛んでくる
約束にやきもきしてる腕時計

横浜市　布山嘉信

越前に裁いて欲しいパレスチナ
晴れ着着ていても空缶そっと蹴り
記録的暑さビールに稼がれる
多数決押す横車気がつかず

横浜市　芦田鈴美

娘らを味方に妻が強くなり
男性が看れば美談になる介護
お守りに万能薬を持っている
みそ汁に訛溶け出す里帰り

横浜市　吉田裕峰

使われる度に逆立ち砂時計
書きにくい予定暦にマークだけ
日めくりが痩せていよいよ世紀末
お茶でもと誘いたいけど口に出ず

横浜市　巖田かず枝

クラス会流行の服が勢揃い
コンビニに負けないおでん煮ています
人生はプラスマイナスゼロで良い
週末は自分の背中押してやる

横浜市　秋元和可

罪の無い話題弾ける笑い声
ふる里は地球と言える未来の子
虹の彩あつめて夢を織る女
コンビニが独り暮らしの台所

横浜市　川島良子

笑ってる遺影にいつも励まされ
会食の妻が弁当置いて行く
学説も掘り返される考古学
再開発の街でわたしも若返る

横浜市　生坂サト子

冴え渡る月に魅せられ遠回り
シルエット スマートにした陽が落ちる
広告の限定数がけしかける
小骨まで無駄なく頼るカルシウム

横浜市　荒井広和

先人の知恵風呂敷に透けている
冗舌で本音を包む風見鶏
お遍路の詠歌に稲穂聞き惚れる
価値観の誤算同居をして気付き

東京都　清原悦子

鼻歌がお鍋の中で煮えている
よく聞けばホームレスにもあった愚痴
まだ欲があって答えを探してる
盆栽に父の想い出伸びている

東京都　井上つよし

声たてて老妻と笑えた仲直り
手拍子が腹まで響くフラメンコ（スペイン旅行　3句）
微笑んで消えたジプシー女掏摸
聞き惚れた他所のガイドに従いて行き

静岡市　増田扶美

走馬灯となってつるべの水を飲む
茶柱が立って賑やか朝の膳
鬼灯を友と鳴らした路地を行く
箸割って杉の香をきく京の旅

奈良県　古手川　光

同郷で話がはずむ縄のれん
大輪で応えてくれる菊づくり
腹一杯郵便ポスト賀状食べ
初詣で人の流れに乗ってます

宇部市　高山清子

晴舞台子の不祥事で退く羽目に
おしゃれして祖母も従いてく七五三
言い様で角立つ会話丸くなる
行きずりの指切り信じ待つ女

岐阜市　平野あずま

新しい暦 新たな夢を盛る
遠くから罠は見えない都会の灯
少年の心を開ける鍵がない
向こうから掛かれば電話長くなる

滋賀県　中　宗明

ページ繰り過ぎし日偲ぶ日記帳
生活にブレーキかかる不況の世
帰っても単身の父粗大ゴミ
みえみえのお世辞使って機嫌とり

青森県　福士トキ

わたしから逃げる若さに追いつけず
カラオケも唄えず拍手だけの芸
初冠雪急ぎ大根軒に干し
松ぼっくりお前もストレスありますか

札幌市　三浦強一

ヒトゲノム鬼と仏が同居する
歳よりも若いに弱い妻である
ご無沙汰を詫びてお墓へコップ酒
妻の目にガラクタ僕に宝物

秋田県　湊　修水

鈍行で紅葉の綾に逢いに行く
心まで染まり頬張るにぎりめし
晩秋はストンと暮れて茜雲
良いつかれ空の財布があくびする

秋田県　秋野　宏

名月をしばし隠すも雲の役
秋の風無性に過去を振り返る
どの街も副作用だな空の色
丸かじりするから話こじれてる

香川県　清川玲子

走り癖ついてる靴で休めない
打ち明ける決心までの長い距離
有情無情当った壁に教えられ
車窓には何も見えない母の訃に

香川県　原　賢

一歩退き下がると見える碧い空
辛くても笑って生きることにする
老いてから私の涙もろくなる
腹の内見せて懺悔をする柘榴

愛媛県　宮本末子

石蕗の花に短くなる月日
口車ただなら乗って見るもよし
いつも来る位置で蛸焼唄を乗せ
十月の葬へ手袋入れ忘れ

愛媛県　安野案山子

荒波が迎える冬の日本海
街路樹が泣き出しそうな空模様
六十にすべすべ肌をくれたお湯
言い訳をするなお酒がまずくなる

愛媛県　黒田茂代

屋上の風はひと足早い冬
終章をまだ考えた事が無い
背伸びしてみても神にはお見通し
黄昏を模索している影法師

高知県　近森功

大鍋におでん煮込んで妻の旅
噛んだ脛　墓参ですます恩がえし
遠い日の夢をひもとく母の里
くすぶりを風がいたずらする火種

鳥取市　山宮愛恵

門番のように揃える男靴
一部屋で足りるひとりの暮しぶり
不器用な脳だとちってばかりいる
錆止めに毎日茸を食ってみる

鳥取市　山口千代子

老いてなお女心に紅を引く
算盤を弾いて老いの計を立て
八十路過ぎ何処でも行ける足をほめ
いいことが有ると長生きしたくなる

鳥取市　岡田信恵

無駄遣い野暮でしたねえごみの山
大役にストレスいつも付きまとい
幸せをしっかりつかむ胸のなか
欲ばった重い荷物も感じない

鳥取市　田中憧子

生活にゆとりできても風邪を引く
日替りで心の色を染めてみる
妻の目の届く半径心地よい
割烹着つけると背筋のびる母

鳥取市　福島庸二

遊びなら重い荷物も気にしない
持ち物を何度もチェック旅支度
肩寄せておでんをつつく寒い夜
同じなら笑い上戸に酌勧め

米子市　森脇麗

華やかに咲いて見せます年女
流行はどうあれ好きなピンク着る
天高くおんな心と体重計
穏やかな川の流れに似た夫

米子市　足立　由美子

正座して今年の抱負考える
今年こそ今年こそはとまた想う
一服のけむりの中で謎が解け
少しずつ違う角度で解いてみる

倉吉市　大下　智子

子に送るあれもこれもと荷が太る
新聞に元気をもらう川柳欄
自信など毛頭ないが生きている
陽にあたり古い毛布がよみがえる

鳥取県　山内　芳江

うっかりと口を滑らし出たシッポ
プライドを捨てて気楽に行く余生
ストレスが消える楽しいショッピング
振り向いてほしい子犬が振るシッポ

鳥取県　平井　栄翁

復興の庭でおいしいにぎりめし
年賀状余命に合って減ってゆく
秋茄子でもう一杯と今朝の膳
主婦の座を捨てて逃げれる旅の膳

鳥取県　河本　照子

信じ切る恋には親もかぶと脱ぎ
食べた後賞味期限のシール見る
御詠歌を唱えて腹の毒を消す
借金はないが貰った恩があり

鳥取県　橋谷　静江

ご先祖も地震に怯え墓倒る
強震へ神も仏も手をださぬ
マグマから貰った怖さ忘れない
嫁姑都合の良い日仲間です

鳥取県　田村　邦昭

子守り唄上手になって児が眠る
不都合は昔むかしを消したがる
水溜りどう渡るのか蟻の知恵
とまり木に愚痴がつくった疵のあと

鳥取県　下田　茂登子

こっそりと夫の財布に手をかける
頑固さを見せてはならぬ庭の石
騒いでも割れない鍋が一つあり
今一度覗いてみたい腹の虫

出雲市　加藤　スズコ

山肌に色づく柿に曼珠沙華
風に酔い踊る陽気な秋桜
泣きながらテレビドラマの中にいる
朝露の間引菜届く秋の彩

松江市　松浦　登志子

一握りの塩が息子に足らなんだ
五円玉集めて回る神無月
ひと揺れに体反応にじむ汗（鳥取西部地震）
菊見事　猛暑の水に恩返し

島根県　菅田かつ子

大胆なあくびして見る青い空
土の香を付けて大根つややかな
ぐち聞いてあげようみかん食べながら
紅生姜乗せて牛どん気どってる

島根県　持田多輝子

ストレスをみじんも見せぬ紅を引く
御写真が遺影となった師の訃報
絵心をやっと摑んだ墨の色
天丼の出前で済ます不意の客

島根県　多々納テル子

想い出をアルバムに貼る世紀末
継続へ負けまいとする力瘤
コスモスも日々草も咲き終わる
老い二人金魚も二匹よく肥り

生駒市　飛永ふりこ

うたかたの恋の軽さかシャボン玉
パソコンを動かすマウスお疲れさん
擦り切れた母の手作り捨てられず
犬あくび私もつられて大あくび

尼崎市　軸丸勝巳

塀越しの金木犀に足をとめ
コスモスが風をもらって生き返る
落ち鮎よ無念であろうお腹に子
誕生日声だけですと子の電話

尼崎市　尾宮弘治

モナリザの微笑 病妻から貰う
賢妻の優しい瞳にあるマグマ
検査入院妻の笑顔がキナ臭い
喝采の期待はしない母の道

川西市　井本清山

気をゆるり持てばゆるりと来る明日
義理ひとつ終えてネクタイ皺伸ばす
先ず 晴れ と日記に付けて以下余白
恵まれていても探せばある不足

倉敷市　家守政子

年新た浄土の亡夫に屠蘇を酌む
あなたの心私の中に住んでいる
ふんぎりがつかず三十路になりました
懲りもせずポストへ種を蒔いている

岡山県　国米きくゑ

慌てずに来いと亡父から便りくる
来世まで一緒に枯れてゆく夫婦
エリートの切符失くしてから男
コーヒーに面影偲ぶ秋深む

宇部市　中田忠夫

例外も無くてわが家に日が暮れる
何やかや言っては揉めて仲が良い
丸洗いしようか心暗いから
妻の勘もう受け止める変化球

大阪市　小泉　ひさ乃

秋晴れの散歩で拾ういい話
礼状に書き尽せない恩がある
ポストまで大事な手紙抱いてゆく

大阪市　中村　叡子

モーニングふたりで憩う指定席
ふたりいてうちに携帯ありません
太古まで夢破られた考古学

大阪市　伴　洋子

嫉妬心煽る男のズルイ顔
愛に泣く女にひとつある打算
木の瘤が意地を通した床柱

大阪市　平井　露芳

燃やすのは歩くしかない体脂肪
えらいこっちゃ柴田勝家落馬した（時代祭）
ほんまやな鳩にはボスが居らへんな

大阪市　一本　勇太

太陽と土に大恩ある傘寿
助走路のいらない僕の散歩道
妻の留守味は自分で返事する

大阪市　榎本　舞夢

教えたり教えられたりするカルチャー
一日がもう一時間欲しくなる
年の瀬を刺しゅうに暮れてお正月

吹田市　穴吹　尚士

遺すほど無いから遺書に悩まない
よく食べて笑えば消えていた悩み
ママ真似た可愛い口に叱られる

吹田市　木村　無禄

扇風機夏の疲れを拭いてやる
世紀末　男の俺が米を研ぐ
年金の暮しコンビニにも慣れる

吹田市　後藤　志津香

秋は好き紅葉からのメッセージ
和箪笥の菊の模様を出して着る
世紀末どこもかしこもゆれに揺れ

豊中市　みき　わきみ

世紀末崩れ行くもの落つるもの
未だ生きる恥多いとて多いとて
一年を長いと思う日もあった

高槻市　左右田　泰雄

つい口がすべって膝をつねられる
体脂肪測って食は減らさない
角筋がきいてて身動きが出来ぬ

高槻市　生田　義一

宅急便里の母から愛こめて
四島の霧晴れぬまま新世紀
アカサタナ名前がとんと浮かばない

高槻市　執行稲子

葉隠れの故郷が好き人も好き
若鮎に若さを貰う背ののびる
人生の半ばにあったある安堵

枚方市　大昇隆広

人恋し夜に飛び交うEメール
良い方に解釈できず愚者の鬱
萎縮した男が作るやわな国

東大阪市　笠井欣子

コスモスの淡紅色の波ゆれる
朝食は妻と二人でモーニング
紅葉をビール片手にバスの中

東大阪市　今岡貞人

さまざまに揺れ反省の樹は育つ
耕せば土も返事をしてくれる
働けるこの手に感謝手を洗う

羽曳野市　永田章司

神の手が古代を造る神の国
大盛りのご飯に母の愛も盛る
満中陰　仏になったおばあちゃん

羽曳野市　山本たけし

旅なれぬ妻を座らす窓の席
それぞれの橋それぞれに瀬戸の景
竹トンボ思い出してる鰯雲

羽曳野市　森田四三郎

週刊誌は小の不祥事大に載せ
老人会補聴器同士艶ばなし
勲章も箪笥の隅で寝たきりに

柏原市　永浜加津子

空晴れてプラス思考がジャンプする
緞帳はいつ下りるのか物思い
山深くテレビで紅葉狩りに行く

富田林市　山原昭水

満月をながめていたら仲直り
百円で家内安全鈴をふる
一直線に楷書のままで生きている

河内長野市　印藤智子

紅葉より湯豆腐探す南禅寺
竹生島　茶店で餅を食べただけ
正月は旅館でのんびりまたも夢

堺市　大橋錦

渋滞にさしこむ日ざしあったかい
生きている限りは主婦を現役で
多忙でも今が元気で幸せだ

泉佐野市　稲葉洋

巨木には大なる故の風当り
禁の字がつけば守れぬ弱い質
ゆっくりと出来ぬ師走も職探し

大阪府　野田栄呼

嫁居ても主婦の責任持たされる
幸せに漬りすぎたと嫁に言う
六十で若く生きるを心して

大阪府　東　文江

二重橋おそれおおいが奉仕団
初孫を抱いてかすかに手が震え
戸をたたく音で目ざめる風の夜

大阪府　藤井郁代

かしずいて夢中で渡る苦労橋
揺すられてお経に縋るかずら橋
此の世ではおかしな事が胡坐かき

大阪府　小栢こずえ

久方の出会い楽しみ薄化粧
哀しさも踏み台にしてまた咲こう
若作りすればするほどぼろが出て

和歌山市　土屋起世子

保護色の中で少子化生きていく
一徹な母だ漬物同じ味
ゆっくりと嘘も煮込んで忘年会

和歌山市　前岡健三郎

旨い話乗る気がなくて電話切る
午後の部屋硯の海へ沈む筆
外人も混じるいなせな秋祭り

海南市　堂上泰子

老い仕度構想を練る昼の雨
子育てを終えて淋しい息をつく
年輪を重ねた愛のもつ温み

奈良市　乾　春雄

三面鏡ショックを受けた背の曲り
好きな花渡れぬ川の岸に咲く
消印の向こうに好きな人がいる

奈良県　江波正純

腰かがめ同じ目線で立ってみる
生け垣を越えてなる柿おすそ分け
正当な理由をつけて酒を飲む

綾部市　藤田芳郎

未完の絵残り少なき絵の具箱
姿見に年など教えてはならぬ
山の神貧乏神も居て楽し

尼崎市　森安夢之助

幸せが逃げそうで手を握り締め
空缶がころころ風が遊んでる
ロボットの愚痴が聞える新世紀

尼崎市　河津正治

ひらがなの形で余生送りたい
三日月をそっと隠した流れ雲
リモコンの亭主も時に変化球

盲導犬呼吸を合わす散歩道
残り火の財布の底へ不況風
朝鏡めりはりつけて仮面変え

伊丹市　延寿庵　野　鶴

熱燗に誘惑される秋の冷え
もう飲めぬのについていく三次会
先生と社長ばかりが居るクラブ

川西市　西　内　朋　月

新米に山椒があれば我が世かな
新世紀待てず鬼籍の友多し
自慢話　月と話せば波静か

宝塚市　飯　西　ミサヲ

この橋を渡れば故里母も居る
約束をしてから迷う迷いぐせ
甘い夢浮べて消えたシャボン玉

姫路市　北　条　てる代

回れ右してもむかしの駅がない
折鶴と幼稚園児は正直だ
軽い方選んで今日も暮れてゆく

篠山市　倉　垣　恵　美

師走風吹いて神様出雲から
ご先祖のお陰と飲んでよく食べる
秋の幸みんな身となり肉となり

篠山市　谷　田　多美子

お財布のからっぽとても落ち着けぬ
能面の下に情熱もえている
大丈夫ぼけていないと独り言

兵庫県　山　本　泰　子

呪文で七十五歳迎えたり
鰯雲すうっと魂吸い込んだ
ボール一つ遊びに掛ける向上心

兵庫県　岩　本　美緒子

生きている証にもなれわが詩よ
総理とて凡夫消したい過去があり
わが愛は熱愛型として置こう

鳥取市　近　藤　秋　星

新世紀　老いと希望が同居する
一人舟　新世紀海波高し
うっかりを重ねて照れる母の老い

鳥取市　宮　脇　道　子

はっきりと言わぬが花と息をのむ
リストラだ木枯しもまた肩叩く
へ理屈に負けてもともと耐えている

鳥取市　河　田　のり代

終電車酒臭いまま車庫に入れ
南無阿弥陀唱え野地蔵衣替え
調子良いリズムが手酌早くする

鳥取市　西　尾　敬之介

人はなぜ生きねばならぬ神へ聞く
プライドが老眼鏡を作らせぬ
鍼灸で臓器をノック対話する
倉吉市　猪川由美子

現代の大和撫子あぐらかく
職安で同じ顔ぶれ今日も逢い
好物を供え息子は年取らぬ
倉吉市　西脇日出子

貧富の差少しありそな同級会
良きナース嫁にしたいが無い息子
売ってない心のとげを切る鋏
倉吉市　牧田みち子

大輪も小菊も負けず咲きほこる
夜型へコンビニ本屋味方する
震災へ負けずに咲いた鉢の菊
鳥取県　藤山弘子

厳格な亡父の一声重かった
締めくくりはありがとうと結びたい
丸木橋わたり仏の慈悲に会う
鳥取県　西垣美知子

灯を消して今日一日を振り返る
人生に待ったはきかぬ古希をこえ
金婚に花を咲かせて夢つづく
鳥取県　山岡久枝

ふるさとの訛なつかし友の声
テレビ消し自分の世界とりもどす
離乳食食べさす方も口をあけ
松江市　山根邦代

家族よりロボット頼る社会くる
神棚に祭りしジャンボはずれくじ
煩悩は拾った金に思案する
松江市　小川注湖

窓あかり人それぞれの年の暮れ
年の暮　財布の口も忙しい
ひと時を睡魔が誘う昼炬燵
出雲市　川島和歌子

アア寒い手足きたえに散歩する
秋を待つ色とりどりの花が咲く
秋の色真っ赤なモミジ拾ってる
出雲市　栂ミツエ

狭い道くるま威張って走り抜け
通い慣れた道で思わず蹴躓く
煙草が旨い体の調子良さそうだ
益田市　岡田たけを

干拓の中止に鯊が喋りだす
弱いから負けた篠原男です
神様のいたずらにあう大地震
安来市　原煩悩児

絵手紙が私を誘う旅心
ストレスが溜って明日の道探る
地平線どこまで続くバスの旅
島根県　毛利　幸

まだやれる余生雑草のごとく生き
血圧の薬を飲んで三十年
カロリーを落として落としまだ痩せぬ
島根県　松本聖子

汗せずに得た金羽根が生えて飛ぶ
慈しみ育てた牛を手放す日
煩悩を捨てて無欲の旅に出る
松山市　山之内八重美

一枚の葉書ビタミン剤となる
も一人のボクが誘惑して困る
輪の中でほっこり芋が焼けてゆく
松山市　高橋宏臣

お互いを支えあってる人の文字
強がりを言って拗ねてる青りんご
棘のある言葉を飲んだ胃の痛み
今治市　野村清美

葛藤をバネにしている特許品
歳月の抉りし嘘を抱く白寿（母）
二つあるから冷静に見える視野
今治市　渡邊伊津志

雑草の強さに負けている私
窓開けていつも心に入れる風
お茶の間の団欒消えてゆくゲーム
高知市　小川てるみ

句読点微妙に違う嫁と姑
叱られているよう夫のアドバイス
下書きはもっと上手に書けたのに
高知県　百田　幸

新世紀 夫権はきっと取り戻す
二世紀に亘りひたすら無為徒食
井の中の広さを自慢する蛙
高知県　桑名孝雄

胸を借りうれし涙で借り返す
疑わず蒔いて夢見る新世代
足腰を鍛えて命引き延ばす
香川県　松村輝夫

宗教の違いも同じ酒で通夜
喜怒哀楽乗せて地球は回っている
よく続いたと妻に感謝の五十年
岡山市　清水金太郎

裏町が消え人情の行き場なく
類を呼ぶ友の集まり灯の消えず
内風呂の増えて銭湯稀少価値
倉敷市　撰　喜子

横浜市　三村八重子

耳ざわりな話は流す亀の甲
無罫箋　大きな文字にはげまされ
言わなくて良かった帰路の深呼吸

横浜市　福田由美子

リハビリの脚はずませる好奇心
存在を示すいびきを父がかく
息抜きに来た観劇で眠ってる

横浜市　長島亜希子

安全なカギに替えてもかけ忘れ
金メダルなに聞かれてもいい笑顔
行列の後ろについて買ってみる

横浜市　石原三郎

縄のれん安い床屋で刈ってから
雨降りは句作に耽る良い天気
保険屋がそっぽ向いてく歳となる

横浜市　北沢街湖

履歴書を弱気にさせる歳の欄
親しげに大阪弁で値切ってる
好きだとは言えずチョッカイ出してみる

横浜市　山下省子

反省と実行力が反比例
本当は踊らされてる妻なのに
遠回し食器洗って恩に着せ

千葉県　大川晩翠

一進一退景気の安否気が引けぬ
馬酔木嗅ぐ宵の明星春を待つ
新鮮な野菜畑に菊匂う

富山市　松見たえ

人文字を飲んだ度胸で立つ舞台
再会の歯車合わぬ待ち惚け
風やんでピエロはひょいと立ち止まる

新潟県　高野不二

勝った日は一寸足りない缶ビール
一匹になって金魚はまだ生きる
千円の時計　会議におくれない

唐津市　岩崎實

回れ右時には後ろたしかめて
新時代　明治の顔がうろたえる
何時までも続けていくよ古希の筆

三重県　尾崎勤

みんな知る答えは誰も手を上げぬ
西口も行ってみようか待ちぼうけ
結果だけ追う足し算の退屈さ

尾張旭市　三浦きぬ

切り替えて誇大妄想楽しもう
生きざまを見てきた家具で捨てきれず
済みません読めない文字の書道展

エッチな蚊お風呂の壁で待っていた　大阪市　伊藤博仁
明日退院膳にビールがついてない　高槻市　大崎侑子
お隣の空巣我が家の留守の時
世の中は正も不正も多数決　八尾市　高橋明子
歯抜こう医者は軽々言うけれど
愚痴を言うその時貴女幸福よ　八尾市　鷲見章
酒の秋飲まぬベッドで病んで居り
湯上がりの肌にやさしい秋の風

予　告

第七回
川柳塔まつり
平成13年10月7日（日）
於 ホテル・アウィーナ大阪
◎詳細は追ってお知らせします。

信州で新酒 新蕎麦 舌鼓　堺市　梶本哲平
どんぶりに盛りあがりたり浅蜊汁　泉佐野市　大工静子
首を二度振り主治医の笑顔
十念を称えて浮ぶ亡友の顔　橿原市　西本保夫
入院へ無責任です町の医者
胃カメラも飲ませぬ不満患者側　八幡市　粂野和俊
わが年輪評価は神に委ねたい（ねんりんピック2句）
真面目なり年寄り前に舞うヤング　鳥取市　谷岡清子
無駄話 脳活性と良く喋る
へそくりをかくした場所がわからない　横浜市　豊田羊子
転居して終の棲み処の息を吸う
あの音は終電暦が明日となる　熊本県　立道善太郎
ほどほどに飲んで悔いなく弥陀の国
今日もまだ生きていました草むしる　野田市　那賀島雅子
きき耳をたてる自分が小さくなる
やさしさに飢えて友との長電話

同人特集

私の一句

半時を一言もなし桔梗寺　豊中市　橘高薫風

自信ないけれども太い字で書こう　堺市　河内天笑

風を抱く女の手から秋を知る　鳥取県　小西雄々

プライドを捨てた男の目が濁る　寝屋川市　高田博泉

相談に来てマージャンのカモにされ　京都府　稲葉冬葉

出遅れた一歩がいまだ縮まらず　大阪市　井上白峰

亀の首いいなと思う鶴の首　枚方市　海老池洋

きらきらはいっときだよといぶし銀　松山市　宮尾みのり

返り花返し尽くせぬ恩がある　出雲市　園山多賀子

日本の危機があふれる投書欄　竹原市　森井菁居

髭つけたソムリエ別のゲート行く　大阪府　八十田洞庵

手を合わせ読経の中に無と座る　相生市　中塚礎石

出陣のねぷたの如く行く砂丘　弘前市　櫻庭順風

お先にと言って優位をにじませる　大阪市　正本水客

中心街さびれて閑古鳥が鳴き　十和田市　阿部進

朝の画廊に秋の空気が正座する　尼崎市　春城武庫坊

孫娘よそれで充分美しい　尼崎市　春城年代

背伸びしたとて多寡が三センチ　和歌山市　桜井千秀

老愁の真っ只中の浮世かな　弘前市　波多野五楽庵

チョウトンボひらりひらひらひら人を恋う　弘前市　斉藤劦

観音開き中途半端は大嫌い　松原市　小池しげお

その昔挙手で別れた駅に立つ　大阪市　安達はじめ

座禅終えておかゆの湯気で生きかえり　柳井市　弘津柳慶

うっかりともらす一言座がしらけ　佐倉市　吉田笑女

仏の眼悪を無言の慈悲で刺す　鳥取市　岩原喬水

でしゃばらず驕らず丸いお月様　大阪市　津守柳伸

絵手紙で誘うとみんな来てくれる　大阪市　西出楓楽

赦す気になると声まで丸くなる　和歌山市　青枝鉄治

老妻の口紅異なもの味なもの　和泉市　西岡洛酔

約束はないが化粧はしておこう　羽曳野市　酒井一壺

新世紀若さが無性欲しくなる　高槻市　井上照子

雑草のごとく愚痴など言わぬ母　出雲市　板垣夢酔

人間に生まれて重い辞書を繰る　鳥取県　西原艶子

目の前にある幸せに気が付かず　藤井寺市　中島志洋

窮屈なルールブックが横に居る　大阪市　小糸昭子

ほめられて ふうせんかずら揺れどおし　堺　市　近藤豊子

菊花展なお彩添える美人連れ　鳥取市　杉本孝男

世紀末知る手掛かりにピカソの絵　泉佐野市　山本蛙城

暫くは死ぬまいビール美味すぎる　香川県　木村あきら

迷いから抜けると広い海に出る　香川県　工藤吟笑

たかが菓子されどこの道五十年　愛知県　早川盛夫

タイトルは「自由奔放」盆の菊　鳥取市　武田帆雀

残像がまぶたに生きている未練　鳥取県　黒田くに子

しっかりとのんでいるかと酒もらい　奈良市　宮口笛生

誇るものなんにもないが只元気　大阪市　寺井東雲

肝心なとこからくさる僕の国　豊中市　田中正坊

くしゃみ一つ靴ひも強くしめて出る　出雲市　富田蘭水

人生の谷間で考え深くする　河内長野市　植村喜代

もう一度出会えばきっと好きになる　富田林市　大橋鐘造

新じゃがが届いてポテトサラダの日　大阪市　津村志華子

縄のれん痛む心の刺を抜く　高槻市　江原秀夫

挨拶をされてこの町みんな好き　唐津市　宗水笑

春障子孫が朝刊持ってくる　茨木市　藤井正雄

明日という末広がりを信じたい　海南市　三宅保州
クローンの若い私がほしくなり　寝屋川市　平松かすみ
明けて初春夫婦笑顔で屠蘇祝う　香川県　山地マツヱ
人は何故生きるかと子の怖い問い　富山市　酒井輝
番犬と話がしたい梅雨の雨　岡山県　荻野鮫虎狠
小説に喜怒哀楽のドラマ見る　鳥取県　津村八重子
どの顔も夢を見ているくじ売場　岸和田市　芳地狸村
元気な字ドナーカードに書き入れる　大阪府　籾山隆盛
はは老いたもうことなかれ屠蘇の順　米子市　白根ふみ
お隣も喫煙場所は庭らしい　高槻市　傍島克治
私小説瓦礫　坂道　水たまり　倉吉市　最上和枝
美しいペテン師たちのファッションショー　四条畷市　吉岡修
同い年の橋と長寿を誓い合う　鳥取市　岸本宏章
ほんとうに私を叱るのもわたし　鳥取市　岸本孝子
恩愛の絆でむすぶ戦友の会　唐津市　樋口輝夫
泣く子居て笑う子が居て立役者　寝屋川市　太田とし子
月の暈夢は無限だなと思う　美祢市　安平次弘道
夜来香シャン高原にふっと佇ち　唐津市　山門幸夫
バタヤンが唱えば気分いい夫婦　唐津市　山門タミ

悔い一つ畳んで落ちてゆく眠り　島根県　岸　桂子

いくばくの余生耕す辞書を買う　香川県　神保　坊太郎

母さんのふところにある無限大　富田林市　中井　アキ

順風満帆決して驕る事なかれ　和歌山市　田中　みね

からっぽになって一から始めます　芦屋市　黒田　能子

今日一日真剣に生き八十路　堺　市　柿花　紀美女

腹割って男の美学語り出し　奈良市　天正　千梢

憧れを逆光線が邪魔をする　桜井市　河合　茂雄

敬老会みんな百まで生きる顔　和泉市　岡井　やすお

いつまでも不作と思う娘婿　鳥取県　橋本　多哥由

余白まだ小さな絵なら埋まりそう　富山市　舟渡　杏花

飢餓に耐え生きて来ました戦中派　河内長野市　井上　喜酔

生かされているのがしんどいとも思う　大阪市　金井　文秋

両肩につられて依存してしまう　松原市　北野　久子

目に見えぬ角へ帽子が落ち着かぬ　鳥取県　石谷　美恵子

国民が怒れば政治変えられる　海南市　谷口　義男

仏像の深い瞳に魅せられて　高知県　赤川　菊野

繰り返す老いの日日への砂時計　岡山市　井上　柳五郎

身に合うた幸せ初春の陽を掬う　岡山県　矢内　寿恵子

少しずつ左傾して行く定年後　箕面市　岩津ようじ

島が皆寄って来そうな油凪　唐津市　久保正剣

五風十雨一寸長生きし過ぎたか　唐津市　田口虹汀

無党派も用意はしてるむしろ旗　唐津市　仁部四郎

一輪のバラに誘惑されそうだ　鳥取県　権代康女

蒼天に子が描く二十一世紀　箕面市　出口セツ子

黒豆へ軽い約束してしまう　篠山市　遠山可住

手をあげて又にしますと戻り橋　弘前市　一戸ツネ

一本の蘆が折れずに枯れて行く　枚方市　寺川弘一

りんご一つ食べたら花の僕になろう　弘前市　蒔苗果林

両手首数珠巻く茶髪何念ず　大阪府　米澤俶子

壜の蓋と力くらべをしてしまう　川崎市　和泉あかり

鬼は外明日は鳩の餌になれ　大阪市　玉置英子

これ以上望むと毬が弾まない　和歌山市　吉村さち子

私を圧す青葉の樹勢とそして刻　熊本市　永田俊子

歳月が許し心を丸くする　出雲市　小白金房子

これよりは古希の段あいつとめます　西宮市　山本義子

吾が十七歳予科練の勧誘を逃げていた　大和高田市　岸本豊平次

赦し合う形に置いた箸茶碗　羽曳野市　吉川寿美

鶴千羽集えば神も立ち上がる　鳥取県　羽津川　公乃
いたわりの欲しい自己愛九十歳　吹田市　瀬戸　まさよ
喧嘩しても一日笑ってもいちにち　大阪市　神夏磯　典子
挨拶に来て集金もして帰り　高石市　浅野　房子
思いよう変えるとパッと灯点く　西宮市　林　はつ絵
絆でも血でもない縁ある此の世　大阪市　中田　あい子
この歳になっても祈る事多し　大阪市　辻川　慶子
花みずき咲く頃生まれみずきちゃん　羽曳野市　福田　満州
正直に生き真っ白い骨残す　枚方市　前　たもつ
一丁の豆腐が見せる四季の顔　竹原市　時広　一路
土いじる妻キラキラと春の庭　交野市　森本　弘風
ちっぽけな悩みだ雲と居て飽かず　香川県　池内　かおり
女房に感謝しながらゴンボ掘る　黒石市　相馬　一花
拍手して私を明日に送り出す　唐津市　市丸　晴翠
生きること他人まかせになど出来ぬ　豊中市　吉田　あずき
泰山木一花ささげて毅然たり　西宮市　奥田　みつ子
表には出さぬ苦労を知る指輪　松江市　恒松　叮紅
雲は本気で今日の姿を決めている　米子市　野坂　なみ
想い出につづく百人一首唱む　富山市　島　ひかる

ど忘れの数も夫婦で五分と五分　岡山県　大石あすなろ

腹切りの場面も茶の間お茶と菓子　守口市　結城君子

雲流れ時が流れて石舞台　豊中市　安藤寿美子

玉手箱に期待のかけら入れてある　羽曳野市　西村りつえ

パラサイト猫は主の顔をして　奈良市　米田恭昌

新世紀無心の老いを享受せむ　鳥取県　林露杖

来年の約束しかねる七十歳　倉敷市　野田素身郎

三世代順序不同に風呂が込み　松江市　舟木与根一

息つぎで変わる筆先夫婦仲　堺市　神原文

美人いろいろ妻はトクベツな美人　八尾市　宮崎シマ子

ミレニアム残しつたえる俺の趣味　枚方市　二宮山久

未来まだまだ明るく笑う子等がいる　堺市　宮本かりん

愛も憎も朧ろおぼろに月の暈　西宮市　門谷たず子

胴上げをされた天狗が戻らない　羽曳野市　徳山みつこ

ペン先は嵐に向かう芯がある　大阪府　八十田洞庵

水遊びみんな天賦の才をもち　八尾市　神原まさと

逆風を奏でる真うしろの笛よ　富田林市　池森子

夕焼は真っ赤私を試すのか　岡山県　小林妻子

残り日を妻と分け合う老い日和　鳥取市　冨山檳榔樹

おまえなど死ねとカラスがやかましい　鳥取県　新家完司
優柔不断私を裁くコンパクト　大和郡山市　坊農柳弘
約束の客が来なくて動けない　熊本県　岩切康子
壁にもたれて壁あることを喜びぬ　神戸市　小林一夫
日記帳にぶつけた頃がなつかしい　西宮市　緒方美津子
五臓六腑丈夫に生きる親ゆずり　倉吉市　淡路ゆり子
わたしの想い大樹揺らして伝えよう　和歌山市　松原寿子
弱者には我慢がまんと言う政治　竹原市　古谷節夫
いつもより純なこころでじゃんけんぽん　米子市　光井玲子
歳月は楽しおかめが好きになる　大阪市　川端一歩
参加賞だけでもうれし親子走　香川県　川崎ひかり
MVP孫が笑いを撒きちらす　亀岡市　井上森生
鏡餅心ゆくまでまんまるに　八尾市　生嶋ますみ
天辺に登った尺取りうろたえる　寝屋川市　坂上高栄
女三人噂話に目鼻つく　大阪市　清水利武
許せない事も許してゆく余命　大阪市　稲本凡子
年重ね尚明日思う時計捲く　寝屋川市　堀江光子
名月へ誇れるものが何もない　吹田市　石原靖巳
水がれを堅田の御堂立って見せ　豊中市　湯浅馬洗

美人と同席し開くコンパクトの数　岸和田市　藪野ケイ子
あれほどの炎もむらさきの煙になり　鳥取県　岩崎みさ江
早寝して大きな夢が見えますか　鳥取県　土橋はるお
欲ばって見ようか虹が消えるまで　鳥取県　田村きみ子
女偏畳んで生きる坂ばかり　鳥取県　土橋睦子
君に会うために明日がやってくる　鳥取県　土橋螢
目標を身近に置いている余生　大阪市　河井庸佑
胃も腸もリフレッシュして新春迎う　大阪市　西田柳宏子
小さな家の小さな窓に雪月花　藤井寺市　高田美代子
石段を登りつめてもそこは風　和歌山市　福井桂香
その時は何も言わずに聞いておく　和歌山市　玉置当代
まぼろしの紙芝居きて夕焼ける　和歌山市　木本朱夏
まんどろにいのちが燃える北の夏　青森県　西谷大吾
海深し敵も味方も抱え込み　東京都　後藤早智
夢が重くて傾いてきた宝船　富田林市　片岡智恵子
おじいちゃん真っ赤な定期入れを出す　横浜市　清水潮華
お礼など言うたら妻が涙ぐむ　横浜市　菱田満秋
イメージが浮かんだ筆がひた走る　東京都　播本充子
離農して貸した田圃の米を買い　香川県　成重放任

美しい富士も登ればゴミの山　大阪市　奥村五月
春の陽がきらきら朝寝しておれぬ　堺　市　河内月子
赤心を見てはもらえぬ鬼薊　弘前市　高橋岳水
あし跡を大事に21世紀へ股ぐ　岡山市　川端柳子
子や孫が鳶で良かったなあお前　宇部市　平田実男
大正も明治も遠いちぎれ雲　松原市　玉置重人
通りゃんせ左の耳へ通りゃんせ　東大阪市　指宿千枝子
花が咲いた花が散ったと和紙に書く　米子市　澤田千春
足跡がまっすぐ残るようあるく　米子市　中井ゆき
二〇〇〇年雨でも旗を掲げなさい　出雲市　板垣草丘
荷くずれを直し六十路を折り返す　吹田市　山本希久子
まだ生きてますかと社会保険庁　寝屋川市　岸野あやめ
紅葉菊　日本の秋　忘れまい　大阪市　本間満津子
闇があり星がこんなに美しい　米子市　鷲見正子
人生いろいろ泣いて笑って花が咲く　高槻市　川島諷云児
今日一日今日一日を良しと生き　神戸市　池田善守
良い話はいつも待ってる耳の底　大阪市　町田達子
巨人Vわが涙腺に異常なし　寝屋川市　妻谷重三
二本の足でこの世を歩く難しさ　和歌山市　西山幸

勇気出そう明日は何かが変わるかも　尼崎市　長浜澄子

まなうらに煌く故郷の青い海　八尾市　村上剛治

ぞうきんが廊下を走るダイエット　八尾市　村上ミツ子

大寒のガムはパリッと音をたて　弘前市　福士慕情

彼岸の灯行って戻って来たいもの　米子市　八木千代

越えてはならぬ愛もあるんだモカ薫る　八尾市　吉村一風

ゆっくりと愛持ち上げる観覧車　横浜市　小野句多留

すこしずつ星は傷を遠くする　八尾市　宮西弥生

来た孫もサービス疲れして帰り　大阪市　渡部さと美

ためし切りの和紙をぬらしているところ　米子市　田中亜弥

ふる里の花屋に並ぶ野菜苗　和歌山市　古久保和子

生年月日書くと紛れもなくわたし　西宮市　西口いわゑ

一途に生きる他人が何と言おうとも　八尾市　高杉千歩

蝶になる夢があるからがまんする　鳥取市　春木圭一郎

火の鳥のあなたも知っている鏡　出雲市　石倉芙佐子

年新た巳年の初春へ期待大　堺　市　黒田真砂

少年は健やかである膝の傷　京都市　高島啓子

耕した分だけ答くれる土　高知市　川竹松風

目の鱗はいだ童話が置いてある　米子市　林　瑞枝

気忙しい世相コントの筆を折る　和歌山市　福本英子

寄せ植えのひとつがそっぽ向きたがる　和歌山市　細川稚代

万年青の芽長い絆と受けとめる　寝屋川市　柴田英壬子

芸をする猿もやっぱりつながれる　和歌山市　堀端三男

逆引きの辞典で探す合い言葉　大阪市　小林周信

双方に神が後押しして戦火　三田市　北野哲男

プラス志向角度を変えてまた進む　鳥取市　植田一京

年輪の重さがあまり喋らない　弘前市　今　愁女

火を抱いて白鷺しかと立つ水面　米子市　木村春枝

愉快なことわたしに低い鼻がある　出雲市　吉岡きみえ

城崎に一入深く父想う　東大阪市　安永　春

頼られているようだから背は曲げぬ　米子市　木村富美子

新緑をくぐるわたしの非常口　鳥取市　上田宣子

せせらぎで和紙は人形師に出逢い　鳥取市　徳田ひろこ

幼き日語り花火の中にいる　弘前市　宮崎ヒサ子

自我の火をふっと消したく花を買う　吹田市　大谷篤子

いのちあるこの瞬間が運だろう　香芝市　大内朝子

ケイタイがなくても支障ないくらし　下関市　石川侃流洞

尊厳死つまり最後のプライドだ　鳥取県　上田俊路

冤罪を白とは見ない世間の眼　大阪市　鶴田遠野
空港の善意外貨の残り銭　岸和田市　長谷川呂万
万策が尽きて冷たいにぎりめし　弘前市　相馬銀波
過ぎ去った日々かがやいている日記　和歌山市　山口三千子
秋の天裸婦もりんごも立ち上がる　和歌山市　榎原公子
じっくりと檻の中から人を見る　鳥取県　谷口次男
老妻の本音は後ろ向きで言う　堺市　志田千代
波風は立てない母の細い腕　出雲市　久谷まこと
東京の恋東京で捨てました　尼崎市　黒川紫香
晴れた日は味方がそばに居てくれる　米子市　門脇晶子
水汲んでやれば萎れ菜にもいのち　鳥取県　中原飆人
広いひろいことばの海は果てしない　鳥取県　中原汲香
静寂な霧に抱かれているこころ　鳥取県　中原みさ子
ひとりの灯誰も信用するでない　竹原市　小島蘭幸
いつかわたしも踏まれ上手な草になる　西宮市　牧渕富喜子
綿雲のひとつが残る古日記　倉敷市　小野克枝
白寿という峰がいよいよ聳えたつ　鳥取県　乾喜与志
礼節はいつもこころの軸にある　米子市　青戸田鶴
半生の未練が疼く預金帳　羽曳野市　榎本吐来

人間をやめたら汗も乾くだろう　出雲市　小玉満江

裁判所に一度も行ったことがない　東大阪市　谷口義

騒いだら愛した記憶消えそうな　藤井寺市　鴨谷瑠美子

介護法問いたい愛とは絆とは　大阪市　板東倫子

一合を仏と分ける飯を炊く　大阪市　川久保睦子

人間の垢を落せば神仏　加古川市　吐田公一

たらずとも生きる幸せ曾孫抱き　大阪市　上江洌勝子

むずかしい事は言うなと影法師　守口市　石森利昭

よかったね無事に過ごせて今日終る　寝屋川市　冨山ルイ子

稲の穂がわっと匂ってくる活気　寝屋川市　森茜

一時を野バラにうつを持ってかれ　大東市　児玉蛙

気がつけば演歌のような二輪草　大阪市　松尾柳右子

炎にも水にもなれず生き延びる　八尾市　高橋夕花

耐える章熱い自分史抱いている　岸和田市　岩佐ダン吉

短日や二の矢つがえぬまま暮れる　岸和田市　高須賀金太

親馬鹿と言われたくない親馬鹿で　八尾市　長谷川春蘭

浴びる程飲んで一つが効くのかも　寝屋川市　江口度

惜別の挽歌流れて秋深し　大阪市　岡本久峰

十二月すらすら源氏物語　堺市　板尾岳人

―水煙抄

秀句鑑賞

―12月号から

成重放任

石を抱く苔は夫婦の絆かも　塩路よしみ

夫婦となることは、前世からの因縁と言われている。一心同体となって結んだ絆しあわせと、おのろけが浮びます。

医療ミス謝罪で命戻りゃせぬ　猪川由美子

あまりにも多い医療ミス、医は仁術といわれるが医術が失われているように思われます。

生涯の実りの時と思う古希　中村好恵

迎えに来れば百まで待てよと追い返せと言いますが、七十歳は青春の真っただ中、二度とない人生、思いっきり楽しみたいものです。

八十の老母がのばすかくし紅　那賀島雅子

何歳になっても女は美しくありたいもの、女のたしなみと美がよく表れています。

残業と遊びで違う靴の音　川島良子

幾ら知らぬ振りをしても女の勘の鋭さ、まして妻の勘は恐ろしいもの、夫はうかうかしてはおれません。堂々と帰りましょう。

訪問日介護の母が紅をさす　福田由美子

介護の句は多くありましたが、雅子さんの句と同様女のたしなみを掴んだ句に共感しました。女であればこそ作れた句と思います。

ワープロをやめて自筆で頼みごと　井上京一郎

自筆での依頼は心が通じるものです。年賀状も自筆で黒々とあるものは何度も読み返しますね。

減反の荒田にも税追って来る　平井栄翁

昔は年貢の取り立てに泣かされ、今は減反政策にさいなまされ税金だけはやって来る。農家の切なさ、私も農家の一人としてよく理解が出来ます。

軽くした指切り針を飲まされる　上地登美代

この世知辛い世の中、うかつに心は許せません。まず深呼吸をしてから後悔の前に注意が大切、世渡りの教訓です。

漱石も諭吉もみんな孫が好き　山本宏至

私も諭吉は大好きです。孫達は祖父母よりお小遣いが目当てかな？　この小遣いも年金があればこそ今更年金の有り難さを感じます。

夫にも見せてやりたい渦の道　熊代菜月

新しい観光地となった鳴門の渦の道、観光客は日毎に増えております。この勇壮な渦を夫にも見せたい妻の思いやり、すばらしい夫婦愛を覚えました。

あの席で喋ってならぬ犬がいる　下田茂登子

心やすい友人でもうっかり話は出来ません。私も二、三度経験があります。思わぬ人の裏切りに遭いました。

また一つ馴染みの店が幕を引く　家守政子

大型店の進出に押され馴染みの店が消されてゆく寂しさ。井戸端会議の場でもあった店、名残を惜しむ気持ちがよく分かります。

紅引いてイメチェンしても同じ妻　横山捷也

お多福でも妻は可愛いもの、いつも美しくあってほしいは男心でしょう。同じ妻の裏には作者のトキメキを感じます。

私の川柳

川柳塔誌は私の川柳の師

斉藤　劦

人間が好き、農業が好き、自然が好き、だから農業高校の教師をしている。子供等の二十一世紀を思う時、天地人の調和、物と心の調和が持論だ。作句もおのずからそこに目が向くがまだまだ未熟者である。川柳とは何か人間とは何かを永遠の課題として探っていきたい。と以前本誌に書いたことがある。それは平成三年十月号。目先の開発や金儲けだけでなく自然環境保護の問題を地球規模でみんなで考えていかなければと思っていたときでもある。当時の日誌に、地球環境保護の講演を聞いたメモとして「あの湾岸戦争の油の流出による汚染で海岸が二百キロメートルに亘って真っ黒になり多くの水鳥が死んだ。助けにイギリスからは行ったが日本からはいかない。日本から出掛けて外国に行き、自然環境問題を話す人は少ない。日本は金はあるが自然環境保護には金を出さない国だと外国では見ている」という講師の話。その感想として、私達は地球とその自然環境のもとで生存していることを忘れてはならない。自然への思いやりのある心を育てる教育が益々大切な時代になったと書いてある。

それから九年後の今、自然環境保護の問題はかなり関心が高まり、地球に優しいとか環境に優しいとかよく耳にするようになった。私も定年退職、市民農園を借り野菜作りをしながら土の香と静かな暮らしを送っている。

さて、時は逆戻りして川柳を始めたきっかけについて。弘前市の隣町にある全国に唯一つりんご科のある学校、藤崎園芸高校に勤務していたときのことである。昭和五十八年五月二十六日昼十二時、日本海中部地震が発生（青森市で震度六）。教室で授業中いきなりすごい揺れがきて生徒を誘導して校庭に避難した。幸い怪我人もなくほっとしたが、ラジオからは日本海の海岸に近い所での悲報が次々と伝わってきた。また、植えたばかりの田んぼの苗が水面に浮いているものもあるとか、あっという間に哀しみに包まれた。

そして放課後、ふと職員室の窓から空を見上げたところ、晴れ渡る空は何ごともなかったかのように不思議なほど静かだった。

地震津波いのち奪って空静か

これは川柳と言えるかどうか知らないが、この無常さを机の上に読み掛けてある青森農業という月刊雑誌の川柳道場欄に投句して選者に見てもらおうという気になった。選者は川柳塔社の工藤甲吉先生である。やがて川柳道場欄に小さな活字になって載った。選者に見てもらえてよかったという成就感のようなものを感じた。これが川柳として認知された私の初めての句である。

以後、川柳道場への投句が毎月続く。秀逸の句には選者の評が付く。その評を戴くのがなによりもよい勉強になった。実に奥深い味わいで内容の濃い評であった。

そして約二年後、川柳の結社に入って勉強したくなり、その旨を甲吉先生に話したところ、波多野五楽庵先生と川柳塔を紹介して下さったのである。

川柳塔の水煙抄（黒川紫香先生選）に三句初めて載ったのは、昭和六十年八月一日発行の通巻六九九号である。その号の西尾栞主幹の巻頭言の冒頭には「我等が祖、川柳雑誌の再刊第一号第一巻は奇しくも昭和二十一年の八月一日であった。昭和二十年八月に終戦を迎えて丁度一年後の八月に再刊を出されたのである。その時の路郎師の再刊の辞というのをここに載せて心をひきしめたいと思う」と書かれてある。その巻頭言の題は、飢餓線上

に立つも我等に川柳あり」これを読んで私は川柳塔を川柳の師にしようときめたのである。

同じ青森県内ではあるものの弘前市から十和田市、五所川原市と移り住み、今また弘前市に住んでいるが、川柳塔は毎月二十日頃にきちんと届く。二、三日と遅れることはない。毎月楽しみにして待っている読者にとってこんなに嬉しいことはない。毎月の川柳塔を作るのに誠心誠意努めておられる本社の皆様に心から感謝申し上げる次第である。

さて、私の川柳の師、川柳塔が届くと先ずは一読する。次に関心のあるところや難解な句などをじっくり時間をかけて読む。それから一週間か十日後あたりにもう一度最初から最後まで読んで理解を深める。その後は随時頁を捲る。だから川柳塔はいつも私の傍にいるのである。毎月の巻頭言からは川柳にかける情熱が清々しく伝わってくる。そして、同人・誌友諸氏の数々の句の姿や心に触れながら勉強。数々の文章からは川柳を通じて人間としての在り方生き方を学ぶ。特に橘高薫風先生の文章を読むと不思議に句を作る力のようなものが湧いてくる。それはやはり先生の川柳にかける情熱にひかれるからだと思う。

次に私の句、

人間が好きで教師をしています

これは平成元年度の路郎賞候補作品に西田柳宏子先生から推薦して戴いた句。その時、先生から生まれる句を大切に、この句を大切にという主旨のお便りを戴き感激した。それ以来生まれる句を信条に心がけてきた。

次に川柳塔の秀句鑑賞欄に載せて戴いた私の句を鑑賞者の目から客観的に見てみたい。

悪い子はどこにもいない松の芯

「どのミドリも力一杯に自分を主張しているのだが、身勝手なにんげんにミドリを摘まれてしまう。レッテルを貼るのはその身勝手な、にんげんたちの責任ではないだろうか。『松の芯』から作者の念いが伝わって来る」

（林　荒介氏評・平成三年九月号から）

実らない稲教材に貰われる

「今年は、天候不順で台風も多く、風水害、冷夏で日本列島大凶作でした。私の住む広島県の稲の作柄も、戦後二番目に悪かったと聞いております。東北地方では、収穫ゼロの農家も多くありました。それにしても教材という語がこんなにも哀しく淋しく響くとは知りませんでした」

（小島蘭幸氏評・平成六年二月号から）

梅雨空を突き農高のVトライ

「農業県とされている佐賀県内には、農業高校が五校あったが、ここ三年のうちに三校の校名から『農』が消えた。天下の趨勢とでも言うのだろうか。この句の作者は、農業高校に在職された人と聞き及んでいるが、気概あふれるこの句に大きな拍手を送りたい」

（仁部四郎氏評・平成十年九月号から）

実感や体験から生まれた句をこのように評価して下さることにあらためて感謝したい。これがまた作句を続けていく糧になっていく。

今は川柳塔みちのくの句会に参加しながら勉強しており、主幹の波多野五楽庵先生や会員の皆様のお世話になっている。その五楽庵先生は川柳塔の愛染帖の選者をしておられるが、選に当たっては投句者の一句一句に充分時間をかけ、毎月、身を削る思いで作品と対峙しながら真剣そのものだと話している。投句者にとって本当に有難いことであり、それに答えるためにもより作句に励まねばと思うのである。選者も投句者も真剣であるところに川柳の発展があるような気がする。

西尾栞先生がいう我等が祖『川柳雑誌』の再刊の辞で麻生路郎先生は、「『川柳雑誌』の生みの親は私であるが、育ての親は一つに諸君の手でなければならない。頼むぞ諸君！（路）」と書かれてある。この路郎先生のことばは永々と生き続ける。いつまでもみんなで大切にしたいことばである。

川柳太平記（272）

川柳の群像

波部白洋

東野大八

「波部白洋元川柳文学会長は八月二十七日（平成12年）兵庫県舞子の浜で水泳中、発作を起こして溺死した。享年69歳。

　大胆に生きて転んで長い夏

　ハイビスカスの海で女と溺れたし

　豊中川柳大会の選者をつとめた折りの作品であったが、大阪柳界の為にも急逝は惜しい。

（『番傘』10月号巻頭・礒野いさむ）

　平成8年6月に大阪のアーバンホテルを会場に開かれた〝オール川柳創刊記念大会〟には、筆者も小講演を依頼されて出席したが、この会場で白洋と顔を合わせた。〝よう〟〝おう〟と言い合ったあと、彼いわく。

　「ペラペラ柳誌の〝川柳文学〟も根っから一部も増えないので、そのうちやめにする。どうせオール川柳が出たら此奴に食われてしまうからな」。

これが彼との最後の会話になろうとは…。

　彼が川文（378）の〝同人リレー雑話〟という頁に次のような一文を載せている。少し長いが、参考のために全文紹介しておこう。

　「私が川柳文学の句会にはじめて顔を出したのは、四十一年の五月である。もっと正確に言うと五月一日である。この日、同じ職場の先輩である斗升（清水）さんがわざわざ私の家まで寄って下さり、会場まで連れていっていただいた。席題に〝私鉄スト〟が出て〝柏餅と桜餅買う新世帯〟〝スマートな柏餅です物価高〟の二句が私の処女入選となった。俳句のとき（学生時代）とちがってゾクゾクするうれしさがあり、これは一体何だろう。やはり〝諷刺〟を認められた喜びだろうか―それからの私は月一回の例会へ欠かさず参加した。（中略）

　私は俳句の或る残滓である〝季語〟の尻っぽがとれた記念すべき一句で〝汲み取りの大きな声が午前九時〟〝からっぽの貨車には揺れずわが家あり〟の後の句がそれだ。俳句時代に山口草堂氏にほめられて得意になっていた句だ。川柳に入り〝空っぽの貨車〟が詠えた喜びは、まさに大きかったのである。

　その頃の川柳文学例会は、いつも常連が十五、六人で、時には私まで選をさせられたりした。井の中の蛙でもあった」。

　『川柳文学』の創設者は堀口塊人だが、26歳の折〝番傘同人〟として、同社幹部の西田当百句集の編集を一任された。いわばこの体験が、川柳博士と称されたこの人の生成のまたとなき肥料となった。

　昭和10年6月、ある事情から同志八人と番傘脱退を表明して連袂脱退し、その翌月、『昭和川柳』を創刊した。一時は本家の番傘をしのぐかとさえ言われた同誌も、戦局の推移から昭和16年6月休刊。『せんりゅう昭和』をはさんで、戦後の昭和22年1月、『川柳文学』を創刊した。塊人の夢は、若年からの構想であった〝川柳協会〟の結成にあった。近江砂人・片山雲雀・松本橘次・岡橋宣介の支援協力が実って昭和49年末、名古屋市で盛大な日本川柳協会の結成式が挙行された。しか

し、この夢実現を待っていたかのように、昭和55年12月14日死去した。享年77歳。

　来年へ流れる水を見ていたり

の句碑を阿倍野神社の片隅に残して…それが『川柳文学』への置土産でもあった。

「番傘一万句集の編集をしていた私の傍で水府さんが、あれこれとうるさく注意していましたが、塊人の句を見るに及んで、番傘同人辞退にまで追いやった、あれほど憎んでいた塊人なのに〝やっぱり塊人はうまいなあ〟とひとり言をいったので私はびっくりしました、とは鵜飼蟻朗さんのお話であった」（番傘一万句集の話から・波部白洋）

「『川柳文学』会長職は、創始者堀口塊人の死去後は、永田帆船が二代目会長として、永年、川柳文学表紙に記憶に残る名エッセイを連載していたが、俳句返りの白洋は、帆船没後もこの欄へ筆をとっていない。それよりも同誌中に〝川柳文学のルーツと歩み〟や〝誌友添削講座〟等を永年担当している。

　川柳文学のルーツの中で白洋が、川文の創刊号に触れた部分のみを抄録すると次のとおり。

「（前略）31年主幹坂澄風氏が夭折され、32年『さつき』の名は消え、そのあとを塊人が継ぎ、『川柳文学』と改称された。『さつき』は一三八号で消えた。その巻頭言を抜き出すと、川柳は文学か、俳句は第二芸術か、それは標語の問題であって、内容の問題ではない。

　文化の名の下に、非文化的行為が行われ、平和を口にして闘争を行う世の中に、われらは標語を争うものではない。先に主幹澄風を失い、近く南北に逝かれた『さつき』は、『川柳文学』の名の下に、心機一転、悲嘆の淵より脱皮するものである。さらに川柳を通じて、文学の真実を究めんとするものである。石ころの如く謙虚に、雑草の如くたくましく—とある。同人吟（塊人選）から抜粋する。

株売って優待券と今日限り　水人
社宅直して鉱山を休むなおくれるな　安静
愛情も金も得難き世の移り　一人
相談役相談されたことがない　歌都路

　同人は四人である。（中略）『川柳文学』第二号即ち八月号には「社告」の中に、

　一、『川柳文学』七月号を創刊号と改め、八月号を創刊第二号とする旨、有志諸君より申出がありましたので、右の通りに改めます。従って今後、さつき川柳社は当社とは関係ございませんが、本誌同人及び読者となっていただいた方々の前金払込に対しては責任をもたせていただきます。（以下略）とある。いろいろと事情はともかく「川柳文学」が生まれたことにはまちがいない。（中略）

　五十年七月から、五十二年八月にかけ、千里川柳会発足。（中略）五十五年一月の同人総会で永田帆船氏を主幹とし、同年12月塊人氏は脳軟化症で死去。続いて一月雄午、二月古方、五月夕調逝く。そしてこの年の暮れに平八郎、清録、大黄が死去。だが、川柳文学は発刊三十年の記念大会を機に、同人一同心を新たにして歩みつづけようとしている。」

　以上が白洋の『川柳文学のルーツと歩み』の終章だが、現在同誌は停刊中で、白洋の今回の死去によって、同誌は文字どおりその死命を制せられたわけで、今後、陽の目を見ることもないであろう。惜しむべきことと思う。

　終わりに波部白洋の作品を古い『川柳文学』誌上から拾っておこう。

たこ焼きを百個もたべた若い胃よ
都市砂漠ふとんと枕捨ててある
刀折れ矢尽きた武士ボクに似る
古妻よ　金環食にあやかろう
二階にもきれいなトイレ欲しい冬
空想は夢二のおんな抱く自由
おふくろと岡部伊都子をだぶらせる
急いでも鉢の中なる金魚の身

▼次号は「鳥本　泰」

誹風柳多留二四篇研究 25

山田昭夫・橋本秀信
小乗清吾・伊吹和男
大野秀二・粕谷長生
清博美・佐藤要人

189 **新五郎うハつく箸さきてござり**

粕谷 山村座に江島が見えたので、生島新五郎も芝居どころではなかった、という句、

新五郎西の五六をじろり見る　明六海1
三ッがいのさじきからいよ新五郎　安五宮1

橋本 同、しかし、浮つくは「芝居どころではなかった」は言い過ぎ「浮き浮きして（気分が高ぶって）落ち着かないといったところ。

清・佐藤 礎稿及び橋本説の通り。

190 **哥かるた人の丁場を娵あらし**

粕谷 正月、百人一首の光景、嫁は加留多の名手とされている。また他人の札を取ることを「荒らす」という、

本句も百人一首で他人の領分（帳場）の札まで嫁が奪い取ってしまうというもの。

嫁斗リちよい〳〵と取ル哥かるた　安元義3
哥かるた下女か丁場を娵かとり　天五亀2

清・佐藤 賛。

191 **つな様といふ文高尾かかぬなり**

粕谷 仙台高尾の句、あれほど仙台公伊達綱宗を嫌った高尾だから、綱宗宛ての手紙も書かなかっただろう、と言うもの。

随一の客すい一の女郎ふり　二九20
大名がこわひものかと高尾いゝ　傍一46

清・佐藤 賛。

192 **やろうの天狗　子供にとりまかれ**

粕谷 猿田彦の句か。『川柳年中行事』は疑問の句として「大山道中か」としている。

猿田彦は、天狗の様に鼻が高い。本句も「猿田彦」ではないか。

小栗 この句「わいわい天王」ではないか。『守貞漫稿』に、

其の扮猿田彦の假面を着け古き黒定紋付羽織並に袴をはき麁なる両刀を佩きたり、其詞にわい〳〵天王さわぐがおすき云々衆童追行のとき紅摺りの牛頭天王小牌を散す、

とある、なお、「日国」に『盲文画話』の絵がある。

清 同。

佐藤 小栗説、わい〳〵天王説賛。

193 **ひすべし〳〵と源三位に御意**

粕谷 「源三位頼政謀叛の句、高倉宮や他の者と謀議した時、宮から「秘すべし」即ち「秘密にしてほしい」と言われたもの、いずれ清盛の隠密に露見してしまうが……

人しらぬよふに宮様そゝのかし　天三仁2
ついほろびますとすゝめる源三位

清・佐藤　賛。

194　**ひよく紋目黒邊から時行出し**　安七仁5

山田　比翼紋は「自分の紋所と情人の紋所を組み合せた紋。二つ紋。ならべもん」（『日本国語大辞典』）のことで、この句は目黒不動の近くにあった白井権八と吉原三浦屋の遊女小紫の比翼塚とを結び付けただけの句。

　小紫は権八が強盗殺人で処刑されると、彼の葬られた目黒東昌寺の墓前で自害、後人これを哀れんで塚を建てたという。

　紫と白井は黒で比翼なり新　一七17
　無きにしもあらす目黒にひよく塚　一六〇26

清・佐藤　賛。

195　**朝かへり御用を内に見せにやり**

山田　吉原からの朝帰り、家に入るのが怖い。そこで出入りの御用聞きに偵察に行かせた。ドラ息子？亭主？

　くゞり戸が明ィたと御用湯へしらせ　一一37
　朝かへりそれおやぢがとおとされる　一一21

伊吹　賛。「家に入るのが怖い」、その怖さから言えば、どら息子のように思う。

橋本　賛。なお「御用」は今普通にいう御用聞きではなく、酒屋の小僧である。

清・佐藤　賛。

196　**嫁か出す水はりのけて目をふさぎ**

山田　嫁の出す死水、それを払い除ける姑、瞑目するまで嫁いびり。

　死水を嫁にとられる残念さ　一五19
　かん病をひとりねめ〳〵往生し　八30
　しうとは丶白くにらむかいとまこひ　明王桜4

清・佐藤　賛。

197　**はさみともいわれすとんだめに出合**

山田　吉原では「性悪の客が馴染の女郎に渡りを附けずに、他の女郎に手を出すといったやうな、惣じて没義非道の行為でもやらうものなら、夫れこそ大変、大勢の女郎共が寄りたかりて、其男の丶髷を散切にし、或は女の振袖を着せて満座の中で嘶笑するなど、頗る峻烈なる私刑が行われて居たのである」（『川柳吉原志』）。

　首題句は、その散切にあった嫖客、その姿にまさか「吉原の鋏」とも言訳も出来ず、「まいった〳〵」と言う次第。

　傾城のりんきハはさみがいく也　三〇10
　とんためにあったとほうかふりて來ル　二〇30
　なぜでもとむす子手拭かぶってる　二二ス6

清・佐藤　賛。

198　**丁どよい刻限御幣出して居る**

山田　浅草寺。「暮六つの鐘が鳴ると同時に、寺男が来て仁王門・随身門の扉が締められる。そして夜分の参詣客のために、御幣と賽銭箱が仁王門に出された」（『江戸水茶屋風俗考』）。

　首題句はこの場面を詠んだものだが、それは同時に「大門を入るにはちょうどよい刻限になった、と遊治郎の感覚」（同書）でもあろう。

　先ッ今日ハ是切りに御へい立テ　天七・十二・5

清・佐藤　賛。

愛染帖

波多野五楽庵選

鳥取県　岩崎みさ江
鳩尾に母いくたびの水たまり
諦めたときから沖が遠くなる

出雲市　石倉芙佐子
どんぐりころころ天井裏が賑やかだ
したたかな女になろうよ雪椿

和歌山市　福井　桂香
木枯らしに抱きしめられているポスト
自信過剰しっぽが雨に濡れている

羽曳野市　吉川　寿美
古い女で鱗一枚剥げぬまま
浅学の舌が転んでばかりいる

和歌山市　西山　幸
やがて凩　そっと種火を掘り起こす
似顔絵が上手すぎるので気に入らぬ

和歌山市　木本　朱夏
薔薇の棘ほどの自愛を赦されよ
傷口に雨の匂いのして冬に

横浜市　芦田　鈴美
長生きを悔いたり自慢してみたり

十月の蚊に利腕がおろせない
鳥取市　徳田ひろこ
さくら姫になるちょこ一杯の酒

喉が渇いてハイネの詩集たべてみる
和歌山市　古久保和子
湯豆腐へ鎧を脱いでみませんか

どの部屋の時計も少しずれている
松江市　川本　畔
哀しみの胸の衣は畳まれず

どん底を拡げてみせる老いた馬
和歌山市　川上　大輪
鬼退治するには酒が足りません

蓑虫もやがては恋をするだろう
香川県　木村あきら
登頂の夢は捨てない俺の靴

八十路ゆく延長戦の如くゆく
三田市　北野　哲男
不合格父が草笛吹いてみせ

休耕田真っ正面に日が落ちる
尼崎市　田辺　鹿太
借りのある妻に頭が上がらない

ポケットに去年の冬が蹲る
寝屋川市　籠島　恵子
こめかみのあたりで雪になる予感

ひとり芝居ではなかったはずの冬の章
弘前市　高瀬　霜石
咲いたから散るのだ握手しておくれ

満月の夜にはユダがあらわれる
西宮市　奥田みつ子
柘榴パックリ真っ正直をもてあます

十六夜を山笠（やま）の太鼓の予習打ち　唐津市　田口　虹汀
笛の鳴る方へ方へと人恋し　倉吉市　野口　節子
試行錯誤ぶどう一粒ずつ食べる　弘前市　斉藤　劦
それ以上聞くなメッキが剥げてくる　和歌山県　中後　清史
愛という憎という名の流行り風邪　亀岡市　井上　森生
鈍足でわが哲学を踏みしめる　八尾市　井尻　民
直線になると序列が狂いだす　愛媛県　中居　善信
下帯の白さ男はみな無口　黒石市　千葉　風樹
輪郭のははに似ている三日月だ　米子市　林　瑞枝
おいしくなった話から食べてゆく　鳥取県　上田　俊路
大誤算保険の満期来てしまい　松原市　玉置　重人
化石にはなれぬ私は火葬刑　高槻市　乙倉　武史
剣玉が舞い少年の音がする　弘前市　高橋　岳水
悪女キラキラ男って男って　東京都　播本　充子
カマキリの卵の位置で雪を読む　鳥取県　谷口　次男

それ以来立体交差つづく仲　枚方市　海老池　洋
バランスに神経質なヤジロベー　和歌山市　青枝　鉄治
歯に衣着せて呪縛のほめ殺し　和歌山市　桜井　千秀
引き際を誤る花の名も消える　鳥取市　武田　帆雀
人間で居たいいたいと化粧する　倉吉市　牧野　芳光
御堂筋の銀杏列ぶから列ぶ　河内長野市　植村　喜代
珈琲館おとなの午後の一ページ　豊中市　田中　正坊
胸眠り心どこまで儚うやら　弘前市　蒔苗　果林
単調な日々うろうろとして埋める　鳥取市　植田　一京
教会で癒やされ眠くなってくる　枚方市　前　たもつ
都市砂漠訛なくした人ばかり　奈良市　米田　恭昌
つるりんと押され卒業してしまい　羽曳野市　徳山みつこ
笑えたらいいね秋風の背中　富田林市　池　森子
思案して書くことも無い遺言書　八尾市　篠原いつふみ
切り札のないのがこころもとないが　八尾市　村上ミツ子

花好きの家系でポックリ死などふっと　大阪市　町田　達子
肩書に群れた尻尾が遠ざかる　横浜市　三村八重子
地震から私に似合う帽子買う　米子市　門脇　晶子
ネクタイは慶事と弔事だけになり　出雲市　岡　あきら
八起き目は少し違った方を向く　吹田市　山本希久子
エビオスを噛めば生い立ち泣いている　和歌山市　榎原　公子
謎多き謎の微笑はそのままに　堺市　桜沢　千世
折れやすい釘で自覚をしてしまう　弘前市　相馬　銀波
天敵をキャットフードで飼い慣らし　東京都　後藤　早智
悠々自適軍艦マーチに送られる　今治市　月原　宵明
亡母に遇うピエロの面がずり落ちる　富田林市　中井　アキ
楽しみへ時計を五分進ませる　和歌山市　吉村さち子
肺炎の記念日だったな立冬　鳥取県　吉田孔美子
きな臭い話が好きな地獄耳　横浜市　清水　潮華
百通りあったぬけ道ふさがれる　横浜市　近藤　道子

年輪の灰汁すこしずつ抜いている　倉吉市　山中　康子
友送る今日も時計の同じ音　寝屋川市　堀江　光子
沈黙のわけは詮索せぬことに　愛媛県　黒田　茂代
友情を揺らして逃げたつむじ風　鳥取県　西原　艶子
宿帳のペン一呼吸おいて書く　大阪府　澤田　和重
この街を私のかくれ里にする　藤井寺市　太田扶美代
広辞苑もったいなくもこき使う　寝屋川市　森　茜
有難い筈のお経が判らない　黒石市　相馬　一花
酒ほろり人間らしくなってくる　西宮市　門谷たず子
人の世やいつまで源平盛衰記　京都市　都倉　求芽
句読点大きく打ってさようなら　寝屋川市　坂上　高栄
裸婦の絵のななめに坐るボクの席　砂川市　大橋　政良
その先は言えぬあなたに傷がつく　八尾市　高橋　夕花
別れ来て傘の雫の切れぬまま　弘前市　福士　慕情
トンネルの出口でいつも油断する　鳥取市　岸本　宏章

木守柿恩ある人が気にかかり　羽曳野市　西村りつえ
プロポーズするには塀が高すぎる　鳥取県　土橋はるお
動くには動くが鈍い貨車になる　米子市　政岡日枝子
更年期検査は異常ないけれど　横浜市　川島　良子
きんもくせい散って極楽色になる　尼崎市　春城　年代
歳はとっても影は一緒に来てくれる　尼崎市　春城武庫坊
物故者のお名前ずらり身近すぎ　和歌山市　福本　英子
地下街を出た方向に迷わされ　岡山県　山本　玉恵
もう言わぬ愚痴ればみじめだけ残る　富田林市　片岡智恵子
沈黙の底を流れる不信感　青森県　西谷　大吾
しんとする私が涙見せたから　和歌山市　山根めぐみ
丸文字は絶対書かぬ司法書士　松原市　小池しげお
陣痛が長引き島に帰れない　池田市　藤井　計光
わたくしにそっくりだから大嫌い　横浜市　山下　省子
美しいことだけ記憶しておこう　和歌山市　上地登美代

矢面に立って解った風の量　藤井寺市　高田美代子
ローカル線に乗ると安心してしまう　和歌山市　玉置　当代
本当に馬鹿なんだから男って　河内長野市　加島　由一
愚痴るまい無理に渡った橋だから　和泉市　横山　捷也
無に帰る日の一切は任せきる　岡山県　小林　妻子
まん中に憧れている隅の席　西宮市　緒方美津子
生きるとはとことん恥をかくことだ　倉吉市　淡路ゆり子
顛末を申し受取る忘れもの　鳥取県　林　露杖
開けて見せたい胸で言葉を選っている　大阪市　本間満津子
人間をやめれば待って居る柩　海南市　谷口　義男
満願の日に見た海は広かった　鳥取市　岸本　孝子
遠島された一枚の首の皮　鳥取市　夏目　健一
他家の子は立派に見えて御座候　寝屋川市　太田とし子
蝶になる夢へ毛虫が背伸びする　鳥取市　春木圭一郎
出窓からレッスン中のピアノ降る　高槻市　生田　義一

窓際の失意を雲が慰める　茨木市　藤井　正雄
また例の三日坊主の年頭譜　泉佐野市　稲葉　洋
雑草を抜けば花芽の貌にあい　出雲市　板垣　夢酔
好きなので理屈なんかはいりません　羽曳野市　酒井　一壺
僕だって世間をあっと言わせたい　四条畷市　吉岡　修
茶のみ話にしては話が重すぎる　弘前市　宮崎ヒサ子
幸せなことに未だに人が好き　尼崎市　長浜　澄子
転んでもころんでも空ついてくる　米子市　澤田　千春
悪女とや月の青さへふと重ね　西宮市　西口いわゑ
腰の低い人が一番手古摺らせ　宇部市　平田　実男
矢印のとおり進むと混んでいる　海南市　三宅　保州
足踏みミシン家族五人を飢えさせず　奈良県　渡辺　富子
眼うらを捨てた故郷が離れない　倉吉市　松本よしえ
花鉢を飾るわたしの小宇宙　鳥取県　田村きみ子
重ね重ねのご忠告とは有難う　和歌山市　田中　みね

日本大正村
おんさい川柳まつりに参加して

片岡智恵子

十一月十九日、岐阜県明智町の大正文化を集めた、日本大正村の川柳まつりに参加させて頂きました。

句会の前日、ローカル列車の窓から紅葉を楽しみながらお昼に明智駅に到着。鵜かご川柳社の皆々様に温かく迎えられました。

大正村は赤字で廃止になる明智線を存続させるため、昭和六十三年に開村され、故高峰三枝子村長、現在は二代目司葉子さんが村長さんだそうです。また主要施設や案内役もすべてボランティアで運営されています。

カンカン帽姿の方の丁寧すぎる程の説明で、夕陽のかたむくまで大正村を散策しました。明治十七年建立の元役場が今大正村役場に、そこにはガス灯や懐かしいポスト、ステンドグラスのはめ込まれたドア、また元銀行の繭蔵が資料館、山本芳翠画伯の美術館、見つめられて気味悪い程の大正の土雛の数、おもちゃ館、復元されたカフエー、旧三宅家、昔塩を運んだ塩の道、絹の道は文化を運んだ街道とか。明智光秀の城跡。遠山さくら（明智遠山家の分家で江戸町奉行遠山金四郎景元）

ロマン館には川柳六大家の写真や軸、外著名人遺墨展、短冊や抹茶茶碗約五十点が飾られていました。

前夜祭もお国がらの滲んだ温かい時間を過ごさせて頂きました。

その夜五十四コースあるゴルフ場のホテルに泊まり、朝食のバイキングでは晴天の休日で、大勢のゴルファーに囲まれ、場違いなオバサンゴルファー？になっていました。

送迎バスに送られ五平餅に元気付けられ、盛大な川柳まつりになりました。

「三代目村長さんを狙っています」。楓楽さんの挨拶で会場が沸きました。ステキでした。舞台いっぱいの大正琴の演奏。矢絣の着物にはかま姿で、大正村音頭等々の踊りをご披露頂きました。

今回お誘いを受け病弱な夫を置いて、大正ロマンと人情溢れる楽しい句会に参加させて頂き、入選出来た句を愛おしみ、また日本大正村からの賞、コーヒーカップを頂き、嬉しいおみやげが出来ました。

糸ぐるま大正村の絹の道　泰子
小春日が大正路地にうずくまる　楓楽
大正の香りを残す家並ぶ　朋月
大正村辿れば母の子守り唄　智恵子
紅葉に抱かれて大正村がある　寿美子
六大家 美濃で遺墨のそろいぶみ　保子
村長が来たら吠えないうちの犬　友煕
明智村木曽路に続く道があり　岳人

女性コーナー

茴香の心

西出楓楽選

口座から勝手に落ちてゆく恐怖　和歌山市　楠見　章子
フィルムの残りで日常を写す　和歌山市　古久保和子
合わぬ眼鏡で大事なものを捨てている　倉吉市　淡路ゆり子
カップラーメン心に風が吹き抜ける　今治市　塩路よしみ
行く当てもないが家出をしてみたし　寝屋川市　岸野あやめ
塀のない家覗かれることはない　堺　市　志田　千代
リモコンに叱られながら暮してる　芦屋市　黒田　能子
落葉踏むきょうの重さの音がする　川崎市　和泉あかり
貧しくていつか身につく笑いぐせ　羽曳野市　吉川　寿美
陽がストン慌てて主婦に立ち戻る　弘前市　宮崎ヒサ子
足早に去りゆく秋のカレンダー　愛媛県　黒田　茂代
とても大事にしまい忘れた宝もの　大阪市　津守　柳伸
弁解はしない男の背の美学　箕面市　出口セツ子
童謡がとっても好きな秋の山　鳥取市　岸本　孝子
耳だけが起きてる二十五時の闇　藤井寺市　高田美代子
おいしい物食べると機嫌よい返事　西宮市　奥田みつ子
朝ごとの鏡に紅をさすいのち　香芝市　大内　朝子
夕映えの柿 柿右衛門ならずとも　横浜市　保田　絹子
たった一つ枝に残った柿の自負　八尾市　生嶋ますみ

家柄を学歴を言い負けている　東京都　播本　充子
雲行きはどうあれ洗うもの洗う　藤井寺市　鴨谷瑠美子
広かった記憶の中の父の胸　米子市　政岡日枝子
悩み聞く耳と心は大き目に　大阪市　三浦千津子
真実はいつも私をあざむかぬ　池田市　栗田　久子
ケイタイの横でつまらぬ話聞く　横浜市　清水　潮華
美術館の坂ゆっくりと冬になる　和歌山市　木本　朱夏
やさしく洗う今まで生きてきた顔だ　東大阪市　北村　賢子
やさしくなろうなろうと鶴を折っている　西宮市　門谷たず子
白い色汚して今日も生きている　あきる野市　佐藤　季穎
幸せな日のクリームはよく伸びる　島根県　伊藤　寿美
山の宿 都会で聞けぬ夜の音　大阪市　本間満津子
年賀状だけの仲間が減りつづけ　羽曳野市　福田　満州
底冷えのせぬ間にと呼ぶ京の孫　守口市　結城　君子
プラス・マイナス花の咲かない現在地　富田林市　池　森子
古い女で種も仕掛けも見抜けない　和歌山市　西山　幸
帳尻は無理やり合わす年の暮れ　鳥取市　福田　登美
独り言 返事をされてうろたえる　横浜市　秋元　和可
まな板に刻む私の泣き笑い　熊本市　永田　俊子
とっくりと菊師の業を見てこよう　大阪市　町田　達子
無印を選ぶ主婦歴四十年　吹田市　山本希久子
十指みな役目の貌をする不思議　米子市　木村富美子
冬仕度 喜怒哀楽を抽斗に　和歌山市　福井　桂香
余命表のび変えていく意地がある　富田林市　片岡智恵子
何をあくせく老母の寝顔に嘘がない　西宮市　牧渕富喜子
目隠しのうしろの正面恵比須さま　米子市　林　瑞枝

合槌を打つだけなのに感謝され　西宮市　西口いわゑ
コマーシャル甘い誘惑ばかりする　富田林市　藤田　泰子
回復期　一入もみじ美しい　大阪市　神夏磯典子
熱いお茶ぐらいで孤独癒やされる　大和高田市　鍛原　千里
この穴に思い出がある故郷の道　和歌山市　福本　英子
長生きに新製品が出て困り　寝屋川市　太田とし子
経験に優る説得力はない　尼崎市　長浜　澄子
邪魔をした心に溜まる重いもの　富田林市　中井　アキ
コスモスの群衆心理風が読む　出雲市　園山多賀子
一粒の種に願いを賭けて播く　鳥取県　西原　艶子
窓明り甘えたい日たまにある　藤井寺市　太田扶美代
地獄にも仏が居ると信じたい　和歌山市　桜井　千秀
虎杖(いたどり)を齧った野道今は無い　松江市　安食　友子
ほのぼのと喜寿の口紅艶のこす　大阪市　鈴木トヨ子
案の定　尻もちついた勇み足　寝屋川市　森　茜
新世紀　模索しながら種をまく　米子市　白根　ふみ
老いて子に従いません翔ぶつもり　鳥取県　石谷美恵子
花も嵐もこえてきました詩ごよみ　岡山県　矢内寿恵子
凍み蝶の弔いもする冬囲い　弘前市　一戸　ツネ
十人十色一人ぐらいは私の味方　八尾市　宮崎シマ子
ひとことの少なさ傷をつけた悔い　大阪市　稲本　凡子
郷愁の雫ラムネの瓶の底　松江市　川本　畔
お上手の言えないポチが土を掘る　堺　市　桜沢　千世
旅人で四条大橋渡ろうか　尼崎市　春城　年代
ハイビジョン病夫とふたり紅葉狩り　和歌山市　岩本美智子
食事会メニューに合わせ服を選る　横浜市　伊藤　ふみ

ジョークかな季節はずれて花が咲く　大阪市　川久保睦子
この街に馴染んで咲いた赤い花　和歌山市　玉置　当代
人許すたびにわたしを確かめる　鳥取県　田村きみ子
海鳴りと飛沫がかかる絵に出合う　生駒市　飛永ふりこ
ブレーキの緩んだ友の長電話　米子市　小塩智加恵
手を汚す事をお上に教わった　倉吉市　米田　幸子
絶食へテレビ料理の多い事　大阪市　松尾柳右子
へそくりをたしかめている秋の風　貝塚市　池田寿美子
きのうの昼食べたメニューを言えますか　和歌山市　田中　みね
仲立ちへさらりと諭すタイミング　倉吉市　山中　康子
するようになる子の躾怖くなる　和歌山市　山根めぐみ
迷惑をかけぬ努力の万歩計　大阪市　小泉ひさ乃
女の子だ背とて傷は残されん　鳥取県　吉田孔美子

章子さんの句―どんな物でもお金さえ出せば手に入る現代では、自分自身と戦って欲望から身を守らなければならない。とりわけカードはくせ者で、手持ち金なしで買物が出来るところが恐ろしい。現代生活の脆さの核心を突いている。**和子さんの句**―暮しの中で何気なく過ぎてゆく一コマの、およそ句に仕立てるなどとは、思いもつかないシーンが摑まえてある。どんな事でもがっぷり句に仕立てるという、作者の貪欲な作句姿勢に脱帽するほかない。**ゆり子さんの句**―人は時として間違った思い込みで、友情を失ったり身近な人を疎んだりする。生きて行く上で度の合った、視野の広い眼鏡を持つ必要を考えさせられた。**よしみさんの句**―最近の主婦の家事労働は、昔と比べようもないほど楽になり、際限なく手抜きが出来る。その分手作りの温みが忘れられ、キレる子を育てていると聞く。重い社会問題がやさしい表現で詠まれている。

年

青戸田鶴選

新年の空に日の丸よく似合う　あずま
三方に載せてもみたい年の功　みつこ
年頭の決意大きく書く日記　重人
旭日の軸 新年を演技する　愁女
少年の美談も写せフライデー　正剣
終戦の話に年が見えてくる　純子
年頃というのに娘遺跡ほり　修
不景気の言葉も入れるお年玉　いつふみ
年重ねますます味のあるお顔　深雪
今年こそ恋の切符が届きそう　ますみ
久しぶり年を忘れているダンス　劦
融け合えぬまま年を越すエルサレム　晴翠
胸張って十年日記買ってくる　ヒサ子
年重ねごちゃごちゃ混じるおもちゃ箱　ツネ
年配と言われ若いなとも言われ　ひかる
年賀状だけで続いている絆　強一
此の年を生きた証の年賀状　無禄
新年の羽織着てゆく家がある　しげお
今年こそ弾んで書こう一行詩　玲子
雪やコンコン年の始めのありがとう　螢
年とらぬ魔法があれば良いのにな　こずえ
年輪の重みを思う深い読み　あずき
やっぱり年は金で買えぬと知らされる　一風
年重ね人間の裏透けて見え　富子
年毎に義理人情にからめられ　愛論
やんわりと恥をかかさぬ年の功　鉄治
新しい年へ余命の彩を溶く　雄々
晩年の絵を青空に高く描く　和枝
年輪の北の密度が濃いくなる　慕情
自分史の年譜 農夫と書いておく　銀波
百年後思えばとるに足らぬ事　保州
年毎に寂寥感がつき纏う　武史
年重ね深まるばかり未知の森　剛治
うるう年生まれで誕生日が来ない　大輪
名優の名前も出ない年となり　洞庵
年金が占拠している脳味噌だ　妻子
回れ右出来たらいいね年の暮れ　英子

佳

いい空だこの新年の心地よさ　次男
年追って軽い本へと移行する　日枝子
切り株にされて年輪数えられ　満秋
うら表自然に読める年になり　俊子
揺り鉢の底で今年も見る初日　霜石

人

樹の年は人の年など寄せつけぬ　健一

地

年毎に無欲となってゆく寒さ　勇太

天

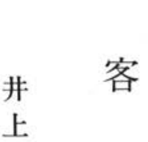
百年の計より今日の夕ごはん　神夏磯典子

軸

おだやかな年迎えたい福寿草

客

井上森生選



ポチ袋小さな客を待っている　みつこ
遠来の客へ休肝日をずらす　鉄治
松手入れ疲れた頃に飲み仲間　弘
母の眼一瞬息子の女客　勝視
客の多い家で笑いを絶やさない　さち子
アポなしで訪ねる仲の俺お前　洋
客で来た実家でかいた大あぐら　とし子
手持ち無沙汰に客待ち顔の招き猫　寿美
満員の客席酔わす名演技　忠敬
年一度枕持参の友が来る　栄子
夫婦喧嘩の最中に来るお客　一壺
肩の凝る客が帰ってほっとする　愛論
招かざる客が祝儀に気っぷみせ　凡々子
曰くあるささやき漏れる通夜の客　政良
青い目の客に倅が役に立つ　正雄
柿の木もからすの客のおもてなし　こずえ
来客を口実にしてナポレオン　時弘
そこまで来たといつも手ぶらで来るお客　たもつ
長居客立てた箒がくたびれる　像山
通夜の客帰った後の静と闇　恭昌
常連が今日も揃っている屋台　剛治
核家族倅はいつも客で来る　煩悩児

取って置きの銘茶を入れる客が来る　庸佑
上客と見たか店主がまかり出る　まさと
お客さんですよと客が言うている　大輪
箸置きもある年頭の客になる　登美
無愛想がかえって客に受けている　盛夫
無人駅客はひとりで風ばかり　たず子
ブランドを着込んだ客が河内弁　靖巳
ティッシュさえ客を選んで渡される　裕峰
酔客はみな正論を述べたてる　四郎
客席に罠が落ちてる風の音　清芳
顧客には格差をつけぬ自動ドアー　岳水
乱れ咲く野菊へ白い蝶の客　ミツ子
いい話客間に温い風が抜け　洛酔
八合目あたりで待っている刺客　権悟
一人住む私の客は風の音　照子

佳

最北のバスでひとりの客になる　劦
逢いに来たみたいに今日のお月さま　扶美代
新年の一番客はきっと孫　美也子
客引きのいない地獄の一丁目　螢
珍客に妻は欅の酒肴　ツネ

人

ままごとの客も土産を忘れない　充子

地

国賓を菊の心でおもてなし　正剣

天

極楽の客となる日を憧れる　大橋鐘造

軸

好きだから長い行列なんのその

絵馬

浅野房子選

高らかに絵馬がいななく春の風　あずま
絵馬堂に恋と受験がせめぎ合う　水笑
神様の覚えきれない絵馬の数　俊子
絵馬を見て神様下界事情知る　弘一
風船のしぼんだ頃に絵馬を買う　度
大願成就ゆっくり絵馬も揺れている　霜石
新世紀の扉を開けてくれた絵馬　雄々
絵馬だけが知ってる絵馬の運命線　劦
陽の当る枝に子の絵馬下げておく　とし子
絵馬代を含めて渡すお小遣い　幸夫
絵馬堂で昼寝の彼は十七か　四郎
天神さん絵馬の誤字には目をつむり　たもつ
花嫁を募集と書いて絵馬吊るす　強一
どの絵馬がきいてくれたかサクラサク　寿美
国立は無理だと絵馬がゆれている　典子
良いことがあると信じて絵馬を吊る　シマ子
年毎に胸に自戒の絵馬をかけ　勝視
絵馬を吊る内助の功が吉とでる　朝子
約束を果せぬ絵馬の雨ざらし　妻子
開運を願う絵馬にもあるランク　剛治
願い事歳は書かない姉の絵馬　遠野
気の毒に絵馬に名前が書いてない　大輪
古い絵馬人訪う事もない社　高栄
絵馬の山 頼み放題得手勝手　哲男
神さんはどの絵馬好きか見比べる　一風
今どきの絵馬に母乳の願はない　あやめ
神の目は慎み深い絵馬に向き　充子
虫のよい願い絵馬堂賑わせる　満秋
他人の絵馬ゆっくり読んでいるゆとり　英子
うちの子の絵馬秀才の上に吊る　保州
読み取れぬ絵馬の文字追う双眼鏡　愛論
天満宮梅の香りと絵馬に酔う　正雄
絵馬に書く希望は少し見栄を張り　千里
絵馬少し重く感じるうるう年　日枝子
絵馬一つ吊って巳年の運貰う　たず子
開運の絵馬にことしはおらが干支　隆盛
リストラへ再起の絵馬の達筆な　あずき

佳

偏差値を棚上げにして絵馬を吊る　勇太
商戦へ絵馬も必死の面構え　靖巳
大学へ行きたい絵馬をぶらさげる　螢
春の絵馬春の願いがたんとある　重人
海原へ漕ぎだす絵馬のある鎮守　善信

人

神様の死角で朽ちる絵馬の数　岳水

地

絵馬堂に人間の欲吊ってある　時弘

天

プレハブの勉強部屋を建てた絵馬　小池しげお

軸

あとはもうポックリだけを願う絵馬

初歩教室

題―世

吐田公一

明けましておめでとうございます。今年もご一緒に勉強しましょう。

前回の「虫」の課題の時に述べたことだが、どの句会でも課題吟となると同想句が多い。これは課題吟のもつ宿命で、初歩教室をご覧になられた時、ご自分の投句と掲載句とを必ず比較していただきたい。

初歩教室はスペースが少いので、全部の投句や類想句を並べて比較論評することはできないので、自分の目で確かめていただきたい。これがないと進歩はしない。課題に対しどんな見付け（着想）や表現方法があったかを探る一つの参考資料として活用して欲しい。

添削句

○人生の一こまにあるセーラー服　トキ
人生では世にならない。人世では世の中の意となり句意に合わない。表現は違うが、
▽世の穢れ知らぬ乙女の頃の夢

○経済も政治も澱んだ世紀末　賢
中八はリズムが悪いので選者によっては大変嫌われる方もある。で、澱んだを澱むとするとよいのでは。

○世渡りが下手で仰山損してる　きらり
譬喩的に表現されるとよいのでは。
▽七転び世渡り下手でまた転び

○世間の眼金の有る方睨んでる　恒雄
下五が不適切。時事吟として詠めば
▽金のある方へ媚売る世の乱れ

○農という世業の箍嵌められる　煩悩児
世業の箍とは面白い表現だが、中六はリズムが悪い。箍をとすれば―。
▽生涯を農の世業に縛られる

○世間様鬼も仏も住んでます　キミエ
原句の場合様をにはとすれば―。
▽気の持ちようで鬼も仏も住む世間

○世の中だ幸せつなぐ橋もある　志重
上五に難。見付けは面白い。
▽人の世をつなぐ大きな虹の橋

○平和な世なのに犯罪多すぎる　文江
全くの説明句
▽犯罪の増える平和な世にくらし

○世捨て人自称のわりに欲深い　侑子
前後を入れ替えてみると
▽欲深いわりには自称世捨て人

○来世でもあなたと決めた散歩靴　(山)雅子
着眼点はいい。ただできるだけ上五にするように。では不要

○この世は楽しお迎え少し待ってほし　春江
中七以後がやや説明的。
▽現世を楽しく生きてまだ未練

○虫めがね世界の地図と遊んでる　(鳥)玲子
「虫めがぬ」の擬人法はいいが、下八音字が説明に陥っている。
▽虫めがぬが遊ぶ夢みる世界地図

○人の世話良いが時々勇み足　栄翁
良いが冗句といえる。
▽世話焼きが時々おこす勇み足

○定年が急に世間を狭くする　圭二
急にの語は不要
▽定年が世間の風に乗れぬまま

○世の乱れ強い小年受け止める　悦子
下五が安易な表現に終っている。句意は多少異るが
▽少年の瞳が嘆く世の乱れ

○世間体持ち出し話もつれてる　鈴美
単に表現の問題だが。着眼点はいい。
▽世間体にして話もつれ出し

○IT時代のんびり出来ぬ世となった　宗明
発想を少し転換してみると
▽ITに振り回されて世は進歩

○新世紀女ますます羽ばたいて　ひさ乃
女の世紀を強調するとすれば
▽羽ばたいて巣立つ女の新世紀
○無視してもやはり厳しく世間の目　深　雪
厳しくではなく厳しいでは
○今の世は器械を使い生かされる　朋　月
「生かされる」を「長寿」に置き換えてみると字数に余裕が生れる。
▽今の世の長寿器械とくすりづけ
○目を覆う事件がおこる世紀末　益　子
▽目を覆う事件が多い世紀末
○時世ではすまぬ問題数多あり　よしこ
▽時世ではすまぬ事件に目が回る
○三世代がやがや住んで温かい　栄　子
「がやがや」が冗長。温かいでなごやかさが表現されている。
▽三世代住んで茶の間が温かい
○虎ファン俺は世に言う野球馬鹿　裕　峰
下五が甘い。上四中八であるが
▽世に言う判官びいきで虎ファン
○この世には未練が残る遺る瀬ない　晩　翠
下五に訴求力がない。
▽傘寿だがまだまだ未練あるこの世
○新世紀わたし還暦うれしいな　ふ　み
下五が単純安易な表現
▽期待して待つ還暦の新世紀

○故里の世代も替り疎遠され　四三郎
○古里の世代代って遠くなり　純
同想没句。この他にも世間体、新世紀、世紀末等で同想句が多かった。
○善し悪しもニュースの進歩世の進歩　トシエ
上五が言わずもがなの表現
▽世は進歩インターネットで知るニュース
○世間体気にしていたら生きにくい　満　子
逆の発想をしてみると（現在のお年寄りの方々ではうなずけるのでは）
▽世間体気にして生きて来た世代
○水泳のごとく世の中泳げない　千　代
見付けは面白いのだが説明句。
▽世の中を巧みに泳ぎトップの座
○世の習い恵方見てから初詣り　ふりこ
前後を入れ替えてみると
▽初詣で恵方に向う世の習い
○新世紀活断層が出番待つ　つよし
活断層の見付けはいい
▽新世紀政治の活断層が待つ
○処世術は学問よりもむずかしい　紫
内容はやや異るが
▽学問にたけて世事には疎くいる
○いつの世も若者なげく管理職　㈢八重子
誤解され易い句。
▽近頃の若いヤツはといつの世も

佳句

いいところらしいあの世は行ったきり　武
世を拗ねる術も知らずに好々爺　無　禄
黄門の世直し旅へアンコール　方　子
価値観が違う世代の輪に解けぬ　た　え
世の流れに乗っても見たい揚羽蝶　喜代子
世に疎く節目ふしめに妻の知恵　彰　雄
遺失物届きこの世も見直され　サト子
穏やかな流れにこの世の渦が巻く　てる代
人の世はぼろい話に騙される　志津香
少子化に不安かかえる新世紀　君　江
母の手をこぼれ世間の風を知り　てるみ
ジパングで浮世の風に逢いに行く　つよし
限りなく晴れるとあの世遠くなり　幸　枝
世の移りじっと見つめる埴輪の目　和　可
新世紀案山子も茶髪里の秋　像　山
クリスタル知事に世間の風あたり　(清)玲　子
こだわりを捨てて世間を広く生き　芳　江
自分史の二十世紀は震度六　智加恵
（下五の引用がいい）
老いの世をペン一本で語りたい　タツヱ
（着眼点がすばらしい）
世の中を知らぬ蛙が跳ね返り　敏　子
（譬喩をうまくまとめられた）

私の句

澄んだ瞳がじっと見ている世の濁り

■句集紹介

『いのち』

（故）松川杜的
松川芳子　句集

都倉求芽

塔うれし今日は墨絵のシルエット　杜的
水たまり五重の塔がまたげない　〃
旅立ちの朝を塔にも別れする　〃

杜的さんのお家は東寺のすぐ近く。日々朝夕お二階から日本一の五重の塔を眺めておられた杜的さんは、数多く塔の句を詠んでおられます。またこの辺りは、つい最近まで有名な九条葱の畑が広がっていた処でもあります。

一号線ひとところ九条葱の青光る　杜的
葱坊主　わたしも年齢をとりました　〃

この度、紫香先生と愛論さんのお骨折りと先輩、柳友の皆様の温かいご援助を得て、杜的・芳子句集『いのち』が発刊されました。お二人の仲のよさは京都塔の会は勿論、本社句会、京阪神近郊の句会でもいつもご一緒されるほどでした。芳子さんも

葱坊主まだまだ思案つづきそう　芳子

と、まず葱坊主で仲のよさをご紹介しましたが、ご家族の句もみてみましょう。

杜的さんから

老母の食　少うし落ちた花曇り
妻が居て母が居て冬の灯あったかし
子には子のでっかい夢がある積木
糸電話　孫の相談聞いてやる

芳子さんは

母の目が何時も私の背なにある
日記帳昨日も今日も母の事
玉手箱昔むかしの子の便り
子も孫も振り向く位置に居てくれず

そして当のご夫婦は

コーヒーは夫の入れる役でよし　杜的
喫茶店　夫が払うと決めている　芳子
美人薄命　金魚鉢の金魚にも　杜的
美人薄命　長生きさせてもろてます　芳子
働き過ぎる妻がいて孤独　杜的
怖い顔しているうちはまだ元気　芳子
父の日を妻が祝うてくれました　杜的
還暦へ良妻賢母の帆を降ろす　芳子

しかし、杜的さんのご病気が思わしくなくなってくると、またお二人の心境が微妙な心遣いに変わってきます。

一人でも笑えるけいこしています　杜的
杖一つ勇気がないとつけません　〃
最終の出番は妻と決めている　〃
金婚のこれというドラマないままに　杜的
簡単に夫と妥協してしまう　芳子
聞き違い思い違いで日が暮れる　〃
すき間風すっきりしない昨日今日　〃

それではこのあたりで杜的さんの多才ぶりをみてみましょう。若いころから嗜んでおられた尺八は師範の腕前です。

一管のドラマは私だけのもの　杜的
一管は重し三十年という手垢　〃

それに京都塔の会の句報の二〇〇号から、ずっと表紙を飾っていただいた俳画はいつも楽しさ溢れるものでした。この句集にも項目ごとに想い出の画を挿入しています。

光り満つ五百羅漢の胸の線　杜的
栗の毬　来るなら来いという構え　〃
一病を持つ者同士へ揺れる萩　〃

そして書の句では路郎賞に輝く

この夫に草書のかすれがちと欲しい　杜的

それを陰で支えてこられた芳子さんの、よき理解者ぶりがわかります。

無口には苦労しました倦怠期　芳子
筆洗う今日より明日へ持つ希望　〃
人形の生命を入れる細い筆　〃

それでは終りにお別れの句を

寂聴のテープ途中で切れたまま　杜的
肩の荷を下ろしてからの物忘れ　芳子

北　勝美さんを悼む

金井文秋

勝美さんが亡くなられた。それを知ったのは告別式の二時間程前である。いつものように南大阪川柳会の句報を手渡しする為、持って行ったところ、告示がしてあったのである。

早速家に帰り、食事を済ませ参列した。午後一時からの葬儀は、連絡がなかったため、川柳家は私一人だけだった。せめて私ひとりだけでも知らせてくれたのは、仏様の導きであったのかも知れない。

気管不全の為急遽入院されたのは、十月の三十日、十一月三日早朝息を引き取られたそうである。意識ははっきりしていたらしいがあまりに急な事で、後のことを子供達に伝えておく時間もなかったのであろう。

パーキンソン病と言う難病の奥様を介護する為に、十年間も付添っておられた勝美さんも大変な事だったと思う。その中でも五、六年は特に病状も厳しかったそうだが、それでも川柳は決して手放さなかったのである。

入退院の繰り返しであったが、少しのあい間を見ては句会へも来られ、出られなくなってからも投句を欠かされた事がないほどの熱心さであった。川柳も満足しているだろう。

川柳は長年勤めて居られた刀身鋳造所を六十歳で定年退職されて、四、五年してから始められたらしい。動機については聞き洩らしてしまったが、柳歴は二十数年になる。誰に手ほどきを受けたかも聞いてはいない。昭和53年5月号からは、雑詠も川柳塔欄に載っているから、川柳を始めてあまり年月もたたず同人になられたらしい。

兎に角雑詠と句会吟を休む事なく挑戦していかれたのが勝美流だったようだ。その点で私のやり方にもよく似ている。歳も同じだから性格も似ているんだろう。明治生れの川柳家が一人でも減る事は淋しい。

本人も晩年は足痛の為、歩くことも階段を昇降する事も不自由だったらしいが、自転車に乗れば割り合い楽に行けるので、近くの句会へはよく出かけられた。結構楽しかったことだと思う。

この度の急死も介護の疲れが影響していたかも知れない。せめてもう五、六年ゆっくりと川柳を楽しんで貰いたかった。奥様は、これ程ご主人に尽くされ、黄泉の旅路に発たれるのを、大いに感謝された事だろう。介護の終り頃と野辺送りを済ませられてからの句もたくさんあるが、一部を紹介しよう。

ナース呼ぶボタンも押せぬ妻哀れ
昏睡の目尻に少し光るもの
寝たきりの妻へお早うくり返す
寝たきりへ曽孫を見せに来た連休
ありがとうの声を微かに聞く最後
薫風に誘われ永久の旅立ちよ
死顔を見直す妻の美しさ
連れ添うて介護に悔いなく送る妻
介護からはなれ八十路の知る昼寝
膝小僧抱いて遺影に語りかけ
遺品整理俺のか単衣のしつけ糸
初盆を終えて寂しさ一頻り

戒名　諦誉勝道禅定門　90歳

同い年淋しがらせて黄泉の旅　文秋

本社 十二月句会

十二月七日(木)午後五時半
アウィーナ大阪

小春日和の七日は97名の出席であった。はじめにその朝高杉鬼遊相談役が亡くなった悲報がもたらされる。次いで朗報として西田柳宏子さんから、日川協会長仲川たけし氏と共々の御尽力により、来年から念願の造幣局通り抜けにおける川柳短冊飾り復活の運びとなった旨報告された。

お話は前たもつ氏。テーマは、ボランティアと教育問題の二つである。

先ず平成九年の同テーマの、その後の活動状況について話す。三年の間に会員も増え、本部も大阪に移り、名称も「ナルク」となった時間預託のボランティア活動は、益々大きな広がりを見せ、政府からも認証をされる。

また永年教育に携ってきた氏は、教育問題が、頭を離れたことはないと語る。

月間賞は堺市の宮本かりんさんに輝く。

（司会—遠野）（記名—澄子・朝子）
（受付—ルイ子・賢子）（清記—義）

席題「くじ」　橘高薫風選

振り袖のおみくじ引くもお正月　たもつ
上天気宝くじでも買おかしら　あやめ
当り年の孫の手で買う夢のくじ　章久
四億と聞いてこっちのくじにする　修
商店街のくじ引きに宝くじ当る　睦子
十万で買って三百円当たる　賢子
吉というみくじにもある但し書き　洋
お菓子屋へ課長が走るあみだくじ　倫子
ほっといて当るまで買う宝くじ　冬葉
くじ当てた寄付でふんぞり返ってる　天笑
宝くじもしも当たれば夜逃げする　茜
くじ引きで当たった年末大掃除　あやめ
宝くじ神は留守だと仰せられ　義子
アメリカのくじもやっぱり当らない　鹿太
一本しかないはずれくじ引き当てる　シマ子
くじ運の悪い男のくじ狂い　靖巳
くじ運は悪いが男運はよい　千代
女房運悪いがくじ運はつよい　天笑
くじ運とは別で気のきく妻である　萬的
くじ運の悪い男の妻である　扶美代
くじ運は吉だが離婚沙汰がある　森子
おみくじの凶を味方に生きてやる　朝子
名門校くじであろうとパスはパス　修
くじ運が悪くて会長やってます　哲夫
ゴア ブッシュくじ引きしたら如何です　かすみ
ひかえめな人が好きらしくじの運　一風
ドラフト一位涙かくして意に添わず　計光
くじ運の悪い男の半生記　恭昌
宝くじ一枚抱いてホームレス　洋
はずれくじも良きかな余生たんとある　義子
特等より二等の品が欲しいくじ　千代
ジャンボくじ当たり血管破裂する　隆盛

佳

三億円敷きその上で寝てみたい　雅文
貧乏くじ引いて屈託ないふたり　茜
この歳に恋が実るというみくじ　正雄
卒寿超えても夢ふくらますジャンボくじ　満州
人生は当り外れの風の中　アキ

人

ガラガラを無心で引いたことはない　保子

地

夢やはり夢でしかない夢のくじ　章久

天

宝くじあてて静かにしています　ますみ

軸

スペードとダイヤとハートくじの運

兼題「涙」　岸野あやめ選

涙壺涸れたら腹が減ってきた　剛治
ことばにはならない涙拭いている　螢
誓詞読む涙信じていいものか　照子
やっと式花婿さんが泣いている　アキ
魔女だろうピンクの涙こぼすのは　美代子
涙拭き拭きお総菜考える　天笑
ガッツポーズの拳で汗と涙拭く　三男
どん底の涙忘れたことがない　一風

リハビリの涙見守るのも涙　千代
こっそりと涙を拭いていた金魚　大輪
審判のミスを許してのむ涙　英子
美しい涙で過去を許し合う　典子
そっとしておこう涙の乾くまで　諷云児
上向いて涙こぼれぬよう話す　伽羅
人前で見せぬ涙をバネにする　朝子
泣かないと決めて独りのイヤリング　セツ子
真珠のようだとはもう言われない涙　房子
たっぷりの涙出るよう水を飲む　千代
涙と言う武器が最後にある女　萬的
涙には弱い男の転び癖　希久子
てれくさい涙をかくすサングラス　冬葉
涙した香華の明日は犯人に　洞庵
のし袋雀の涙ほどの義理　鐘造
悲しみの極限涙など出ない　度
リストラを切り出す鬼の目に涙　修
すぐ涙出すから母と話さない　月子
抱き合えば涙の奥で血が通う　一歩
一粒の涙が武器の日もあった　いわゑ
涙なんか流すな誤解されるから　大輪
一途さの涙が光る金メダル　柳弘
げんこより痛いだまっている涙　哲男
本能で泣く赤子には逆えず　妙子
泣いてたらあかんと言われまた涙　ふりこ
泣けるだけお泣きと抱いてくれる友　英子

佳

生きてゆく武器は涙と笑顔です　セツ子
失敗の涙は胸の中で拭く　勇太
時どきは泣かぬとドライアイになる　保子
あなたの涙はわたしが拭いたげる　金太
道化師の仮面のうらに泣いた染み　隆盛

人

座蒲団に落ちた涙のあとがある　しげお

地

涙しても耐える他なし三宅島　澄子

天

木を倒すひびき地球は涙する　洞庵

軸

手を合わせうれし悲しい紙おむつ

兼題「越える」　山本義子選

この峠越えると好きな海がある　照子
ライバルに越えてるものを持つ余裕　庸佑
欲を捨てたらハードル軽く越せました　剛治
この坂を越えるとみかん香り出す　瑠美子
海山を幾つも越えて来た頑固　いつふみ
年越せぬ青いテントに冷える夜　春
医者が言う峠越えたに皆の笑み　一歩
稜線を越えると見える明日の夢　たず子
常識を越えて携帯電話鳴る　希久子
趣味の域を越えると壁にぶち当る　東雲
何度でも雪の深さを逢いに行く　扶美代
峠越え憎まれ口が出る安堵　セツ子
振り向けば越えた山河の多いこと　鹿太
年金の歩幅で越える余命表　柳弘
一線を越えたらしいな言葉尻　昭子
吃水線を越えたのだろう青い風　森子
スピードオーバー老母は念仏唱えだす　大輪
志とことなり別の山越える　義
越して来た山の高さは測るまい　保子
ハードルを越えて闇から抜けられる　朋月
山や川越えてふたりの花の里　いわゑ
一世紀越えてる母にある元気　ルイ子
子のねがい屋根越えて飛べシャボン玉　賢子
人妻が常識の枠越えたがる　雅文
とび越えるつもりの川にはまってる　伽羅
ハンディを越えて心の目を開く　勇太
とび越せぬ月を盗んだ水たまり　鐘造
修羅いくつ越えたか友のデスマスク　恭昌
健全に十七歳を子が越える　セツ子
山いくつ越えても神に近づけぬ　大輪
業という坂を女は越えている　扶美代
限界を越えた親切疑われ　睦子
三人かかっても母を越えられず　義
仲間とならアルプスさえも越える鳥　たもつ
越えるしかないぎゅっぎゅっと髪洗う　茜

佳

職人の技ハイテクを越えている　金太
一線を越える他人でないふたり　柳弘
百日紅すぎた苦労は話さない　澄子
屋根越えた羽根の彩なら覚えてる　瑠美子
いつからか同情越えていたらしい　千代

人

寄せ書の絵はがき海を越えて来る　〆女

地

国境を越えても同じ雲がある　ダン吉

天

また噴火そんな恐れも越えて住み　一風

軸

峠越え初雪に会うほどのよさ

兼題「豆腐」　藤井正雄選

湯豆腐がゆっくり愚痴をきいてくれ　剛治
許そうか許すまいかと豆腐切る　螢
時報のように来てた豆腐屋旨かった　満津子
下町は豆腐分け合う仲でいる　〆女
酒二合とうふ半丁あればよい　金太
湯豆腐の向こうにこころ許すひと　瑠美子
湯豆腐を挟んで口説く京の恋　遠野
豆腐にも意地あり丸くなりません　典子
和洋中華豆腐味方にしておこう　希久子
ふたり仲うふふおほほと嵯峨豆腐　朝子
湯豆腐の湯気に冷戦徐々に溶け　一歩
夏は冷や冬は湯豆腐酒が好き　笛生
針供養豆腐は手持ち無沙汰なり　千代
豆腐屋の豆腐はみんな泳いでる　大輪
絹こしに土生姜あり僕に妻　恭昌
恋人を抱くよう豆腐すくいあげ　鐘造
年金に妥協している冷奴　はじめ
安いのも理由の一つ豆腐好き　哲男
豆腐屋のラッパの残る温い街　たもつ
湯豆腐が好き悪人になりきれず　重人
精進料理豆腐きれいに七変化　柳宏子
絹こしも木綿に変る妻の老い　いつふみ
半丁の豆腐で母は昼にする　洞庵
湯豆腐もコースに入れてもみじ狩り　いわゑ
湯豆腐が踊りはじめて仲なおり　朝子
フルムーン京の紅葉と湯豆腐と　三男
冷奴あれば父さんいい機嫌　一風
屋台でも豆腐帰っても豆腐　しげお
はよあげてくれと豆腐が踊ってる　鐘造
湯豆腐の由来を添えて京なまり　勇太
ことことと喋る豆腐の声がする　章久
たのしいな豆腐のような嫁が来る　舞夢
あく迄も白切り通す冷奴　寿美
ぐちゃぐちゃと豆腐をつぶす今日の鬱　たもつ
控えめに美酒を酌ぎ足す冷やっこ　森子

佳

手の上で豆腐十字の刑に処す　とし子
くやしさに豆腐ぐちゃぐちゃ切っている　舞夢
シンプルに暮れシンプルな豆腐鍋　希久子
焼き豆腐すき焼き鍋ですねている　月子
豆腐屋の赤い指から冬に入る　たず子

人

湯どうふを掬う煩悩消えてゆく　典子

地

言い足りぬ不満豆腐の隅突く　澄子

天

日本に五年神父の豆腐好き　雅文

軸

スーパーの豆腐に祖父の愚痴つづく

兼題「歩く」　高田美代子選

のほほんと父の轍を外れない　充子
男には一人で歩く道がある　諷云児
一駅手前降りて立ち寄る店が出来　満津子
スニーカー十キロ以上無理はせず　春
ここからはずっとわたしと歩く杖　扶美代
二人とも同じ思いで歩く闇　愛論
散歩する素足に重い宿の下駄　愛論
歩いても地雷心配ない日本　典子
ジグザグに歩き尻尾を掴ませぬ　澄子
いつもの道歩いておなじ事思う　とし子
肩幅へ歩を合わせたい人がいる　保子
夫婦だとしても落差のある歩幅　森子
ひたすらに歩くローンを払うまで　ルイ子
ライバルの歩幅を読んでいる背中　ますみ
子が歩き夫婦喧嘩は休戦に　あやめ
歩く日は膝にご機嫌聞いてから　英子
リハビリの明日見えてくる二歩三歩　いつふみ
のんびりと歩けば見える四季の色　鹿太
自己嫌悪すとんと落ちるまで歩く　茜
一日のアリバイを知る万歩計　遠野
目標がぼやけ楽しくなる歩み　かりん
ジングルベルとしみじみ歩く店じまい　茜
コスモスの風に木馬の歩が揃う　度
沢歩き北山杉が語りかけ　哲夫
職探し歩く背中が丸くなる　一歩
歩かねばこの腹立ちの消える迄　妙子
真っ直ぐに歩くと犬が従いて来る　三男
松茸のあがり場知った山歩く　笛生
遊吟詩人が探し歩いた蜃気楼　倫子
千鳥足美人の方へ方へ行く　修

歩き出さねばわたしの明日が始まらぬ　寿　美
大胆に歩こう僕の街だから　扶美代
口惜しいが妻の歩幅が広すぎる　東　雲
大股で歩くと悩み消えてゆく　たもつ
踵から歩く大地とひびき合う　朝　子

佳

歩いたらいいのに車乗りたがり　月　子
目的を決めずに歩く好奇心　セツ子
飲み歩く今晩はまだ三軒目　利　昭
徒歩二分車で五分かかります　大　輪
善人に歩き疲れた足の裏　鐘　造

人

遊び駒今にひょっこり歩き出す　修

地

しんがりが好き歩いても走っても　希久子

天

ふんわりと歩く二人の長い影　舞　夢

軸

しっかりと歩こヒト科として歩こ

兼題「極める」　河内天笑選

極めたら一輪ざしに確かな美　剛　治
進退が極まり僕をとり戻す　ダン吉
極めれば食は我が家の膳にある　希久子
にくじゃがに極めた母の味があり　菜　月
黒豆はやっぱり老母の極めつけ　恭　昌
究極のグルメは母の握りめし　靖　巳
レシピ極めて行きつく先は母の味　たず子
永字八法極めて行司やっている　しげお
究極の薬はやはり愛だろう　かりん
一日を極めた父の鼾だな　大　輪
フグ料理極めた腕がテッサ盛る　利　武
極めつきのワルとも見えぬ人だけど　寿美子
貧政の極み支持率が語る　一　歩
極めて遺憾謝罪しているようでない　正　雄
今はもう鮒釣りしてる天狗です　恵　子
思いきり笑おう悲しみの極み　扶美代
凝り性で妻よりうまい家事料理　セツ子
頂点で安定剤が離せない　美代子
鼻の差で勝つのも極めつきの技　紫　香
頂点を極めてるのに恐妻家　正　雄
極めつけお好み焼きのたれにある　舞　夢
美白顔極めたその子さんも逝き　満　州
極めれば一ミクロンが見えてくる　弘　風
極限の暮しと思う青テント　度
極めたらきっと退屈するだろう　大　輪
極道を極めただけに世故にたけ　武庫坊
顔見世に道を極めた板並ぶ　朋　月
感激の極み飛び込むのも若さ　柳宏子
憧れがスタートだった金メダル　充　子
木の精と心通うている匠　重　人
話術極めて詐欺で捕まり　しげお
道極め猶精進をすると言う　利　昭
経済学極めて株は儲からず　武庫坊
緊張の極限わたし母になる　昭　子
自ずから彩り極め敷くもみじ　茜

佳

夫婦愛の極みだろうか物静か　シマ子
やりくりを極めて欲しいものが無い　泰　子
芸道を極めてこわいほど寡黙　ダン吉
ぜいたくを極めた果ての麦ご飯　泰　子
木目から答えをもらう木の匠　森　子

人

頂点を極めた稲がお辞儀する　金　太

地

究極は人間の目に頼られる　たもつ

天

極上の珍味は口に合いませぬ　宮本かりん

軸

天空を極めるスバル望遠鏡

平成12年度本社句会の月間賞杯永久保持者は川上大輪氏（和歌山市）に決まりました。

平成12年度本社句会皆出席者（順不同）

安達はじめ　阿萬萬的　浅野房子　石森利昭
板尾岳人　岩佐ダン吉　一本勇太　石原靖巳
江口度　海老池洋　川久保睦子　鴨谷瑠美子
榎本舞夢　川原章久　河内月子　神夏磯典子
金井文秋　岸野あやめ　黒川紫香　坂上高栄
楠昭子　小池しげお　田辺鹿太　高田美代子
玉置重人　谷口義　高須賀金太　出口セツ子
寺井東雲　長浜澄子　宮口笛生　西口いわゑ
中澤伽羅　西内朋月　平松かすみ　板東倫子
藤井正雄　福本英子　坊農柳弘　堀端三男
前たもつ　宮崎シマ子　森下愛論　吉村雅文
山本希久子　（45名）

毎月**25日**締切・30句以内厳守　**編集部**

ローズ川柳会　**山崎　君子報**

もみじして神に宇宙に見てもらう　いわゑ
遠会釈紅葉一まい舞いおちる　はつ絵
紅葉狩征きて還らぬ兄想う　キク子
もみじ散る湖東に早い冬仕度　澄　子
紅葉照るほろ酔い更に赤く染め　哲　子
最果ての恋は紅葉せぬままに　て　る
すすき野が真白くゆれる曽爾高原　トミヱ
広い森でファイトを貰う秋である　義　子
宇宙からのニュース聞いてる四畳半　藍
友の訃を聞いて悲しい広い海　まさお
自分史の余白を広くとっておく　貴代子
コスモスの迷路で老女踊らんか　年　代
三匹の犬が淋しさ忘れさせ　笑　女
二十一世紀の夢の下絵を考える　武庫坊

川柳塔みぞくち　**小西　雄々報**

菊花展みんなに賞を上げたいな　智恵子
立ち寄れば菊花の浮いたお茶を出す　信　敬
菊作り亡父の枝には程遠い　豊　枝
褒められて菊人形のすまし顔　和　代
和を広げ仲間が増えた菊作り　公美枝
良い話来そうな予感菊日和　久　子
秋日和菊人形は歩きたい　鈴　枝
こじんまり菊人形がほほえんだ　弘　子
震度六　鉢がこわれて菊が消え　静　江
菊咲いてわが家の庭も活気づく　康　女
菊人形動じることを許されず　正　光
白菊に余震におびえ笑われる　雄　々

川柳若葉の会（前月分）　**宮崎シマ子報**

菊人形菊を着せると喋り出す　清　芳
物思う歳ではないが秋の雲　慶　子
たくさんの善意を貰う旅の雨　ア　キ
ロープウェイ雨の深山わけのぼる　弘　直
つつましくくらし吟行宿の贅　香　住
友の輪へ金剛連山秋深し　あずき
はや紅葉金剛山は霧の中　能　子
我がグループの他に客なし山の宿　シマ子
赤ちゃんの寝息は甘いピンク色　欣史子
霧に会い霧に別れた山の駅　喜美子

川柳ねやがわ　**江口　度報**

来客もヘルパーさんと言う暮し　三　郎
遠来の客にリストラ言えぬまま　あやめ
玄関に車を待たせ見舞客　光　子
招かざる客となってたとは迂闊　茜
上客になろうと少し無理をする　ルイ子
客を並ばす夢を持ってるラーメン屋　文　秋
手帳には妻の予定もちゃんとのせ　一　風
手帳などいらんと頭言うている　度
手帳からはみ出しそうな嬉しい日　礫
母さんは手帳を持ったことがない　かすみ
痛いとこつく正論の風当り　朝　子
痛い目に遭って人生観変わり　勇太朗
末席が一番痛いところ突く　庸　佑
受話器からちくりちくりと母の針　洋
心痛を癒してくれた友の声　高　栄
人の痛みが判る痛みに巡り合う　亜　成
行列は美味しい匂いたこやき屋　日出子
腰巾着は美味しいとしか言えず　冬　葉
美味しいと言わず食器を誉められる　弘　一
私ほど美味しい女はいませんよ　修
ひとりだけうまいうまいと言うて食べ　博　泉
ふるさとの美味しい水を掌ですくい　たもつ
バリアフリー誰も渡らぬ歩道橋　利　昭
仕方なく厄介亭主決めている　仁　清
俺の余生占うように紅葉散る　波留吉
日本海越えた松茸なら買える　順　三
そう言えばツバメがいなくなっている　恵　子
気が善くて末座で遠慮してる虎　時　弘
顔のしわアップで活かす脇役者　忠　央
火の章を綴る女の泣きぼくろ　仁

サークル檸檬　**小林　一夫報**

ひょいひょいとまたいで真実見失う　あずき
談合の黒い数字でしゃぶる飴　遠　野
頂点の椅子で飴しか口にせず　楓　楽

だんじりに親も茶髪も幼子も　哲夫
現役で転んだ傷がつきまとう　希久子
珈琲館おとなの午後の一頁　正坊
さわやかな流れの裏のあめとむち　いわゑ
にらみ合いの均衡破る飴ひとつ　義子
飴くれる人が味方と限らない　靖巳
初恋はドロップくれた男の子　澄子
構えずにさらりと水のよう生きる　房子
許す気はないのにコーヒ飴とける　智恵子

東大阪市川柳同好会　森下愛論報

ひとりでに本屋に向かう秋の足　度
介護する嫁が読んでる恐い本　猪太郎
秋風が立ち読みしてる古本屋　千里
幻を断ち切る安定剤を飲む　シマ子
簡単に痩せる薬に騙される　晋吾
副作用出たのか患者騒がしい　雅文
くすり指男使うとおかしいな　太郎
童顔のゲスト意外なこと喋る　萬的
乾杯のときだけ顔を出すゲスト　弥生
沈黙のゲスト爆弾抱えてる　愛論
肩書がものを言わせているゲスト　信治
飛ぶ鳥を落とした頃に戻す酒　とみを
飛ばされた僻地地酒に救われる　緑
松茸の未練が残る赤い松　東雲
鼻の差に逃げた馬券にある未練　庸佑
愚痴っぽい男に未練あるもんか　あや子
思いっきり飛んでも糸がついてます　美弥子
怨念の炎を抱いている未練　湖風

川柳塔おっぱこ吟社　木村あきら報

何役もこなす女の半世紀　ひかり
出稼ぎの夫を気遣う北の風　あきら
足腰を鍛えて寿命引きのばす　輝夫
実家までやっと抱えてきた涙　文仙
わだかまりあるが一先ず妥協する　マツエ
今だから話せる過去が二ツ三ツ　八重子
花嫁を送る言葉に貰い泣き　放任
初恋の涙の跡がある詩集　かおり
背がこうも曲ってたのか影法師　坊太郎
女です涙の袋隠し持つ　よしみ
闘病記勇気を貰うために読む　勝
これでいいのよと涙の後で言う　吟笑
雑炊を食いつつ想う亡母の味　いさむ
後がない一度転べば寝たきりに　まさる
ふる里は良い子供の頃の友がいる　治延
涙ぐみ故郷の老母を恋う遍路　貞月
胸焦がす年でもないのに頬を染め　寿々女
ハンドルに汗を握りし老いの坂　正雪

竹原川柳会　時広一路報

なんとなく料理の本を買ってみる　千枝
花嫁も新車も美しい秋だ　（大1）蘭幸
車の免許また心配がふえました　貞子
3ナンバー外車の主は失業中　節生
買い替えの出来ぬ車のミラー拭く　敬子
卒寿です畠に行きます三輪車　千年枝
乳母車お陰で歩ける貴重品　喜久恵
車座になると出てくる故郷の唄　房子
お車が参りましたと追い出され　万年
同じ血の流れを思う肩車　静風
人間が車に遠慮して歩く　勲
素直な風にいのちをもらう風車　一枝
ハンドルを握れば老いが逃げて行く　正宏
冬の陽へ貨物列車の長々と　笑子
世紀末ぐらぐらゆれて秋の景　節夫
こがね波しみじみと見る稲穂かな　孝枝
青信号黄色になって汗を拭く　規代
五十年イエローカードの夫でした　力
ゴッホの黄見つめ昇天していたり　不朽
いちょうはらはら昨日のことは忘れよう　栄恵
山の子が聞いたら笑う虫が売れ　喜美子
売るものが無くつつましく生きてるよ　夏喜

佳句地十選（12月号から）　高島啓子

約束をインプットした置時計　義子
メイドインUSAの孫帰る　公一
坂道で厚底靴を脱いでいる　元紀
青空へ手を伸ばしてる肩車　ミツ子
トンネルを抜けると父が立っていた　蘭幸
番号をつけ人間の臭い消す　芳光
ひとり暮しは一人ぐらしの忙しさ　英壬子
現金は痛み止めにもなるらしい　義
ひまわりの返事が高い位置にある　諷人
嘘一つ隠す標準語が狂う　洋々

会社訪問自分を安くしたくない　蝸牛
権利書に安く売るなと書いてある　菁居
古本を売って古本買ってきた　半覚
ブランドの威力贋物でも売れる　一路

三幸川柳教室　三宅保州報

お互いに思い出秘めて沈丁花　清
秋の空柿も女も熟してる　起世子
野仏を引き立て役の彼岸花　マリ子
栗はぜた囲炉裏が眠る故郷の家　満洲子
列島を北から染める秋の彩　豊太郎
コスモスが揺れると君を思い出す　当代
のんびりと秋の絵を描く無位無冠　伸二
天高く飛べる日を待つ千羽鶴　秀男
マネキンが夢を着てます秋の彩　美子
立ち話へつるべ落としが水を差す　みね
人生もつるべ落としの夜の秋　碧
探さないで下さい秋が終わるまで　保州
ほっとする解放感にある油断　昭枝
運転の慣れから油断のさばらせ　佳世子
油断してベルト緩めを見られてた　かず子
亀の歩に油断していた影法師　登美代
ゆきずりの風に心を盗まれる　朱夏
携帯電話目玉飛び出る請求書　一歩
牙丸くなった鬼へは気をゆるす　鉄治
体重計針が油断を許さない　美智子
逃れ来て油断の出来るここが良い　正餇
一票の札にも義理が絡み合う　三千子
一票にあちこちの義理からみつき　正一

義理欠いて手の鳴る方へついていく　さち子
出かかった言葉を飲んだ義理の仲　町子
兎も角もこの場の義理へ空涙　千秀
骨太に生きてきっちり返す義理　和子
黒ネクタイ義理がいっぱいぶら下がる　桂香
年金の財布が義理に攻められる　嘉平
優しいがトゲを含んだ義理の母　義雄

大原川柳社　矢内寿恵子報

パン食の胃が味噌汁をこいしがり　はるみ
手づくりの味噌をほしがる里帰り　昭子
味噌汁がスープにかわる朝の膳　あすなろ
一病に足る程くすり呑んで無事　絹子
農に生き米と野菜で足りている　静子
役割はピエロで足りる七変化　ひでの
物足りる国でモラルが消えてゆく　たず子
一合で足りてもつれが解けはじめ　みさえ
足りている顔とは見えぬブルドッグ　南花
味噌汁の香りで今日の幕があく　敏子
婆ちゃんで用が足りるか留守任せ　こふゆ
騒がしい下界と月があきれてる　巴子
満ち足りた暮しに馴れて愚痴る日々　しず
米足りて農家泣かせの価格です　喜美子
糠味噌の妻で不安はなかったか　悦子
月々のくらしを急かす介護法　妻子
名月へ母の幻追い求め　辰江
情と愛で足りる心の絆糸　玉恵
年金で足りる暮しのつつましさ　みづえ
満ち足りた笑顔えがおの金メダル　あやこ
足るを知る生活に馴れたゴミ袋　はじ芽
月満ちて欠けて人生浮き沈み　寿恵子

南大阪川柳会　吉川寿美報

国債も焼け石になる負債額　雅文
焼け石に水の援助もかすめとり　文秋
焼けぼっくい心に石の焼け残り　章久
焼け石に水と知りつつする援助　なぎさ
石焼いて名物ですと浜料理　修
焼け石が語る原爆地獄絵図　日出子
五枚こはぜ男を頼らずに生きる　信治
子育てをしても子供に頼らない　度
コンビニが近くにあると周旋屋　直子
靴下がどこにあるのか妻の留守　敏子
女一人依存妥協を蹴るルージュ　珠美
葱坊主すっくと依存などしない　幸子
勇気ある決断登頂あきらめる　萬的
沸点を越えた勇気が火の玉に　千里
勇気なく小言の妻に頭下げ　遠野
まっすぐに歩くだけでもいる勇気　重人
振り出しに戻る勇気は持っている　ひさ乃
挑発に負けない自己をしかと持つ　叡子
正直を誉めて叱るのも勇気　洋子
言えますか小さな勇気をありがとう　ひろし
時々は妻のエレキがショートする　志華子
文明開化エレキに江戸っ子目を見張り　柳宏子
わが家では家内がエレキ支配する　のぼる
プラスマイナスエレキの波が喧嘩する　東雲
じっくりとエレキを溜めている時間　正博

抑圧を解くと個性が伸びてくる　たもつ
抑圧に耐えてつかんで今日の椅子　庸佑
焼け石に水説教はほどほどに　柳伸
エレキギター舞台をわかす帰り舟　故勝美
年金に依存している予定表　蛙

川柳塔唐津支部　久保正剣報

気負いなく皆七、八人はあたりまえ　實
天下の嶮 十国峠は霧の中　夕ミ
定位置で子を案じてる囲炉裏端　勝視
曳山に乗り采配を振る勇み肌　輝夫
小さい嘘潤滑油にし夫婦独楽　晴翠
発掘の破片に偲ぶ大社殿　水笑
心配の種を残して電話切れ　高明
五六回言わにゃ届かぬ妻の耳　虹汀
女性パワー嬉し怖ろし新世紀　幸夫
運転手また交代の日本号　四郎
川柳で秋刀魚をゲットした残暑　正剣

川柳ささやま　酒井靖子報

逃げ出せぬ老いが肩からやってくる　恵美
細腕でおいしさ守って来た女　純子
一粒の種の実りを待っている　多美子
追い越せぬ杖へ情けの歩を合わす　美智子
行間のなかにOK添えてある　寿子
OKを出す榾山の亡父の声　とみ子
OKをしてから続く立ち話　つや子
実る秋すべてのいのち満腹す　かほる
流行を追っても老いは似合わない　すず子

思い出はいつまでたっても年とらず　かつ子
追いかけて行きたい足がもつれ出す　君代
味見する湯気の向こうの丸い指　美沙子
よい夢へ続き追うよう眼を閉じる　美緒子
追うものがあって術後の経過よし　毬子
手術室医者のOK信じよう　房江
遮断機が降りて追う人見失う　泰子
夢一つ追う還暦の息が切れ　可住
OKを甘く見過ぎた曲り角　靖子

尼崎いくしま川柳会　春城年代報

言い過ぎもおでんかこんで仲直り　十四郎
おでん屋で今日の残業まだ続く　昭三
数珠置いておでん美味そう寂聴尼　弘治
散歩道またはらはらと散る落葉　愛
人待ちのブランコ落ち葉敷きつめて　東園
精いっぱい務め果して散る落ち葉　千恵
落ちる葉は風の強さを聞き流す　孝一
落ち葉じゅくじゅく行かねばならぬ義理がある　恵子
てのひらで温もり包む母がいる　郁子
てのひらに伝わる孫の手のぬくみ　保夫
手のひらにむかご山盛り頂いて　糸子
思惑がてのひらにある風の向き　歌子
中流を並べて冷やす冷蔵庫　満寿蔵
始めからボタンを掛けた決議案　一笛
またげない月が浮いてる水たまり　武庫坊
若者が戻り明るくなった島　紫香
凶器にはならず鉛筆削り終え　光穂
人情が風に舞ってる御堂筋　志激

てのひらで掬い損ねた夏銀河　芳子
良識はくずれたままの回り椅子　義芳
秋霖や太刀魚の歯の鋭きこと　薫
氷河崩れて十七歳の白い眼光　比ろ志
ゴムを通し終えれば長い夜の果て　年代
選外の絵にも寡黙な自己主張　寛之
目立たぬがここがわたしの居場所です　久子
老い二人自分自分の趣味で生き　節子
秋だから便りが長く長くなる　静
もくせいに誘われチョッと回り道　純
巣を張ってくも真ん中に悪びれず　しづ子

川柳高知　川竹松風報

大型のスーパーよりは近い店　和江
スーパーがもっと近くにほしい老い　佳風
スーパーの味にならされ老いてゆく　良雄
大役をつい引き受けた夜の長さ　酒仙
おだてられ受けた大役胃に重い　愛宏
五十年嫁の大役やっと終え　幸
大役のスターを担ぐ勢子でいる　孝雄
大役を終えて産声聞いている　かよ
大役を終えて安堵の帯をとき　功
嫁もらい娘をやって息をつく　快風
古里に少年の日の虹の橋　典雄
大橋の上から覗く渦の道　てるみ
冠婚葬祭縁を担いだ沈下橋　哲史
石橋をたたいた上の今の妻　美々
海峡を股いで映える橋灯　美紀
沈下橋里の暮らしを知っている　栄珍

二世帯の図面へ架ける虹の橋　三郎

京都塔の会　都倉求芽報

余生など誰の事かと弾む母　てる
補聴器で父が聞いてる祭笛　春蘭
傘寿米寿の中程にいるヤジロベー　ただし
道端の草も稔りの秋となり　美穂
ソロバンをせわしくはじく問屋街　美智子
涙の値段おいくらぐらいにしましょうか　求芽
倍満であがるつもりが振り込んだ　益子
倍増に夢を託した十年前　輝美
草花に愛と手をかけ倍咲かす　宏子
ひたむきに生きて倖せ倍もらう　〆女
クッションの傷みはじめる更年期　英一
クッションが良過ぎて腰が落ち着かぬ　高栄
一気には攻めずクッション置くゆとり　庸佑
秋草をクッションに見る鰯雲　福子
クッションのよすぎる椅子に馴れてくる　典子
世間とのクッション役が要る夫　幸代
手術後のつらさクッションに救われる　満子
家中のクッションだった老母の皺　柳宏子
クッションは最高妻のひざ枕　波留吉
弾むだろうな妻をクッションにしたら　礫
開発と言う殺風景な街になり　吉之助
人間の歴史とロマン生む平野　芳子
黄金の稲穂に落ちてゆく夕日　葉子
風を抱き夢描き平野走り抜け　武庫坊
ちっぽけな悩みと反省する平野　百合子
過ぎし日を思う平野の枯尾花　澄子
大陸の平野に青春捨てて来た　正坊
望郷の視野に平野がよく喋る　友熙
グルメ旅 北の平野は今が旬　諷云児
河内節 太鼓と平野突き抜ける　紫香

川柳塔なら　坊農柳弘報

君となら毒のきのこも試食する　理恵
明日香の風と話して食べる握り飯　輝子
結婚も視野に入れてる職探し　真理子
神棚が待ちわびている合格書　富子
山歩き一番うまいにぎりめし　さと美
弁当は手作り愛の隠し味　美和子
弁当の残りを寄せて母の昼　絹子
私だけ探してほしいかくれんぼ　とし子
弁当のおかず取り換え幼き日　むつみ
人混みに鮭弁当が匂います　季世恵
神様に合わせる顔を作ってる　積子
神頼み今日満願の軽い足　秋泉
ドカ弁と言った時代が懐かしい　水魚
新婚のハート弁当今一度　カズ子
神宿ることを祈っているカルテ　美恵子
駅弁のふたに黒ゴマくらいつき　春蘭
もうひとりの自分を探しに森を出る　茂雄
真実を探してキャベツ剥いでゆく　孝子
公約の皿はしっかり毒見する　國治
薬にもならぬが毒でもない男　聴一
病む人の介護をしたい手弁当　良一
横しまな心神の目に恥じる　眞生夫
朝市で探す私に似合う花　シマ子
母さんのカレー安心して食べる　美代子
親切な毒に回復期がずれる　和夫
一服を盛ってやりたい奴がいる　秋雄
疑えば皿から毒が転げ出る　道子
毒もって制す私の役回り　ダン吉
神様が逃げ出しそうな掌を合わす　卓
暗闇の鍵を探している祈り　美千子

川柳大阪　坊農柳弘報

たてまえを押さえ切れずに口が出る　すがお
正論が暴論に化け戦火生む　叺笑
強引さなければ今の地位もない　照月
あれやこれ手掛けて生んだよい結果　雅巣
強引に後をつがされ泣いている　芳香
強引に多数決とはあんまりや　河南子
生みたての玉子客呼ぶ道の駅　かよこ
強引に押しても引き際心得る　聴一
いちびりがあんな美人を妻にして　利昭
たかが金されど金々罪を生む　川童
背中押す生まれ故郷の風の声　柳昌
強引に説得されて負けました　章久
強引なプロポーズに負けたのは俺　直子
毒舌へ見事なジョークとんで出る　一風
お喋りで発散しますストレスは　美花
いざ人生口は控えめ置いてある　信酔
強引な主張と主張若かった　青道
口滑らしたのは骨のない男　希久志
ころころと十円卵生む暮らし　鉄心
天才を生む鉛筆を削ってる　洛酔

草むらの虫も恋する月の夜　本蔭棒
長生きをしてねと孫が口揃え　敏
敬老日曾孫タコヤキ買ってくれ　三十四
三分でいいから閉じてほしい口　まつお
リストラは断りますと一文字　ダン吉
強引な男がなぜかよくもてる　一歩
すばらしい大地が生んだ大根だ　笑風
割り込んでくるおばさんのでかい尻　金太
聞く耳を持たず墓穴を掘っている　重人
いちびりを舞台に残し蝶が翔ぶ　柳弘

川柳会梨花　石上悦子報

仏様のお小言今日も聴きました　克枝
聴き上手いい娘になった三十すぎた　孔美子
フンフンと聴いて下さりゃもう名医　(石)悦子
ひとりだようと電話かけたい日暮れ時　完司
挫折したこころを癒す男に逢う　睦子
泣けない悲劇笑えぬ喜劇みて帰る　忠良
華やかに贋のダイヤで生きている　美恵子
信頼の崩れる音が心地よい　節子
絵の中の滝の音きくおつなもの　蛙
キニーネの甘さに騙し騙し生き　(殿)和枝
十七の青春畦の吾亦紅　ただし
猫の道ボクもゆっくり歩いてる　一夫
ITに強い顔して舐められる　螢
私は獣花火は大嫌い　和歌子
近すぎて山の高さがわからない　よしえ
やさしさに触れてチェックを忘れそう　きみ子
検診のチェック一年ありがとう　高栄

バッターの癖をビデオでチェックする　(明)かつみ
はねぶとん一枚勇気出して買う　多哥由
緞子より木綿布団でホッとする　重忠
ふとん出てその手でふとん干す日和　求芽
大ぶとんかぶると銀河系宇宙　石花菜
くしゃみして妻がふとんを被る秋　章久
コスモスが咲くとやさしい顔になる　典子
羅漢から僕に似た顔あるはずだ　東雲
新しい顔で職場の華となり　真砂
札束を見ないと出来ぬ良い笑顔　(前)一枝
古里に帰りゃちっとは顔も利く　幸子
顔のない客がつけてたオーデコロン　芳光
顔もええ心もええがよう不貞る　蟹郎

はびきの市民川柳会　徳山みつこ報

大鯨釣り上げました釣り天狗　敏
天狗にも今のはやりの鼻リング　満寿蔵
上には上自慢の鼻をへし折られ　章司
逃げたのも自慢している釣天狗　志洋
胴上げをされた天狗が戻らない　みつこ
十七歳貝になるなとエールする　みよ子
あの世からエール届いた金メダル　久仁子
沿道のエール高まる若い足　明子
声援が歓呼に変わる優勝旗　吐来
熱すぎるエールにつぶれそうになる　重人
宅配に母のエールが添えてある　かつみ
鍵っ子の心が乾く共稼ぎ　昇
鍵っ子で強い個性の子に育ち　一壺
鍵っ子と交換日記で愛を埋め　美喜

鍵っ子の爪にかじった跡がある　一知
鍵っ子が我が家のチャイム押して見る　泰子
老体も終日みっちり収穫期　獏沓
金策に行けばみっちり意見され　たけし
逞しく生きてみっちり稼ぐ足　さとみ
伸びる芽と見抜きみっちり仕込まれる　庸佑
二章目に夢をみっちり書き添える　美代子
年輪をみっちり生きてきた言葉　扶美代
経験がたよりにならぬ世の動き　専平
理屈より指が知ってる物作り　りつえ

西宮北口川柳会　亀岡哲子報

ロビーの隅に小さな恋が落ちていた　比ろ志
ツアー客発ってロビーが広くなる　奮水
不況風会うたび違う名刺くれ　武庫坊
肩書がなくなり気楽な名刺です　求芽
初恋の人の名刺が捨て切れず　江美
肩書の無い名刺出す気楽さよ　トミヱ
こんな事もしてますともう一枚の名刺　千代美
肩書がやっと名刺につきました　哲嗣
肩書が取れて名刺も淋しそう　美代子
信頼の頂点に父座らせる　諷云児
ちんまりと隅に座っている大器　澄子
そば粉練るふとふる里の風座る　富喜子
忙中閑ひょいと座って案が湧き　文
正座した脚へ読経の長いこと　無禄
夕焼けの紅葉を窓に座らせる　晴美
末席に火種を抱いたのが座る　庸佑
回転木馬揺れて倖せ摑めない　たず子

ぐるぐると回る地球に核と住む　靖巳
ぐるぐると回っただけのことはある　房子
生贄にも反対回りする個性　哲男
ぐるぐると輪廻転生今を生き　高栄
天井ぐるぐる苦い虚ろのくり返し　孝一
ぐるぐると亡母の石臼甘い粉　松煙
アカサタナ辞書を引く度うたう母　てる
熱帯魚のような女に迫られる　礫
来る人もなくて文化の日の暮れる　千代
万札で鶴折る程の金ほしや　春蘭
言いわけもせずに静かに散るもみじ　絹子
かあちゃんに感謝をしてもオーイお茶　五月
秋日和ひょっこり母の来る予感　鹿太

かわはら川柳会　上田　俊路報

夜間工事地ひびきの音寝つかれず　登生
雑音にかくれ本音がとどかない　泰良
母さんは音沙汰無しも信じてる　静子
運動会太鼓の音で雨あがる　悦子
静けさの水滴の音歌になる　聴
困っても人には言えぬ胸の内　余吏子
ポイ捨てはマナーの欠如困る日々　一薫
ダイエット喉から手が出困らせる　寿子
見も知らぬ弟が来た遺産分け　俊路

わかあゆ川柳会　松本はるみ報

花時計つぼみのままのストライキ　恵美子
ぽーんぽんなんとのどかな古時計　好栄
美容院でじっくり見てきた週刊誌　ちよえ
裏切らぬ時計がでんと睨んでる　はるみ
新聞の運勢欄が気にかかり　かつ子
ほんとうの事は分らぬ政治欄　聖子
新聞を隅々まで読み腹がたち　博利
スキャンダルぎっしり詰めて週刊誌　清泉
払いのける姿勢で竹は雪を待ち　白汀

城北川柳会　川久保睦子報

あり余る物が不況の波に浮く　求芽
よく動く足の指から穴があく　東雲
未来図に赤が足りない絵の具皿　ただし
どこまでもあしたを守る遠い空　寿美子
少年の狂気の癒ゆる日はいつか　三郎
丁寧に縺れた糸を解く老母　昭子
現実は夢少々を混ぜて生き　あき子
口にこそ出さんが妻もしんどそう　小路
齧られた臑がときどき疼き出す　藤子
やさしさを嫁にもらった今日の幸　登美子
人間の心の奥は悟られぬ　美代子
紫の花にしじみ蝶小さい秋　あい子
人生も漫画のように送れたら　トヨ子
夏の恋グッドバイして海さびれ　一枝
灼熱の季節忘れる虫の声　典子
生きていることが悩みの種である　高栄
疑いを抱かぬ女の白い足袋　白峰
携帯のお金のためにするバイト　あやめ
毛筆の宛名ゆっくり封を切る　順三
実る田を守る案山子もニューモード　志華子
鏡は時に胸の奥まで映し出す　達子
看取るのも看取られるのも世の修業　睦子
腹割って話すととけるわだかまり　朝子
すぐ逢える距離で逢えない日が続く　春蘭
日章旗オリンピックで見直され　倫子
輪になっているのにちゃんとある上座　道子
慰めの言葉にさえも傷がつく　はじめ
やっと雨ほっとした雨きつい雨　とし子
別れの日彩美しい服を着る　久留美
遠くまで見よと親父の肩車　公一

川柳塔まつえ吟社　恒松　叮紅報

故里が調査の度に崩れてる　すみこ
子を信じ調査はしない嫁貰う　煩悩児
すこやかに国勢調査かき終える　知恵子
パン一個身元調査をされている　畔
エリートの疑惑調査の目が光る　房子
極楽を調査に行ったままである　小鹿
黒帯の敵と握手をしてわかれ　螢
ちっぽけな心は見せぬ敵だから　きみ子
結論を出さず別れた敵味方　満江
見くびった化石が敵となる恐さ　日出子
天秤が敵の動きをキャッチする　たけし
八方の敵へ四隅の鬼瓦　草丘
人情もここらで限度攻めに出る　義良
松茸を食べた食べぬと競わない　多賀子
産卵を競う悲しい鮭の性　太泡
兎にも亀にもなって競ってる　きみえ
競うこと多し社宅に住んでいる　博子
競い合う貌は素顔かも知れぬ　早苗

カウンターペットみたいな女性連れ　(安)幸子
人よりもきちんと食事とるペット　久枝
ストレスが溜まってペット医者通い　桂子
口驕り猫も鰯に横を向く　政子
ペットにも良い子悪い子普通の子　与根一
妻よりもペットが先にお出迎え　智恵子
警官役おもちゃの手帳ちらと見せ　茂美
秘密など持たぬ手帳の予定表　静恵
頑固者老人手帳仕舞い込む　淞丘
本当の秘密は手帳白のまま　紫晃
趣味多忙手帳に書いた会と金　注湖
もう一人欲しいと思う母子手帳　叮紅

川柳塔わかやま吟社　牛尾緑良報

次の日の虹をみたさに生きている　富美子
この次の波へあなたと賭けてみる　佐代子
悪友に逢いたい次で途中下車　英子
次々と重ねた嘘に猿芝居　紡
宿命の出会い次回へ賭けてみる　寿子
乞うご期待クライマックス次号です　三男
鬼からの誘いが掛かる獣道　高夫
不器用で楽な道など知らぬ蟻　優子
肝心な道ご先祖を忘れない　豊太
バージンロード父最高の笑顔みせ　稚代
譲れない道でジャンケンしてしまう　大輪
喜びも苦悩も抱いて母の道　泰子
近道は父が塞いで通せんぼ　呑天
定年後ゆっくり歩く道がある　和重
ぼちぼちと春の企画を練る冬芽　(榎)公子
女の荷ぼちぼち降ろし傘たたむ　さち子
コーヒーが冷めたぼちぼち切り出そう　桂香
ぼちぼちと地球病みだす核の事故　鉄治
煩悩をぼちぼち整理したい歳　千寿子
ぼちぼちと折れて治める癖が付き　和子
ぼちぼちの根気が先に着いていた　正博
ぼちぼちとＩＴイロハ覚えよう　勝康
ぼちぼちと老いが足から攻めて来る　清史
レオタード女も強くなりました　保州
お先祖もお目めパチクリレオタード　美子
レオタード着てもう一度翔ぶつもり　精子
レオタード姿の妻を笑えない　三喜夫
サッチーも女ですよとレオタード　健三郎
焦点をどこに当てるかレオタード　紀美女
レオタード姿が様にならぬ腹　あき子

尼崎尾浜川柳会　田辺鹿太報

越せるかも知れぬ流れに乗ったなら　幸子
会心の作を独りで練っている　江美
会心の笑みをこらえている碁盤　鹿太
愛されるネコは律義に返事する　尚利
手抜きした息子がはまる麻薬ぐせ　亀与子
満足じゃないがテレビで紅葉狩　イサミ
もみじ葉の六手みつけりゃ運掴む　哲嗣
幾度か修羅場を越えて度胸出来　まさ
満山の紅葉バックに車椅子　弘治
目標値やっと越えたか棒グラフ　夢之助
いい顔で母に見せてる通信簿　正治
ＩＴに老いの歩幅が追いつかず　満寿蔵
紅葉に仄かに偲ぶ逝った友　十四郎
丹精に応える花が競い咲く　柳宏子
どこやらで虫が鳴いてる寺の庭　紫香

倉吉川柳会　松本よしえ報

不要品廃棄の前に礼を言う　常代
天井を見る人生で学んだよ　天雀
八十路すぎ学ぶ心がまだぼけぬ　志郎
大バーゲン不要の品まで買い求め　小生
子が学ぶ親であったかやがて冬　照彦
カルチャーがある本堂の鐘が鳴る　螢
見栄の手が不要な壺の高価買う　和枝
カタカナ語辞書に無いのは孫に聞く　よしえ
尼寺の藪で迷うた冬ほたる　雄々
笑顔から今日一日を始めるか　和男
なつかしい不要になった社長印　重忠
ぶつぶつは言うが笑って誤魔化した　季芳
評論家泣いた笑った飯のたね　玲坊
子の着てた不要の服が捨てられぬ　ちよ子
道草を食って世間を学んでる　賀寿恵
涙出る程笑ってみたい淋しい日　みち子
無学な父に鍬一筋の汗がある　ゆり子
笑われているのも知らず笑ってる　康子
リストラで私不要の渦の中　秋草
不要品ではない足も口もある　芳光
ニュータウン鎮守の森も藪もない　石花菜
嫁ぐ日に笑い上戸が泣いている　悠子
勲章に負けず笑顔が光ってる　紀美子
利口ぶり藪から蛇を出しました　久子

逃げ込んだ藪で蝮と鉢合せ　博　丈
不要品アイディア次第貴重品　日出子
死ぬまでに学び閻魔の手土産に　都　子
村雀藪がなくてもよく喋る　(前)喜美子
大臣がニヤニヤ笑う世紀末　次　男
正月の寄せ植え飾る藪柑子　泰　輔

川柳ふうもん吟社　杉本　孝男報

野暮ったい奴だが芯に愛がある　洋　々
苦労など知らない顔で菊香る　圭一郎
自分史のどこを開けても生臭い　鬼　桜
野暮天と高をくくっていた油断　健　一
精いっぱいの反抗ページ真っ白け　美恵子
城山に太鼓のばちが冴え渡り　はつ江
老人のストレス癒すペンを練る　志げ緒
無党派の恐さわからぬ永田町　茶　人
一ページ破ったあとがきなくさい　一　瑶
句の道へいつもアンテナピンと張る　益　子
善い顔の姑はこっそり愚痴捨てる　春　名
虫一つ付かぬと言うも野暮ですね　一　京
終章のページまだまだ先でいい　昌　鼓
気休めもお世辞も言わぬ野暮な人　寿　子
幸せを覗いて帰る独り居り　日の出
余命表こっそり見せて下さいな　雅　女
死ぬる生きると騒いで見せる姑といる　茂登子
こっそりと覗く野心に身が竦む　輪多朗
どんでん返しあるを信じてページ繰る　敦　子
自分史のページめくって懐かしい　孝　明
天高く血圧計も真似しそう　行　男
けちで貯め喧嘩の種を蒔いて逝き　喬　水
こっそりと帳尻合わせしっぽ出す　信　子
空白のページ失意の日を語る　静　香
また明日へ野暮な男も夢を見る　康　博
ライバルの野暮な姿に気を許す　金　祥
落選のダルマこっそり目を開ける　忠　良
自叙伝は母のページで埋まってる　蟹　郎
その昔赤紙の来た日記あり　天　翔
一生一句新たなページ残したい　孝　男

はまゆう川柳会　中後　清史報

事故現場ルール違反をなじり合い　すみれ
和を保つ母のルールにある温み　太　一
ルールブック先ず若者に読ませたい　雄　造
ルールだときびしい顔でそりかえり　さだ代
スポーツのルールは孫に教えられ　苗　子
母が逝き父娘(おやこ)二人のルールでき　純　子
猪に畑のルール教えたい　泰　作
忠実にルール守って混雑す　登
焼香に憶う思いの列しずか　生米子
行列にとにかく並ぶくせがあり　国　彰
一列に並んで買ったパン一個　サト美
行列が続く涙の渦の中　佳　子
整列もくの字に曲がる新入生　平　和
行列の孫を見つけた秋祭り　美佐子
葬列のしんがりを飛ぶ秋の蝶　修　也
ロボットにリストラされた作業服　てる坊
ロボットでないけど妻の思うまま　利ぼん
アイドルのロボットあればデートする　悦　子
ロボットに耐えてつかんだ母の幸　恵美子
無重力ロボットアームの腕試し　光

翠洋会　児玉　蛙報

お茶一杯飲んだが縁で四十年　蕉　子
愛憎のジレンマ夜毎闇を這う　富　子
母の呆け子のジレンマを露知らず　靖　巳
たっぷりの愛におぼれる十七歳　絹　子
この年だジレンマ抱かず楽にいこ　照　子
たっぷりの愛情あれば子はそれず　叡　子
遺すほど無いから遺書に悩まない　尚　士
ジレンマが隅に居座る日記帖　澄　子
片想いポケットに悩み入れてある　蛙
ジレンマを受けとめている胃の痛み　真理子
言いすぎてお茶をにごして逃げている　志華子
親も子も悩みないのかマンガ読み　千　梢
ジレンマに追い打ちかけるスキャンダル　久　峰
財布にはたっぷりあるが寝たきりで　東　雲
悩み聞く方も悩みかかえてる　義
此の年齢で女難の相と言う悩み　恭　昌
ジレンマに落ちて進路決めかねる　会　美
スニーカー森林浴をたっぷりと　春
風呂の湯をたっぷり満たす誕生日　さと美
口出しをしたばっかりに板ばさみ　日の出
たっぷりと贅肉つけた家の嫁　舞　夢
無農薬野菜たっぷり食べ元気　伽　羅
僕の悩みほぐしてくれる膝まくら　喜美子
悩むのはお止しなさいと秋の空　千枝子
まあいいやいいやで消してゆく悩み　正　雄

父と子のどちら立てても納まらず　正坊

いずも川柳会　佐藤治代報

絵手紙に近況そえる一行詩　与根一
絵手紙の西瓜に南瓜の返事書く　草丘
絵手紙の似顔絵母はまだ元気　茂美
絵手紙もインターネットで行く五輪　義良
絵手紙の中から笑い声がする　久子
待つ人が居て絵手紙が欠かせない　ちえ
コスモスを添えた絵手紙海を越え　文子
一筋の閃光冬の知らせかも　玲子
一筋の藁への思いまだ続く　あきら
一筋に赤みを増した唐辛子　陽子
一筋の光に集うボランティア　幸
一筋に回り続ける風車　花梨
一筋の道にもあった曲り角　おしえ
一筋に生きたレールも錆びてくる　きみえ
喝采はないが一筋道を行く　青湖
途中から口出し議事の腰を折る　まこと
途中から抜けて二人の恋進む　房子
気紛れな風に出合って途中下車　多賀子
途中から現実主義になった愛　ちかし
途中から家族になった嫁の箸　昌枝
途中から目を離されて迷い出す　多喜
自分史の途中にあった水たまり　桂子
良い事も悪い事もある途中　れいじ
風車 風を辿ればかぜになる　治代
この道を辿るしかない風の駅　畔
ぬくもりがまだある人に辿りつく　美江子

足跡を辿って足跡を残す　彬
行間を辿れば意地が埋めてある　すみ子
とぼとぼと辿りつまずく男の歩　早苗
辿りつくまではお寺の世話をする　章峰

横浜あおば川柳会　清水潮華報

新米を鱈腹たべて平和です　三郎
新入りがかくした涙拭くこぶし　八重子
一言もなくて終った形見分け　絹子
順調にレールを走る七光り　広和
祝日を作る決議はもめもせず　純子
新人賞それから先に厳しい目　サト子
おめでたくそして悲しい白ですね　早智
長旅をいいよと夫すぐ許し　省子
新米に完封されるプロ野球　雅子
刷毛先に古代のロマン求め掘る　ふみ
新米のガイドに和むバスツアー　街湖
引き止めを期待の辞表受理される　亜希子
すんなりと席譲られてショック受け　為佐子
真っ白な紙に書く字は愛にする　かづ子
第二子はすんなり生れ間にあわず　裕峰
人生の余白楽しい夢抱く　道子
新米とラベルに書いてある旨味　かず枝
難題も女将手なれた受け答え　和可
車庫入れもすんなり妻の顔に笑み　二郎
頭だけ隠して孫を待っている　鈴美
すんなりと合格うれし神忘れ　喜信
言い訳の言葉を探す終電車　笑子
新米に差をつけられた棒グラフ　政勝

突破口さがす苦しい試算表　潮華
屑籠の中にまさかがでんと居る　満秋

川柳塔きゃらぼく　政岡日枝子報

こだわりをもってピースを吸っている　日枝子
旅二日都心ホテルで見るネオン　瑞枝
渡る世間の鬼にもちょっと花をあげ　やえ
震度7テーブルの下バナナ喰う　寿々子
長い道時には石に化けてきた　千春
男一匹真っ正直に生きて悔い　繭
角度変えてときに物事観つめよう　なみ
一行の重みしみじみ灯を探す　てい子
美術展ゆっくり皺がのびて来る　春枝
大山が見えない朝も手を合わす　ふみ
おんな一匹平均までは生きたいな　恵子
人並の被害を受けて生き易し　千代
ねり絹一疋行李の中で虫の息　玲子
わたしの秋精一杯に咲きほこり　八重子
大きな賭けにみんなわいわい騒ぎだす　亜弥
老いの足動く時代に追いつけず　晶子

川柳クラブわたの花　大内朝子報

結論の出ない迷いに寒北斗　民子
金星を狙う気魄の塩を撒く　明
料亭の料理器も食べさせる　八寿子
大器だと信じてるのは親ばかり　宏
灰皿を満杯にする物思い　剛治
マイペース下手なてっぽう撃っている　ミツ子
男の子小犬拾って思案顔　道子

棟梁の頑固古寺蘇る　君枝
調理器が増えて包丁忘れられ　春子
靴の紐結び直して二度の職　一風
老いるほどピンクの色に憧れる　幸枝
十七の器はみでた少年よ　隆盛
頑固程世渡り下手で正直だ　美千子
ついつられ買うてしもうた叩き売り　恭一
どん底に沈んで分かる世の情け　奈良司
あの夫婦頑固我慢のバランスで　友甫
頑固さを丸う包んで生きている　正純
千を折る鶴へ悲願のいのち乞い　朝子
オモチャ屋で座りこんでる根くらべ　一道
早よ出ておいで指折りかぞえ我が子待つ　賢子
輪島のお椀秋を浮かべて舌つづみ　ますみ
銀食器の慣れ三代目に伝え　トシエ
小柄だが器親よりでかそうだ　まさと
嘘でしょうあんたの小鼻動いてる　いつふみ
通りこしそとひき返す焼藷屋　春江
還暦にピンクでお洒落した夢を　知佐子
甘酒で目元ピンクにされる僕　美代子

川柳若葉の会　宮崎シマ子報

上層は煙って正体現わさぬ　あずき
うっかりと煙は出さぬダイオキシン　慶子
煙もれだした私の玉手箱　喜美子
けむってるとこが夫の泣きどころ　シマ子
亡母の声聞いた気がする霧の中　アキ
天声にすくむことあり脂汗　欣史子
秋天に何んにも迷うことはない　能子

天の声信じて人は平和惚け　香住
竹踏んで老いも新世紀に備え　弘直
よい響き夫婦茶碗の藍の色　清芳

川柳藤井寺　高田美代子報

渡り鳥引っ越し通知出しておく　かつみ
茹玉子よ親は焼き鳥になった　美代子
籠の鳥許容範囲で飛んでみる　千里
人間がボクを害鳥だと決める　扶美代
おしゃべりスズメの舌を神よ召し上げよ　一筒
絵のような夕焼け空をゆくからす　絹歌
赤い実は赤い小鳥が来て食べる　シマ子
ツバメにも方向音痴いるらしい　六点
国境があるとは知らぬ渡り鳥　重人
思い出にいつも母あり栗の飯　春蘭
秋風と踊っているよ彼岸花　恒雄
補聴器に飛び込んできた秋の音　花梢
職人の鋏が庭に秋を呼ぶ　一知
吊革の揺れがエリート慰める　桂子
兄弟にエリートがいる不仕合わせ　婦美枝
お受験の先は東大かも知れぬ　悦子
エリートが居眠りしてる会議室　利武
エリートの目線は下を見てくれず　喜代子
エリートも家に帰れば葱刻む　栄一
エリートを目標にした母の鞭　雅代
エリートの自負が許さぬ助け船　史郎
なんやかや言うても東大卒らしい　葉
訃報欄エリートばっかり載せてある　龍一
エリートの命を取った挫折感　修六
エリートの母は田舎に独りいる　アキ
エリートに疲れた仮面干してある　鐘造
エリートの切符は塾へ買いに行く　和樹
大和路の秋を集めに行くカメラ　マサ子
美しい声で冷たい事を言う　志洋
コスモスの上品さには叶わない　瑠美子

岩美川柳会　石谷美恵子報

真珠抱く貝になりたい親である　大漁
反応を確かめ合って恋進む　単車
文字を読む喜び知ったランドセル　公乃
反応はないがせっせと通い詰め　一京
反応を見たくて胡蝶蘭を買う　忠良
日本がひっくりかえる遺跡文字　蟹郎
やさしさに触れると貝は胸開き　一瑶
ありがとう忘れた愚かもの同士　螢
愚かではなかった咲いて匂う花　孝男
風邪薬人の反応聞いて飲む　一夫
恋終り反応もない日が続く　睦子
雨あがり土を握りしめている　和歌子
反応はいま少しです菊百花　きみ子
階段と妻は反応してくれる　冬二
愚か者鶴の足より瘦せたがる　季芳
白黒をつけぬ愚か者たちだ　かつみ
カラオケの軍歌ほろほろ戦友しのぶ　徹
愚かでもそれぞれくせが直らない　寛
貝になる妻を喋らす策を練る　喬水
貝になるつもりの席でまた喋る　節子
磯の香を五体に満たすい貝汁　裕子

一粒の米に夢抱く愚かさよ　多哥由
ほろほろと栗に甘藷も意地を出す　たぬ
反応の時間が長い草木染め　希久代
抱いた子をゆっくり肥やす貝の意地　静生
反応を確かめながら値上げする　圭一郎
焼きいもがほろほろ無防備な女　美恵子

川柳塔打吹　米田幸子報

松茸の季節が来ると亡母思う　セツ子
濁り水流れ流れて清く澄み　久芽代
濁った世一拭きしたい秋の空　善江
ハンサムを餌に魚を釣っている　龍枝
ハンサムなパパ画いている一年生　やえ
あれこれと迷う心の目が濁る　重忠
口濁す心の底に嘘が見え　禎元
ハンサムでならし老いれば只の爺　芙美子
ハンサムでないので貴方好きでした　貴恵
内臓と脳天濁り医者通い　順子
お湯割りの焼酎うまい秋の月　しろう
鼻濁音結び目固く京なまり　和枝
水割りの氷も溶けぬ秋の夜　よしえ
葬式の茶碗を割ってお詫びする　睦子
キリギリスお前も秋は淋しいか　克枝
体力も気力落ちても口達者　孝恵
濁り酒飲んだ戦後のものがたり　かつみ
ハンサムは十六羅漢にはいない　石花菜
濁るだけにごして今日も永田町　宗光
天地人濁らす雲を追い払う　螢
おもいきり割れて宿した赤い花　和歌子
田舎では今でも薪を割る男　一夫
何事もなかったように卵割る　芳光
足して二で割ればなんとかなるだろう　雄々
秋の蚊に野心なさそう見逃した　玲子
濁り酒遥かなつかし闇の味　定明
若者がみなハンサムに見えてきた　玲泉
濁らない水にはわけがありそうだ　玲坊
ハンサムに一寸触れたら火傷した　節子
濁らせてならぬ生命の水溜り　幸子

うぶみ川柳会　上田宣子報

泰山がうっかり上げた灰神楽　也恵
地を掘ってゆく根のはなし樹のはなし　諷人
雨のち晴れうっかり者の傘にされ　薬士人
掘り下げて聞くとどちらもボロが出る　ユリ子
うっかりと会費忘れてのんでいる　一夫
お喋りとうっかりいつも角力取る　黙光
生きている声をたよりに掘り進む　華子
樹木医の打診古木の苦悩聴く　静生
よろこびの水が湧くまで井戸を掘る　健一
打診すみ空がこんなに青いとは　一枝
おはようとナース打診をする笑顔　良男
泥舟と知らずうっかり乗りかける　天人
秀才と遠い毛並に甘んじる　ひろこ
要介護この身を打診する立場　螢
毛筆の流れうっとり飽きさせぬ　あづま
抜けるならそれもよかろう頭の毛　天雀
一本の髪毛で白を切りそこね　芳江
愛を編む残り毛糸のあるかぎり　登美枝
ボケ始めうっかりミスが目立ち出す　くにお
一枚の葉書小さな秋を掘る　宣子

豊中もくせい川柳会　田中正坊報

シックな装い黙っておれば地は出ない　寿美子
ファッションショーシック装う老いの顔　知香子
幸せな人が育てた菊だろう　喜美子
小銃の菊の御紋を削った日　正坊
菊香る仏間を通る隙間風　一笛
枚方にずっと戸籍のある菊師　しげお
菊自慢　菊の話をして別れ　紫香
カルチャーで土から習う菊作り　庸佑
仏にと菊取り合わせ切ってくれ　英子
石垣にへばりついても咲いた菊　ただし
狭くてもお尻で広げ座ります　見清
狭くても日本一の城がある　重人
名刺折るちょっと格好よかったに　禄骨
ガタついた入れ歯ファイトを鈍らせる　萬的
立場かえるとお前も同じことをする　柳宏子
太陽の真下に穴掘るヘルメット　〆女
鬼よりもきつい小言を言う仏　靖巳

堺川柳会　河内月子報

足りている所も念の釘を打ち　つづや
図書館でわたしの足りぬもの探す　美子
歳きいて個人タクシー恐くなる　勇太
衣食住足り少年は旅に出る　なぎさ
好き同士黙っていても通じ合う　舞夢
弱いから弱者の方に味方する　日の出

梅干を去年と同じ顔で漬け　文
幸せはきのうと同じ水の音　みつこ
快調な人の弱音を聞かされる　錦
笑っても泣いても同じ地に還る　さくら
傘寿すぎますます元気菓子作り　紫
優しさが少し足りない赤いバラ　アキ
威を借りて歩く背中に陰がある　昭子
牙むいた野犬も満ちて眠くなり　りつえ
弱点を晒して案を練り直す　小雪
弱点があるから人に味が出る　美波
同じでも中身が違う白い壺　泰子
同じもの食べて胃薬飲んでいる　千代
現役がすんでもローン残ってる　東雲
現役が一年延びて靴を買い　梓
現役を退くと人間丸くなり　玄也
現役を引いて茶の味分かりかけ　健吾
死ぬ迄は現役だろう鉋研ぐ　朋月
なにもかも足りているのによく怒る　月子
暑さには弱く寒さも身にしみる　伽羅
ばりばりの現役ですよ台所　冬虹
運勢はほぼライバルと同じです　扶美子
二〇〇一年日本が変わりそうにない　美代子

川柳塔みちのく　小寺　花峯報

豊作の安値に減反しろという　凡々子
どん尻に宝刀を抜く父がいる　きよし
遮断機の向こうに青い鳥が居る　大吾
ため息で加湿している子ども部屋　紅雨
遠い祖先が癒しの唄を口ずさむ　ヒサ子

乗り遅れた残念事故を免れる　順風
サクラチルしばらくそっとしておこう　慕情
ちからある男傍観者に仕向け　銀波
残念と思っているのは一人だけ　ふさゑ
俺よりも先に逝くなと言った筈　愁女
木挽唄ちちの背中が点りだす　ツネ
三味線の音にふる里思い出し　井蛙
風の盆胡弓はひと夜しのび泣く　黙人
残念の姿勢黙って腰かける　千加子
駅伝の県勢夢見るゴボウ抜き　隆樹
神棚へ一字違いの宝くじ　花峯
ばば抜きの彼に花嫁飛んで来る　一花
人間のエゴにいらいらする地球　劦
落人の涙がさわぐ佐渡情話　五楽庵

ほたる川柳同好会　田辺正三郎報

鼻の差はくやしいけれど誇らしい　保子
女房の鼻歌聞こえひと安心　正安
もう少し鼻高ければという鏡　蛍柳
出番待つトナカイ赤い鼻みがく　久子
くじ引きは鼻の脂をちょっとつけ　まみ子
わたくしの鼻で歴史は変らない　実
鼻がきくごちそうの時フラリ来る　契子
目も耳も悪いが祖母は鼻がきく　いさむ
弱点を知られてからの妥協癖　桂子
足るを知り今日の暮しに叩く鐘　ただし
恋を知りときめき燃えてそして秋　正三郎
知る迄は安泰だった活断層　雪子
開票に超大国の恥部を知る　柳童

あけましておめでとうございます
賀状に代えさせて頂きます

三馬力こころ配りも新世紀

中原諷人・みさ子・汲香
〔トリオ・サン・フィレッチェ〕

〒689-0405 鳥取県気高郡鹿野町鹿野一三七九
川柳塔鹿野みか月事務所

同郷と知ってお互い国訛り　見清
知らなけりゃ悩まなくてもすむ未来　禄骨
知ってるが波風立てぬ呆けた振り　千里志
知る権利知られぬ権利上回る　信男
知ったふりして生涯の傷となる　黒兎
あきらめをまたも重ねて老い静か　直次
あきらめが良すぎて何も掴めない　昭子
あきらめが愛のほころびつぎ合わす　喜美子
あきらめとほのかな望み交差する　祥風
妻だけの拍手あきらめ持たず生き　よしろう
あきらめが静かに溶けている秋雨　セツ子
数えたらあきらめと恋差はひとつ　勝
もつれた糸切らずにほぐす秋日和　馬洗
平成の親子の糸は細くなり　やすし
赤い糸結んで今はぬれ落葉　長一

私の旅行ノート

閑人閑話

田中正坊

旅行（ツアー）と一口に言っても、行先・目的・形態によってさまざまである。まず、行先については、大きく分けて国内と海外がある。目的はビジネスと観光、そして観光にはグルメ・ショッピングと多様である。形態と言うかスタイルに関しては、個人と団体があり、団体には会社や特定の集団によるものと旅行社が行うパックツアーがある。

国内旅行について私の「旅行ノート」を繙いてみると、その行先は北は北海道から南は沖縄まで、ほとんど全国に及んでいる。これまでに一度も足を踏み入れていないのは、秋田・新潟・福島・群馬の四県だけである。二十代から今日まで五十年以上のキャリアだから、決して多すぎることはない。海外旅行は五十代後半から始めたので、これまでに遠近とりまぜて十六回、アジア・ヨーロッパ・アメリカの約二十か国を訪れたにすぎない。いわゆる五大陸のうち、アフリカ・オーストラリアには全く足が伸びていない。

旅行の目的は、まず商用・調査などを含むビジネスがあるが、私の場合はあまり関係がない。ただ全日本川柳協会などの全国組織の団体が年次大会（総会）を開くときは、会場を各県持ち回りにすることが多く、私がその団体の役員であったり、取材の対象とするため出掛けることが少なくなかった。私の旅行の行先が多くの府県にまたがっているのは、こういうことにもよる。

ただしこうした大会では、開催地付近の観光が日程に組み込まれていたり、自由行動で名所・旧跡に足を伸ばすことが多く、その意味では観光を兼ねているとも言えよう。そして純然たる観光旅行の場合、日本ではグルメやショッピングに重点をおくことが多いが、欧米では五〇パーセント以上が歴史や文化に関心を示し、カルチャー・ツーリズムという言葉さえある。私も旅先では時間の許すかぎり、その土地の博物館や美術館を訪れることにしている。

旅行は現在、国内・海外ともパックツアーが全盛で、各旅行社がしのぎを削っている。自分で行先・日程を決めて参加者を募り、乗物・宿舎の予約を代行させる〝手配旅行〟もあるが、電話一本で申込み、敷かれたレールに乗るだけのツアーが圧倒的に多い。その中味も安価本位のものから、航空機・ホテルをグレードアップし、行先・日程にも工夫をこらした高級なツアーもある。私の場合も、これまで海外はほとんどパックツアーに頼ってきたが、利用にあたっては必ず複数の旅行社の案内を取り寄せて検討することにしている。

いずれにしても旅行するについては、事前にガイドブックを読んでその土地の情報を収集することが大事だが、司馬遼太郎の『街道をゆく』シリーズには、作家が実地に歩いて見聞したことがまとめられており、海外では韓国・中国・モンゴル・スペイン・オランダとアイルランドがあって、重宝している。また、イタリアについては、塩野七生の『海の都の物語』『ローマ人の物語』などがある。

どうやらまとまりが付かぬうちに終わりそうだが、やはり旅行というものは、地図と時刻表と資料を準備して計画し、個人あるいは同好の士と出掛けるのが本来の姿ではないかと思う。たとえばJRの「青春18切符」などを利用して、ゆっくりじっくりと各地を回るのが最も望ましいと思いながらも、まだ実行できないでいる。これで読書・映画・旅行のノート〝三部作〟を閉じることにする。

柳界展望

★第27回堺まつり協賛、秋の誌上大会は203名の参加により締切られ、本社同人関係の秀句は次のとおり

二〇〇一年日本が変わりそうにない　高田美代子
なにもかも足りているのによく怒る　河内　月子
米櫃の底を気にしたことがない　門谷たず子
現役の自信ローンを甘く見る　清水　潮華
現役のままで桜は散りました　山本希久子
弱りゆく母の歩幅で萩の道　清水　玲子
にんげんの弱さ知ってるコマーシャル　松本よしえ

★第28回東大阪市民川柳大会は、**10月29日**89人の参加により市立教育センターで開催された。本社関係同人の受賞者は次のとおり。

東大阪市教育委員長賞
　百歳へ挑戦をするスニーカー　高田美代子

★第10回枚方市民川柳大会は**10月29日**、枚方公園青少年センターで110名の出席により開催された。本社関係秀句は次のとおり。

　感性を磨き視界が広くなる　栗田　久子

★川柳人協会平成12年川柳文化祭は、189名の参加により**11月3日**東京都千代田区総評会館で開催された。当日、同人の播本充子さんは総合点の五位を獲得。

優秀賞
　没頭の男が視野におく散華　ほか　播本　充子

★第23回神戸川柳大会は、**11月3日**兵庫県民会館で開催され、本社関係特選は次のとおり

　塩壺に塩を補うのも掟　池　森子
　一瞬を切り取る例外の視野で　池　森子

★相生もみじまつりは**11月5日**相生市総合福祉会館で115人の参加により開催された。本社関係受賞者は次のとおり。

　傘開く今日の幸せ囲うよう　山本　義子
　明日開くばらの蕾もわたくしも　西口いわゑ
　過去の絵を開けばそこに炎のページ　山本　玉恵

★第47回八尾市川柳大会は**11月5日**、八尾市文化会館で、84名の参加により開催された。本社関係受賞者は次のとおり。

秀句
　恥をかく度に大きくなる器　生嶋ますみ

★第21回鹿野みか月川柳大会は、**11月19日**鳥取県鹿野町営「山紫苑」で開催された。参加者は206名（投句者を含む）で、当日の本社関係受賞者は次のとおり

鹿野町長杯
　勝者にも敗者にもある腕二本　牛尾　緑良
鹿野町議会議長杯
　いい今を刈り取って来て冬仕度　奥谷　彩子
鹿野町教育長杯

第62回 大阪川柳の会

日時―**2月2日**(金)17時開場　**会場**―サンケイビル本館3F322号室　**題と選者**―△誘う・住田英比古選△森・井床芦蘭選△ひらく・高田美代子選△生きる・礒野いさむ選
各題2句　席題なし　**会費**―千円　18時締切

新同人紹介

清川玲子（きよかわれいこ）
―あきら・坊太郎・天笑・楓楽推薦

穴吹尚士（あなぶきひさし）
―諷云児・靖巳・周信推薦

滝井勝（たきいまさる）
―あきら・放任・坊太郎・天笑・楓楽推薦

風が止むまでまあるくなっておく　小島　蘭幸

㈱山陰合銀鹿野支店長賞

雪はふるふるわたしを純にしてくれる　八木千代

川柳塔みか月会長賞

卒寿坂のぼれば広い海になる　乾　喜与志

川柳塔みか月賞

精魂はつきた未完の絵が呻く　最上　和枝

訃　報

■高杉鬼遊氏（本社相談役・八尾市）は12月7日病気の為死去。81歳。告別式は9日、八光殿でとり行われ、柳人多数がお見送りした。

■大坂形水氏（本社相談役・大阪市）は12月11日病気の為死去。93歳。告別式は14日、本傳寺で㈱オーエスケー社葬として盛大にとり行われた。

ジゲ起こし推奨知事訪問記念杯　乾　隆風

雑詠（誌上発表分）の天

折々の花植えて子に譲る道　さえきやえ

★川柳塔きゃらぼく主催の林荒介さんを偲ぶ会は、**11月12日**、米子てんまやホールにて115名の参加により開催された。川柳塔同人の秀句（三才）は次の通り。

大山の雲わく嶺にいる仏　上田　宣子

二礼二拍とても大きなおねだりだ　徳田ひろこ

水汲んでやれば萎れ菜にもいのち　中原　諷人

人を遠ざけ菜園の王となる　新家　完司

★おんさい川柳まつり（岐阜県恵那郡大正村）で**11月19日**開催された。参加者130名（投句を含む）で本社関係受賞者は次のとおり。

特選

村長の耳村人へ長くなり　片岡智恵子

★第22回出雲市川柳大会は**11月23日**ビッグハート出雲で120名（投句を含む）の参加により開催された。当日の本社関係受賞者は次のとおり。

出雲市教育長賞

父ちゃんは柱で母は梁でした　森　茂美

★第52回大阪文化祭川柳大会は、**11月25日**北区民センターで132名の出席により開催された。本社関係者の秀句は次のとおり。

ジャンケンポンかわりばんこにする介護　高田美代子

どんな時代でも明日を信じている蕾　出口セツ子

吊り橋の真ん中辺にある宇宙　前　たもつ

アメリカの優しさだろう基地がある　高須賀金太

人間の顔をしているから怖い　徳山みつこ

★兵庫ふれあい祭典川柳祭は、**11月26日**西脇市民会館で事前投句一般540句、ジュニア363句の中から入賞句が発表された。本社関係者は次のとおり。

白紙委任神を信じていいですか　安平次弘道

21世紀へたしかな音でノックする　岸　桂子

★松川杜的追悼併杜的・芳子句集『いのち』発刊記念句会は、**11月27日**かんぽーる京都で52名の参加により開催された。当日の本社同人天の句は次のとおり。

杜の木が倒れからすが鳴き止まぬ　西口いわゑ

人情を旅の記念に持ち帰る　川島諷云児

歳事記を秋の部に代え旅かばん　長谷川春蘭

風情にはとけ込めぬまま貴賓席　西田柳宏子

▽人事往来△

■第15回国民文化祭は、大竹市で開催され（P142参照）本社の川島諷云児参与と奥田みつ子常任理事が選者をつとめた。

■橘高薫風名誉主幹は11月12日「荒介さんを偲ぶ会」に出席のため米子市行。当日は紫香相談役、岳人理事長、たもつ副理事長ほか大勢が関西から参加。名誉主幹は翌13日、路郎・葭乃先生句碑建立打合せのため、西村梨里さんと尾道行。11月19日は鹿野みか月川柳大会に出席のため鹿野町行。

■鵜かご川柳社（佐藤一粒主宰）の、おんさい川柳まつり（11月19日）に楓楽副理事長は選者のため岐阜県恵那郡日本大正村へ。岳人理事長他六名が参加。

国民文化祭・ひろしま2000開催

第15回国民文化祭・ひろしま2000文芸祭川柳大会は、11月4日大竹市の大竹会館講堂（アゼリアホール）で開かれた。事前投句者は一般3039名、小中学生3660名、当日参加者は823名。大会各賞は次のとおりで、本社関係は同人の土橋螢、徳岡本丸氏が受賞した。

なお以下の12賞の選考対象となる各題3句の特選には、先の二氏のほかに西原艶子、田中亜弥、岸本宏章氏が選ばれた。

◎一般の部

文部大臣奨励賞

実印を押しても和紙は妥協せず　青森　京武　悠治

国民文化祭実行委員会会長賞

生まれるともう青空を探してる　滋賀　小梶　忠雄

広島県知事賞

一期一会で終りたくない旅みやげ　愛媛　月原つくし

広島県議会議長賞

森にいるような気がする父の部屋　鳥取　門脇かずお

第15回国民文化祭広島県実行委員会会長賞

友だちを誉めて世間を広くする　鳥取　土橋　螢

広島県教育委員会賞

にっこりの顔に国境線は無い　大阪　河合　時弘

大竹市長賞

酌ぎにくる派閥のちがう膝がしら　大阪　津田　一江

大竹市議会議長賞

天と地の元気もらって今日がある　広島　正畑　半覚

第15回国民文化祭大竹市実行委員会会長賞

晩学の辞書から広い海を知る　広島　山本　成男

大竹市教育委員会賞

地下出口人は元気な風となる　広島　小坂　双弓

㈳全日本川柳協会会長賞

背で語る父になりたい酒を飲む　鳥取　徳岡　本丸

広島県川柳協会会長賞

命生む母に恐れるものが無い　千葉　福島　久子

◎小中学生の部

文部大臣奨励賞

元気な子見ると元気がわいてくる　広島　松本　千慶

国民文化祭実行委員会会長賞

本読んで大きなゆめがうまれたよ　東京　吉田　真歩

広島県知事賞

がんばれた今日ににっこり感謝する　鳥取　山田　千鶴

広島県議会議長賞

流された橋のあたりに虹がたつ　広島　森田　智子

第15回国民文化祭広島県実行委員会会長賞

おばあちゃん箱をあけると和紙だった　広島　村下　辰巳

広島県教育委員会賞

おみやげにやまのけしきをおくりたい　福岡　片山　直樹

大竹市長賞

にっこりといつもささえる友がいる　岐阜　末松　宏輝

大竹市議会議長賞

引き出しのおくにしまわれ和紙はがき　広島　楠本　ふみ

第15回国民文化祭大竹市実行委員会会長賞

ぼくらにも元気をはこべせとの海　愛媛　村上　賢晃

大竹市教育委員会賞

生まれればその瞬間から戦いだ　広島　浅田　里沙

㈳全日本川柳協会会長賞

和紙の中海の砂はまでっこぼこ　岐阜　石井　智也

広島県川柳協会会長賞

おみやげを待つ夜は時計が進まない　広島　下畑　拓也

第五回 時計台ビール川柳八選句発表

「ラーメン」

川柳塔社主幹 河内天笑 選

しばれるねラーメン食べて帰ろかな　舞鶴　川尻つえ子
本命でないなラーメン誘われる　小松島　角　晴子
北風と一緒に入るラーメン屋　立川　関本　秀雄
こだわりのラーメン出前などしない　旭川　柳　ジュン
ラーメンに食べたい理由なんてない　横浜　雨谷久美子
ラーメンの店でケイタイ切っておく　江別　松田　一洲
ラーメンの好きな男の箸を割る　掛川　野田みどり
ラーメンを食べると君を思い出す　深川　北川　健二
激辛麺はれて大人の仲間入り　岡崎　小田　正子
三分間カップラーメン生きてくる　枚方　前　たもつ
ラーメンの湯気がとりもつ仲直り　江戸川　神田　陽子
激安のラーメン味も負けてない　佐賀　鷲崎ヒロミ
ラーメンマップ青春の旅日記　宇都宮　山本　和美
ラーメンの汁まで飲んで生き返り　大宮　吉田　信子
お土産はラーメンはしごした話　香川　石川　泰子
一杯のラーメン君と食べたっけ　八女　野中　鮎美
一食はラーメンにする妻の留守　逗子　柳沢　恒星
ラーメン党瑞穂の国を脅かし　上田　青木　城風
ラーメンが味方二浪の窓明り　岐阜　岩田　明子
代返をチャーシューメンで引き受ける　金沢　城戸　達也

準特選

地ビールを壁に大きくラーメン屋　川口　小林　恒夫
ラーメンを地球の裏で恋しがり　仙台　藤田　志保

特選

ラーメン屋おやじの顔も味のうち　広島　樫山　昭章

第六回「酔う」13年1月末〆切
春季「新作」13年4月末〆切

ラーメン屋おやじの顔
味のうち
昭章

◉応募要領
官製ハガキに１句
（何枚でも可）
郵便番号・住所・氏名
年齢・電話番号を記載
の上、時計台ビール宛
お送り下さい

◉新シリーズが始まります!!
川柳塔社名誉主幹
橘高薫風監修
よろしくお願い致します

〒060-0051
札幌市中央区南一条東７丁目15-16
時計台ビール株式会社

第一回 春はくろぼこ川柳大会

日　時　**4月8日**（日）10時開場
場　所　気高町営国民宿舎「貝がら荘」
（山陰線浜村駅下車）
TEL〇八五七－八二－〇二三一
参加費　三〇〇〇円（昼食・大会誌呈）
題と選者　各題2句　締切正午
「火」　両川洋々選
「水」　土橋はるお選
「木」　金築雨学選
「金」　河内月子選
「土」　天根夢草選
事前投句（葉書に2句　出席者に限る）
「月」　鈴木公弘謝選
投句締切　**3月31日**（当日消印有効）秀句呈賞
懇親会　大会終了後（同所内）二〇〇〇円
事前投句・宿泊申込先　鈴木公弘
〒689-0343　鳥取県気高郡気高町飯里84－4
宿泊申込　3月5日まで（「はがき」にて）
「貝がら荘」は全室和室（2名～3名）
宿泊費六〇〇〇円（朝食付）
他の旅館紹介可・同室希望者等明記
主催・くろぼこ川柳会　**協力**・公家の会
後援・鳥取県川柳作家連盟

平成十三年度花久忌

日　時　**2月11日**（祝）午後1時から
場　所　東岳寺（花屋久次郎・安藤広重墓所）
足立区伊興町二二〇　Tel三八九九－三七九〇
地下鉄日比谷線・東武線・竹の塚駅下車・北へ七分
会　費　千円（三才・五客賞・粗菓呈）
宿　題（各3句吟）
「便り」　加茂如水選
「毛皮」　菱田満秋選
「呑気」　荻原柳絮選
席　題（各3句吟）
二題　題・選者当日発表
献　句　「一句」（記名して下さい）
締　切　午後2時　投句拝辞
柳多留の版元、花屋久次郎を偲ぶ「花久忌」です。多数の方々の御参加を、お待ちしております。
尚、御塔婆（四千円）お志の向きは、お早目にお申し越し願います。
主　催　川柳人協会　（担当　廣島英一）
後　援　関東地区各川柳吟社
事務局　川口市川口一－三－一－四〇一
（川口第5）　松岡葉路方
TEL〇四八－二二二－八〇八四

第21回ときせん賞作品募集

雑詠2句（未発表句）
選　者　大野風柳・河内天笑・去来川巨城
森中惠美子・小松原爽介
投句締切　**平成13年1月31日**消印有効
発　表　平成13年4月号誌上
賞　ときせん賞一名・準ときせん賞二名
佳作七名
投句料　『時の川柳』購読者五百円（定額小為替）購読者以外は千円（定額小為替・発表誌進呈）▼切手は拝辞
投句用紙　便箋大（B5サイズ）用紙に作品2句と住所・氏名を明記のこと
投句先　〒650-0026　神戸市中央区古湊通2丁目1－21　土井喜久栄宛
選句方法　無記名清記の上、選句一句ごとにその合計点で順位を決め、上位十句を入賞とする。
（平抜2点・五客3点・三才4点）
◎多数のご応募をお待ちします。
時の川柳社

あけましておめでとうございます

いずも川柳会

会長　尼　れいじ

会　員　一　同

事務局　〒693-0052　出雲市松寄下町２８４

吉岡　きみえ 方

TEL 0853—22—1068

謹賀新年〈ご支援をお願い致します〉

第九回　紙上投句川柳大会

締切日　平成十三年二月二十八日（当日消印有効）

兼題　各題未発表のもの二句出句（読み込み可）

「呼」（宮本美致代　門脇かずお）共選

「鼓」（土田　欣之　野口　節子）共選

「粉」（堀端　三男　徳田ひろこ）共選

「自由吟」…一句のみ

投句料　一、〇〇〇円　発表誌呈

投句用紙　自由・住所・氏名・所属柳会名を記入

投句先　〒六八〇—〇九四一　鳥取市湖山町北四丁目八一六

上田　宣子（電話　〇八五七—二八—〇七六六）

賞　鳥取市長賞他　日本海新聞紙上に掲載

主催　うぶみ川柳会

後援　鳥取市・新日本海新聞社・鳥取県川柳作家協会

湖山西地区公民館

あけましておめでとうございます

翠　洋　会

橋高薫風　穴吹尚士　石原靖巳　稲本凡子　井上照子　指宿千枝子　居谷真理子　梅田宣司　榎本日の出　榎本舞夢　岡本久峰　奥田みつ子　黒田真砂　古今堂蕉子　児玉蛙　小林周信　清水絹子　柴田英壬子　住谷石舟

高杉千歩　田中正坊　谷口義　津村志華子　寺井東雲　天正千梢　中澤伽羅　中村叡子　長浜澄子　西出楓楽　藤井正雄　古川喜美子　堀江光子　長谷川会美　安永春　山本希久子　米田恭昌　渡部さと美　渡辺富子

第87回 中部地区誌上川柳大会

兼題と選者（各２句）

「未　来」鈴木　泰舟（いしころ）
　　　　　進藤　一車（柳　　都）
「三　階」山岸志ん児（三重川柳）
　　　　　池　　森子（富 柳 会）
「残　す」桑野　晶子（札　　幌）
　　　　　赤井　花城（ふあうすと）
「すべて」住田英比古（番　　傘）
　　　　　青木　晴嵐（中　　日）

参加料　1,000円（発表誌４月号呈）
中日川柳会員は500円（切手不可）

賞　合点30位まで呈賞

締　切　13年１月31日必着

投句箋　各題別用紙１枚２句連記、横４㎝、縦19㎝位の白紙へ上部２㎝空ける。裏面に記名

投句先　〒460-0012 名古屋市中区千代田3丁目31-13-303　浜口剛史方
中日川柳会事務局
（☎052-321-2333）

主　催　中日川柳会

体験阿波踊り川柳大会

と　き　平成13年３月10日(土)

ところ　徳島グランドホテル偕楽園
徳島市伊賀1-8　℡088-623-3333

事前投句「　米　」久保田半蔵門・宮園　射月芳　共選

投句締切　１月31日　2句　欠席投句拝辞

投句先　〒537-0021 大阪市東成区東中本3-10-29　高橋定男宛
住所、氏名、電話、参加方法明記

宿　題（共選・締切13時30分）
「ひかり」板野美子・柏原幻四郎
「　波　」河瀬芳子・中田たつお
「踊　り」田頭良子・奥山晴生

体　験　阿波踊り
徳島の有名連による、本格阿波踊り鑑賞、体験可。懇親宴もあります。参加方法等詳細は高橋定男にお問い合わせ下さい。

主　催　川柳天守閣

献　寿　2001年

あけましておめでとうございます

川柳塔鹿野みか月

第21回の川柳大会に際し、ご支援ありがとうございました。
本年、第22回の大会は、第８回県民文化祭＆第25回鳥取県川柳大会＆国文祭とっとりプレ大会10月21日(土)開催に協賛です。
皆様のお力添えを祈念して、心よりお待ち申しております。

顧問　小倉利男
相談役　土橋螢
会長　森山盛桜
副会長　中原諷人
会計　中原みさ子
事務局　徳岡本丸
大角正道
監査役　土橋はるお
山根茂

石尾かつ乃
乾喜与志
乾隆風
岩崎みさ江
大角幸代
太田幸枝
国森武子
黒田くに子
田村きみ子
津村八重子
土橋睦子

中原汲香
西川和子
吉田孔美子
加藤公子
竹森富久江
田中きみゑ
山岡久枝
吉田弘子
谷口百合子
ほか会員一同

※事務所：〒689-0405　鳥取県・鹿野町鹿野1279　中原諷人方
FAX・電話（0857）84―2100

明けましておめでとうございます

川柳塔わかやま吟社

主幹
牛尾緑良

顧問
野村太茂津

同人
小倉アサ
柿花紀美女
川上大輪
桑原道夫
小山太一
坂口公子
坂部紀久子
澤田和重
塩谷佐代子
芝あつむ
杉山精子
田中輝子
谷口信子
玉井豊太
垂井千寿子
寺田裕美
天満三千代
冨上光代
堂上泰子
中井栄美子
中後清史
中島正博
中田誠子
中村君枝
福田和子
福本英子
細川稚代
堀冨美子
堀端三男
松原寿子
宮口克子
宮園射月芳
山田高夫
横垣忠翁
ほか会員一同

例会　毎月第2日曜日　近鉄カルチャーセンター

事務局および投句先
〒641-0012 和歌山市紀三井寺111—2　牛尾緑良 方
TEL 073—446—2855

明けましておめでとうございます
ことしもよろしくお願い致します

米子　川柳塔きゃらぼく

青戸田鶴
足立由美子
池尾保子
石中時子
猪森スミヱ
大塚恵子
鹿島　繭
門脇晶子
木村富美子
木村春枝

小村てい子
さえき　やえ
澤田千春
塩谷八重子
白根ふみ
鷲見正子
田中亜弥
中井ゆき
中野弘子
野坂なみ

林　瑞枝
福代天雀
二岡初枝
政岡日枝子
光井玲子
三好寿々子
茂理高代
森脇　麗
八木千代
矢野満子

あけましておめでとうございます

竹原川柳会

〒725-0022 広島県竹原市本町１丁目14—３

小島蘭幸 方

会長 小島蘭幸
監査 時広一路
会計 岩本笑子
森井菁居
岡本清水
石原淑子
古谷節夫
藤解静風
古田太虚
三宅不朽
山内房子
ほか会員一同

あけましておめでとうございます

城北川柳会

会長　吐田公一

安達　はじめ
井上　白峰
池田　寿美子
石塚　順三
上田　登美子
宇野　義江
大内　朝子
大川　道子
太田　とし子
鍛原　千里
叶岡　史風
神夏磯　典子
川久保　睦子
川端　一歩
岸野　あやめ

喜多　佐津乃
栗山　チサ子
小泉　ひさ乃
小糸　昭子
坂上　高栄
渋江　博遊
鈴木　トヨ子
鈴木　政子
高杉　千歩
高橋　一枝
津村　志華子
寺井　東雲
都倉　求芽
中田　あい子
延山　みえ

野村　美代子
野呂　右近
橋村　容子
長谷川　春蘭
板東　倫子
本間　満津子
町田　達子
松岡　久留美
松岡　千恵子
松本　ただし
真鍋　藤子
丸岡　静枝
野村　八重
森杉　秀夫
吐田　公一

あけましておめでとうございます

西宮北口川柳会

例会　毎月第２月曜日午後１時　西宮市立中央公民館

（阪急電鉄神戸線西宮北口下車南３分）　プレラにしのみや4F

事務局および投句先

〒662-0841 西宮市両度町2—19—515　山　本　義　子

黒川紫香　正本水客　阿萬萬的　秋元てる　浅野房子　井上松煙　井上信子　石原靖巳　奥田みつ子　奥山美智子　小熊江美　小倉藍　門谷たず子　亀岡哲子　川見絹子

川島諷云児　神原文　菊池トミヱ　木村貴代子　久保まさお　久保田千代　黒田能子　小池しげお　小林周信　坂上高栄　住谷石舟　田中正坊　田辺鹿太　都倉求芽　冨山ルイ子

長浜澄子　西口いわゑ　西田柳宏子　野瀬昌子　長谷川春蘭　林はつ絵　春城年代　春城武庫坊　藤村〆女　古川奮水　牧渕富喜子　松下比ろ志　山崎君子　山本義子　吉田笑女

時計台の鐘の音を
心に響くおいしさにして

時計台ビール株式会社

〒060-0051
札幌市中央区南一条東七丁目15番16

明けましてお芽出度う御座います
元旦　今年もどうぞよろしく

香川県大川郡白鳥町

川柳塔おっぱこ吟社

会長　木村あきら
副会長　成重放任
会計　川崎ひかり

堤　くに子
岩倉文仙
向山治延
植田チカヱ
山崎はつ恵
工藤吟笑
神保坊太郎
池内かおり
松村輝夫
角尾いさむ
赤沢貞月
辻上よしみ
中塚寿々女
甚古正雪
原　まさる
田中なみ子
滝井　勝
山地マツエ
伊勢八重子

あけましておめでとうございます

NHK川柳教室

橘高薫風
北畑金治
藤井正雄
黒田能子
指宿千枝子
海老池洋
古川喜美子
三品征子
鴨谷瑠美子
前たもつ
田中節子
志田千代
野下之男
井上松煙
緒方美津子

井上信子
北野哲男
唐住実
三木愛子
谷鈴子
古今堂蕉子
矢倉五月
江見見清
大崎侑子
野島庄三郎
安達忠央
岩屋美明
福田満州
南原正和

明けましてお芽出とう御座います

川柳ふうもん吟社

会長　両川洋々
副会長　杉本孝男
〃　植田一京
会計　倉益一瑤
加藤茶人
萩原美雪
山本益子
永井三津子
伊勢田毅
中宗明
中村金祥
松尾喜雄
足立天翔

夏目健一
加島修
猪川由美子
横田春名
下田茂登子
岩原喬水
中山露山
河田のり代
米岡南亭
阿部初江
両川康博
谷本志げ緒

事務局　鳥取市二階町三—一〇二
〒六八〇—〇〇三三　植田一京方
例会　毎月第四日曜日　午後一時
鳥取駅構内　（シャミネ会議室）

あけまして
おめでとうございます

川柳クラブ
わたの花

川崎　友甫　山本　宏
服部　春子　八倉知佐子
平川　幸枝　乾　美代子
松葉　君江　篠原いつふみ
田中トシエ　井尻　民子
二瓶　道子　砂田八寿子
籾山　隆盛　与田　明
生嶋ますみ　坂本奈良司
吉村　一風　藤本　一道
大内　朝子　太田　恭一
村上　剛治　山本美千子
村上ミツ子　江波　正純
神原まさと　北村　賢子
中島　春江

新世紀
おめでとうございます

川柳塔　唐津支部

相葉　あき
井上　勝視
岩崎　實
市丸　晴翠
久保　正剣
宗　水笑
仁部　四郎
浜本　久仁於
樋口　輝夫
山口　高明
山門　幸夫
山門　タミ

あけましておめでとうございます

京　都　塔　の　会

会　員　一　同

南大阪川柳会

会　員　一　同

謹んで新年のご祝詞を申しあげます

高槻川柳サークル卯の花 一同

例会　毎月第三木曜日　正午　高槻現代劇場306号室

謹賀新年

岸和田川柳会

岩佐ダン吉　原　さよ子
島崎冨志子　田口　穣一
田中　文時　寺田　甚一
井伊　東吉　村垣鹿太郎
不破　仁緑　仲谷　弘子
長谷川呂万　善野　盛之
堂免　路子　加藤　基
原　苑子　宮野美津江
土橋　房枝　藪野ケイ子
柿花　昭二　徳庄美智子
高須賀金太　芳地　狸村

賀

21世紀新春

川柳ささやま社一同

季刊

川柳展望

年間誌代　¥四、九六〇（〒共）

〒563-0102
大阪府とよの町ときわ台3丁目4の17

川柳展望社

TEL　〇七二七―三八―一八四五
FAX　〇七二七―三八―六七七〇

あけましておめでとうございます

川 柳 大 阪

会員一同

大阪市交通局互助組合文化部・川柳部

あけましておめでとうございます

高田美代子
中島志洋
鴨谷瑠美子
太田扶美代
坂本和樹
川端六点
楠昭子
大橋鐘造
武部敦子
福田悦子
高田治子
他一同

川柳藤井寺

明けましておめでとうございます

平成13年 元旦

川柳の絆を太く太く綯う

川柳塔おおとり

会長 小林由多香 他会員一同

あけましておめでとうございます

三幸川柳教室 一同

事務局　〒640-0112 和歌山市西ノ庄239―23
桜　井　千　秀

新年おめでとうございます

東大阪市川柳同好会

会　長　片岡湖風　　副会長　吉川晋吾
句会部　澤村猪太郎　　会　計　森下愛論

もくせい川柳会

橘高薫風
黒川紫香
安藤寿美子
石原靖巳
江見見清
岡本吉太郎
河井庸佑
木村一笛
岸田知香子
小池しげお
住谷石舟
滝北博史
田中正坊
玉置重人
玉置英子
辻川慶子
西田柳宏子
藤村〆女
古川喜美子
松本ただし
満仲きく子
宮田禄骨

例会は毎月第3月曜日に開いています。お気軽にどうぞ。

謹賀新年

大阪川柳人クラブ

会長　礒野　いさむ
副会長　橘高　薫風
幹事長　西田　柳宏子

あけまして
おめでとうございます

はびきの市民川柳会

安芸田泰子
河井庸佑
徳山みつこ
西村りつえ
三好専平
森田四三郎
山本たけし
榎本吐来
酒井一壷
清水利武
塩満敏

川柳会　梨花

あけましておめでとうございます

青木夏生
杉森あき子
山本弥生
山脇美佐子
田渕未来
福本佐嘉恵
中村延代
坂本真由美
前田一枝
岩田輪多朗
浅井春生
宮木一夫
石上悦子
坂田和歌子

迎春　21世紀

目指す川柳　愛・生・住

今年も　・昨日を省み
　　　　・明日を希い
　　　　・今日を記録する川柳を……

—川柳ねやがわ　会員一同—
会　長　山本三郎
事務局　高田博泉

謹賀新年

エイシス堺

榎本日の出
榎本舞夢
大橋錦
源田八千代
梶本哲平
喜多美波
斎藤さくら
田中紫
津守なぎさ
冨山ルイ子
中崎深雪
中澤伽羅
中野健吾
西内朋月
樋口冬虹
藤田泰子
村上玄也
矢野梓
和田つづや

河内天笑

エイシス東大阪

生嶋ますみ
井尻民
伊藤博仁
内海綾乃
笠井欣子
神原まさと
吉川寿美
國見蘭香
熊代菜月
古手川光
飛永ふりこ
中岡妙子
西川更紗
星野きらり
堀富重
松岡久留美
安永春
山本宏至

あけましておめでとうございます

川　柳　塔　な　ら

宮口笛生
中原比呂志
米田恭昌
坊農柳弘
大内朝子
吉川寿美
宮西弥生
清水絹子
会員一同

賀　　正

川柳塔まつえ吟社

同人一同

〒690-0056 松江市雑賀町1686　恒松叮紅方
電話　0852―24―5450

あけましておめでとうございます

熊本川柳会

高野宵草
永田俊子
岩切康子

おめでとうございます

正本水客
黒川紫香
西田柳宏子
阿萬萬的
小池しげお
川島諷云児
都倉求芽
藤村メ女
竹内花代子
松川芳子
奥山美智子
冨山ルイ子

謹んで新年のご祝詞を申しあげます

うみなり川柳会

鳥取市相生町３丁目204
電話（0857）23—4672

あけましておめでとうございます

ほたる川柳同好会

橋高薫風
井上直次
田辺正三郎
高嶋勝
宮田禄骨
湯浅馬洗
月原方郎
滝北博史
富永敞子
岡本吉太郎
前田昭子
古川喜美子
嵯峨根保子
藤原桂子
田中蛍柳
松本ただし
池田善守
栗田久子
板山まみ子
出口セツ子
唐住実
ほか会員一同

定例句会・毎月第２火曜日午後・豊中市蛍池公民館

あけましておめでとうございます

川柳塔みちのく

主　幹　波多野五楽庵　　副主幹　斉　藤　劦

新年おめでとうございます

川柳若葉の会

橘高薫風
黒田能子
椎江清芳
辻川慶子
中井アキ
古川喜美子
宮本欣史子
宮崎弘直
宮崎シマ子
山内香住
吉田あずき

あけましておめでとうございます

八尾市民川柳会

会員一同

あけましておめでとうございます

川柳塔社

名誉主幹　橘高薫風
主幹　河内天笑
理事長　板尾岳人
副主幹　宮口笛生
副理事長　西出楓楽
常任理事　石原靖巳
大内朝子
奥田みつ子
河内月子
木本朱夏
高田美代子
寺川弘一
前たもつ
長浜澄子
中原比呂志
西口いわゑ
宮西弥生
山本希久子
山本義子
米田恭昌

川柳塔社常任理事会

頌春 堺川柳会

荒川磯子
以倉菜々
河内天笑
河内月子
河原文
神西小雪
小田星子
高井東雲
寺川楓
中川彰
長谷川満州
福井一二三
藤田泰子
藤本かりん
宮倉五月
矢本半銭
山

高野山合祀法要

平成十二年十一月十一日

今年は暖かい日が続いていたが、急に冬型気象になるという予報の朝、高野山は寒いでしょうと、みなみなコートを持ち大霊園前に集合した。

本年度物故者合祀法要は午後一時半から、川柳塔碑の前でおごそかにとり行われた。

新合祀者は諏訪柳々、福元みのる・松川杜的・辻白渓子・北山悟郎・田中透太・川上富湖・奥谷弘朗・林荒介・桝本蕗児・田辺灸六・石垣花子の十二名である。

四御遺族十二名に加えて先の合祀者三名の御遺族と総勢二十八名の参列があった。

ご読経のあいだ晴れてはいたが、時々雲が出て風も一段と寒かったのがかえって清々しく、「ああ高野山にお参りできた」の感が深かった。

故西尾栞先生の碑文と鮮やかなご筆跡に、先生をしのんでいろいろなお話が沸いていた。

麓から見た山々は青かったが、奥の院の参道、寺院の境内は美しい紅葉だった。

合祀法要参列の皆さん

天笑主幹のマイカーに、落ち葉を集めた大袋があった。聞けば腐葉土にされるとのことで、こうして落ち葉が生かされ土に還るのは、ありがたいことだと思った。

行事は無事終了し解散した。

（義子）

句会名	日時と題	会場と投句先
もくせい 川柳会	15日(月)午後1時から 調べる・シンボル・案内・自由吟	豊中市立中央公民館　阪急曽根駅南東歩5分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801　田中正坊
高槻川柳 サークル 卯の花	18日(木)正午から やがて・座る・ドラマ ささやく・自由吟	高槻現代劇場306号室　阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1142 高槻市宮田町3—8—8　川島諷云児
川柳会 梨花	20日(土)午後1時から 睦・光り・巻く・きらきら・雑詠	鳥取勤労者総合福祉センター　1F会議室 (鳥取駅南) 〒680-0044 鳥取市御弓町40-3 宮木方　坂田和歌子
城北 川柳会	20日(土)午後1時から 衿・スリップ・福祉・自由吟	中宮老人憩いの家 地下鉄千林大宮駅2号出口徒歩8分 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8　神夏磯典子
岸和田 川柳会	20日(土)午後1時半から 推定・成功・相当・大吉	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0827 岸和田市上松町610—85　芳地狸村
川柳 ねやがわ	21日(日)午前11時から 満足・占う・小説・(相撲吟)	寝屋川市民会館 京阪寝屋川市駅東口から市民会館前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9—9　高田博泉
岬川柳会	21日(日)午後1時半から トップ・部屋・支え・自由吟	岬町淡輪公民館 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
南大阪 川柳会	24日(水)午後6時から 一品・露地・羽振り・ニコチン	玉造老人憩いの家　JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18　寺井東雲
川柳クラブ わたの花	26日(金)午前10時から 駅・風邪・同じ	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16　吉村一風
東大阪市 川柳 同好会	27日(土)午後6時から スタート・祈る・嫁・野心	東大阪市立社会教育センター3F 近鉄布施駅北へ5分 〒578-0925 東大阪市稲葉3—3—21　片岡湖風
はびきの 市民 川柳会	28日(日)午後1時から 機会・荒れる・テーブル・「負担」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8—31—11　塩満　敏
川柳 ふうもん 吟社	28日(日)午後1時から ど忘れ・エンジン・ほらごらん	JR鳥取駅構内　シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3—102—2　植田一京
京都 塔の会	29日(月)午後1時から 蛇・……らしい・一途	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328　都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所（06-6629-6914）へご連絡ください。

１月各地句会案内

（開催日順）

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 なら	4日(木)午後1時から 雑煮・薬・祝う	船橋フロムワン（船橋商店街内） 近鉄奈良駅西へ7分・JR奈良駅北歩5分 〒636-0144 奈良県生駒郡斑鳩町稲葉西2-4-23 中原比呂志
尼崎 いくしま	5日(金)午後1時から 21世紀・白・雑詠(A·B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
富柳会	6日(土)午後1時から 白・熱・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩3分 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
川柳塔 みちのく	6日(土)午後4時から じゃっぱ汁・恐しい・腐る	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ2階「川柳道場」 〒036-8002 弘前市元大工町50-5 波多野五楽庵
川柳塔 唐津支部	7日(日)午後1時半から 早い・安い・水	唐津市栄町公民館 〒847-0082 唐津市和多田天満町1-2-13 仁部四郎
西宮北口 川柳会	8日(月)午後1時から 一年・気配・望み・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 プレラにしのみや 〒662-0841 西宮市両度町2—19—515 山本義子
ほたる 川柳 同好会	9日(火)午後1時から 初・すべて・自慢	豊中市立螢池公民館 阪急・モノレール螢池駅西へ150米 〒561-0864 豊中市夕日丘1—7—5 田辺正三郎
尼崎 尾浜 川柳会	9日(火)午後1時半から 祈る・動く・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 阪急武庫之荘北口から市バス㊽番尾浜2丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江5—2—47 田辺鹿太
堺川柳会	11日(木)午後1時から 進む・ごはん・しごと	堺市総合福祉会館3F 南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593-8305 堺市堀上緑町2—16—3 河内天笑
八尾市民 川柳会	11日(木)午後6時から 夢・日記・迎える・開く	八尾市文化会館4F 近鉄八尾駅東へすぐ 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
川柳塔 打吹	13日(土)午後1時から ムード・畳・法律	倉吉市上灘町上灘公民館 〒682-0805 倉吉市南昭和町21 野口節子
川柳塔 まつえ	13日(土)午後1時半から 吉報・蛇・祈る	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0859 松江市国屋町381 竹内すみこ
川柳塔 みぞくち	14日(日)午前10時半から 正月・蛇・雑詠	神奈備会館 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757—3 小西雄々
川柳塔 わかやま	14日(日)午後1時から 阿吽（あうん）・一丸（いちがん）・泡沫（うたかた）・親睦	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111—2 牛尾緑良

編集後記

○おめでとうございます。皆様には各々の想いで新年を迎えられたことでしょう。戦や災害のない、川柳を心から楽しめる21世紀であることを祈ります。
○昨年秋のある夜、例によって一晩中ラジオをつけて寝ていると、こんな言葉が耳に飛び込んだ。「あなたもクリックしませんか。短歌、俳句、川柳、自由詩をインターネットで受付ます。詳しくはアドレス○○○でご覧下さい」
○あわてて目を擦り、聞耳を立てた。募集しているのは奈良県で「平成万葉・千人一首」だという。川柳の選者は時実新子さんで、予備選された作品をインターネット上で公表すると共に人気投票をするとの事。
○半ねぼけ状態で聞くところによると、私のように情報機器音痴はお呼びでない様子。他の部門はともかく、現在の川柳人でインターネットを操れるのは、ほんの一握りと思っていたのは認識不足だったのかと、世の中から取り残された焦燥感に目が冴えてしまった。
○翌日気をとり直し、奈良県庁へ電話、募集要項を依頼した。すると面倒なことに返信用封筒に切手を貼って送れと言われ、また手書き派の悲哀を味わう。
○パンフレットによるとハガキでの応募も認められるが、募集・選定された作品は本にはならず、情報機器に保存して、インターネットでのみ公開される。またここで落込んだのだが、よく考えてみると、これが近未来の文芸の形なのであろう。　（ふ）

☆新年のお祝を申上げます。いよいよ新世紀の幕明けである。一九三五年生まれの私は、人生の大半を二十世紀に過ごしたことになるが何と言っても、世紀をまたいで生きることができたことは幸せである。
☆それにしても一年は早い。特に月刊誌に係わっていると一ヶ月がまたたく間、今これを書いてるのは実は十一月、二ヶ月を先取りしているので、一層月日を駆け抜けている感がある。
☆過ぐる十月に田辺聖子さんが文化功労者に選ばれた。大作家の聖子さんは雲の上の如き存在でありながら、なぜか身近く感じるのは、その庶民的お人柄と、何より我々の川柳に対するよき理解者だからであろう。「大阪的な大衆の慕わしさ、笑い、人間くささ。そんなものに文学性を与えたい」とおっしゃったが、これはまさに川柳の目指しているものと一致する。
　又彼女はエッセイの中で多くの人が「こうすればよかった」と過ぎし日を思うところ、「こうしなくてよかった」と思うと書いておられる。楽天的な性格で、何事もよい方に解釈されるという。過ぎたことをくよくよ思う私など見習わねばならぬ生き方である。（希）

ひとこと

誤用

　或る句会で、披講の際に選者が「夫が言う」を「つまが言う」と言ったが、「つまは夫です」と補足しないと「妻が言う」と誤解されるからと注意した。こうした例は沢山ある。女をひと、老母や亡母をはは、亡妻も亡夫もつま、これらは字数を揃えるためであろうが、その他に、坑山をやま、主治医をせんせい、戦友をともと言ったりしている。そして「彩」は「いろどり」であって「いろ」ではない。「湖」は「みずうみ」であって「うみ」とは読まない。こうした辞典にない読み方を誤用しているのは川柳界だけだろうか。
　もしそうだとしたら、他の文芸から嗤われているのではないか、どうもそこのところが気になって仕様がない。
（恒松　叮紅）

川柳塔・水煙抄投句用紙

きりとりせん

種目「　　　　」発表（**3月号**）

地名

姓・雅号

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人　・　誌友　マルで囲んでください。

本社１月句会

とき　１月６日（土）午後５時半
ところ　アウィーナ大阪　４階
天王寺区石ケ辻町19－12　電06・6772・1441
地下鉄谷町９丁目徒歩８分・近鉄上本町徒歩３分

兼題
「テーマ」　石原靖巳選
「開く」　木本朱夏選
「仲間」　安藤寿美子選
「ほめる」　板尾岳人選
「続く」　河内天笑選

席題　１題　当日発表（各題２句以内）
会費　1000円　投句料　500円

本社２月句会　７日（水）予定

兼題　「タクト」「偶然」「消す」
「渡る」「天」

作品募集

３月号発表（１月15日締切）

川柳塔（８句）　河内天笑選
水煙抄（８句）　板尾岳人選
愛染帖（３句）　波多野五楽庵選
茴香の花（３句）　西出楓楽選
課題吟（３句）
「早い」　酒井勇太朗選
「安い」　板山まみ子選
「水」　小玉満江選
初歩教室「壁」（３句）　吐田公一担当

４月号

課題吟「生まれる」「影」
「移る」
初歩教室「甘い」

「川柳塔」への投句について

(1)川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。
(2)愛染帖・茴香の花欄・一路集（課題吟）および初歩教室への投句は、同人・誌友に限り、川柳塔柳箋を使用してください。ただし茴香の花欄は女性だけ。
(3)各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。
(4)各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いいたします。

夜市川柳募集

第８回「吐く」　大西泰世選
ハガキに３句　１月末締切
投句先　〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方　堺川柳会

定価　六百円（送料92円）
半年分　四千円（送料共）
一年分　七千九百円（同）

二〇〇一年（平成十三年）一月一日発行
編集兼発行人　河内権治
印刷所　美研アート
〒545-0005　大阪市阿倍野区三明町二－一〇－一六
ウエムラ第２ビル２０２号室
発行所　川柳塔社
電話（〇六）六六二九－六九一四番
振替　〇〇九八〇－五－三三三六八番

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可

自費出版
川柳・俳句・エッセイ・小説

新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。
あなたの思いをかたちにします

美研アート

〒530-0022 大阪市北区浪花町9番4号
TEL (06) 6372−1178

KANSAI MAN

【イメージ・キーワード】
"Value for Human"
バリュー・フォー・ヒューマン

ミッシェル・アルクール

SUPER OSK
by OSK

オーエスケーの
紳士服

株式会社オーエスケー
〒540-0024 大阪市中央区南新町1−4−7
(06) 6941−9631

雑誌 05703—1